
いとしのあなた（シリーズ版）

猫吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いとしのあなた（シリーズ版）

【Nコード】

N5086L

【作者名】

猫吉

【あらすじ】

ずっと大好きだったあなた。例え愛のない政略結婚だったとしても、冷たい目しか向けてくれなくても、手を触れてはくれなくても、あなたはわたしの愛しい人。 本編は完結済み。続編や番外編を気ままに更新中

簡易登場人物表

初登場（？）時の設定です。人とか名前とか色々増えたり減ったり適当に。

●ティアファナⅡバークレー
夫大好きヒロイン。

●ケニスⅡバークレー
ツンデレが失敗しているヘタレな妻大好き夫。

●ディーンⅡアドルフⅡクリフォード
ティアファナの兄。鬱陶しいほど妹溺愛。

●ブレントⅡFⅡクリフォード
ティアファナの父親。娘溺愛。

●ロレッタⅡクリフォード
ティアファナの母親。故人。

●セーラⅡバークレー
ケニスの母親。色んな意味で息子とそっくり。

● ジョーイ＝バークレイ
ケニスの父親。

本編 前編

所謂政略結婚、だから愛などないとわかってるし、それを求めるには分不相応だとも理解している。 > b r <

けれど私は昔から彼が好きだった。 > b r <

まだ私が十にも満たない頃、うちで開かれたパーティーで彼に一目で恋に落ちてしまった。 > b r <

私とは十も離れた彼に一曲でもとダンスを誘う女性が囲んでいて、ただでさえ子供な私はダンスを誘うどころかまだ満足に踊れないほどだった。 > b r <

きつとそれは今でも変わらない。 > b r <

私が社交界に出るようになって、彼にとつて私は子供でしかなくて、たつた一度ダンスを踊る為にお互いの体に触れたきり。 > b r <
それも翌日の婚約発表の為だと知った時には泣くに泣けなかった。

> b r <

彼にとつて私はいつまで経っても子供で、そして彼の地位を不動のものにする為の足掛かりに過ぎない。 > b r <

何より彼は、そんな私の事が煩わしいのだろう。 > b r <

華やかな容姿に違わず誰に対しても笑顔を向ける彼は、私にいつでも冷たい目しか向けては来ない。 > b r <

何をしても失敗ばかりの私を子供だと言い、役に立つのは精々ファミリィネームくらいだと言う。 > b r <

そんなのが妻だと思われては敵わないと、余程の事がない限り私は彼の妻としてパーティーに同席すら許されない。 > b r <

病気がちだとされている私の代わりには、彼の隣として遜色のない美しい女性が並ぶのだそうだ。 > b r <

その女性達と過ごすのか、彼は私と数えるほどしか夜を過ごした事はない。 > b r <

便宜上ベッドは一緒でも——十五になった私は彼の妻となり半年経

つというのに、未だ処女だった。>br<

本当に妻とは名ばかりの私。>br<

結婚以前彼は華々しい女性遍歴を持っていた、例え名ばかりの妻であろつと手を出す気はないのだろう。>br<

それとも私はずつとこのままなのかもしれない、彼が誰かと作つた子供を精々育てるか……それも出来ないか。>br<

彼の母も、彼と同じく私の顔を見る度にその美しい顔を冷たく歪ませる。>br<

美しい庭をと思ひ庭を弄れば「野性の猿のよう」と言い、侍女から習つた手料理をと思ひ厨房に立てば「使用人の真似事をするほど暇なのか」と言われた。>br<

けれど私は彼の母——お義母様が嫌いではない、むしろ好きなのだ。>br<

彼が受け継いだその涼やかな目元、そしてそっくりな物言い、何にも動じず凜とした立ち振る舞い——彼が好きで好きで堪らないから、私はお義母様の事がとても好きだった。>br<

それに無視されるよりはずっといいと思つていた、夜会から歸つた彼は「ただいま」とも言つてはくれないけれど、それでも何も言葉をかけられないよりは、名ばかりの妻の存在すらも忘れられてしまふよりは、ずっとずっとよかった。>br<

だからもし私がずつとこのままの存在であつても、それでいいと思つていた。>br<

執事や侍女や使用人達は、私が彼やお義母様から何か言われているのを痛ましそうに見て私を氣遣つてくれるけれど、それは杞憂なのだとは何度も繰り返す。>br<

確かに私は美しくもなく、彼の隣に立つには分不相応で、妻としても名前しか役に立たない。>br<

言われる事は変わらないけれど、でもはつきりと言われているお陰で、最初の頃よりは随分マシになつて来たと思ふのだ。>br<
彼の愛を得られない事はわかつている、それでも私がもつと頑張れ

ば彼の子供を育てられる権利が与えられるような気がした。>br<
追い出されるのは嫌だった、——私は彼と少しでも繋がりを持って
いたいから。>br<

「まだ起きていたのか……それは俺に対するあてつけか？」>br<
今夜も遅くに帰って来た彼が窓辺で本を読んでいた私に向かって
言った。>br<

それでも早い方だった、遅いとなると翌朝か、翌日の夕飯も過ぎた
頃に帰って来る。>br<

今や社交界の内、誰も私の存在など気にする女性はいないだろう、
この夫でさえも。>br<

元々私は噂などには疎い方だが、今更耳に入れるでもなくわかって
いた。>br<

実際私が少しでも女性として目をかけられる存在だったのなら、彼
はもう少しでも早くに帰って来るだろうから。>br<

それに仕事も忙しいだろう、なのに顔を見れば小言を言わずにはい
られない女の顔を見に帰って来たくないと思っても道理だ。>br<
だから私は彼が私の顔を少しでも見ずに済むよう、ベッドにはなる
べく早くから潜り、彼が帰って来ているとわかってても寝たフリに努
めている。>br<

失敗してしまった。>br<

今日は昼間に少し貧血を起こし思ったより長く寝てしまった所為で
夜に寝付けなくなってしまったのだ。>br<

お義母様が外出していた時でよかったけれど、使用人の皆には余計
な心配をかけてしまった。>br<

早く眠くなるようになるとなるべく字数が多い本を読んでいたのだが、
それを追うのに夢中になって時間を忘れてしまったらしい。>br<
偶にこうして彼が早く帰って来る時があるので、夜更かしはしない
ようにしてたのだが……。>br<

「お帰りなさいませ旦那様。違います……その、面白い本だったの
で、つい夢中になってしまって……。すぐ明りを消しますから」>

b r <

彼が何かを言う前に私は手元の明りを消してベッドに潜り込んだ。

> b r <

こうして早く帰って来る時は、何処かに寄る余力もないほど疲れている時なのだと理解している。 > b r <

あまり私の顔を長く見させて態々余計に疲れさせる訳にはいかなかった。 > b r <

案の定彼はそれ以上何も言わずベッドに入り、いつものように私に背を向けて寝転がる。 > b r <

ほんのりと香る、うちのものとは違う石鹸の香りに寂しさが募った。 > b r <

正直に言えば私は彼の皮肉のような言葉も嫌いではない、無視されるより嬉しかったし、意地悪な……まるで残酷な子供のようなその顔も好きだったから。 > b r <

それにその顔は、普段優しく大人びた色気を含む彼の笑顔とは違い、私だけに向けられるものだと思ったから。 > b r <

きっと誰もそんな顔を見たくないと思っていたとしても、私が唯一独占出来る彼のものだったから――。 > b r <

身動きもせず寝息を立てる彼の背中を横目で見て、私もいつしかうとうとしながら眠りに就いていた。 > b r <

近く遠いこの距離のままでいい、彼がもう二度と帰って来なくなる事などないように、私の前から消えてしまう事などないように、：

…そう祈りながら。 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r <

翌朝早くから仕事に出かけた彼は珍しく私に皮肉も小言もなく「行ってくる」としか言わないまま出て行った。 > b r <

やはり仕事が忙しいのだろうか。 > b r <

私はふと昨夜彼の体から漂った香りを思い出して、ふと息をつきながら庭に出た。 > b r <

彼と結婚してから彼が家でシャワーを浴びるのを見た事がない、

年の離れた兄も仕事場は喫煙者が多く煙草の匂いを持ち帰るのが嫌だからと職場にあるシャワーを使用していたのは知っているが、まさか彼もそうだと流石に思わない。 > b r <

他所の女性の所でも、そこにどうあれ寄って来れるだけの余力があるのならまだいいかと思えた。 > b r <

私が何か言葉をかけたところで「君のような子供に心配されるほど、俺は仕事が出来ていないと言いたい訳か」と言われてしまうので、言葉にして体調を気遣う事すら出来ない。 > b r <

精々私はこうして少しでも家を整え、祈る事しか出来ないのだ。 > b r <

彼の言葉すら聞けず寂しいと思う反面、それほどまでに疲れてしまっているのなら帰らなくてもいいからとさえ思ってしまう。 > b r <

例え彼が他の誰かを愛していたのだとしても、時折でも顔を見せ、何でもいいから言葉をかけてくれるのなら私はそれでいい。 > b r <
でもいつか、疲れている彼に対してこうして何も出来ない私から、彼が消えてしまうような気がしてならなかった。 > b r <

「まあ、今日も庭弄り？夫が仕事で忙しくしているというのに、お前ときたらまるで夫に野良仕事をさせられているとも言いたようですわね」 > b r <

芽吹いた植物を植え替え終わった私はかけられた声にはつと顔を上げて手に付いた泥を払った。 > b r <

「申し訳御座いません」 > b r <

けれど私に出来る事はこのくらいしか思い浮かばなかったし、私は花が好きだった。 > b r <

父や兄からも淑女として庭弄りなどは止めなさいと言われて来たが、幼くして亡くなった母の為に彼女の好きだった花を季節毎植えるのが私の楽しみでもある。 > b r <

そして癖のようなものだった。 > b r <

「それとも何かしら、お前はうちで雇っている庭師の仕事が気に入

らないと？」>br<

「そんな事は……っ」>br<

ここで雇われている庭師の仕事は素晴らしいものだった、それに私が母の為に植えているのだと言った花の他の種類を知人から譲り受けて来てくれたり、沢山の花が咲くように色んな知識も披露してくれて、私は彼がとても好きだった。>br<

そんな彼を私の為に侮辱される訳にはいかない。>br<

首を振った私に、お義母様は片眉を上げて私を見る。>br< その様が彼に本当によく似ていて、私は思わず見惚れそうにさえなった。>br<

「大奥様！その辺りは昨日肥料を蒔いた所です、大奥様の靴が汚れてしまいます！さあ、こちらへ！」>br<

私がそれ以上言葉も紡げなくなっていると、反対側の花壇の植え替えをしていた庭師が飛んで来てお義母様を庭から連れ出してくれた。>br<

一瞬振り返って心配そうに私を見る庭師に大丈夫と笑って見せてから、けれどお義母様に見付かってしまった今日はこれ以上庭弄りも出来ないと途方に暮れてしまった。>br<

確かに今時の貴族は使用人達に任せるのが一般的で、私の家——昔ながらの貴族のように自らが庭の手入れをしたり食事の用意をするなどはない。>br<

……といっても、私の家とはにかく古過ぎるのだ。>br<

しかしその家名故に彼と結婚出来たのだから、私に不満は何もない。>br<

今の貴族女性はパーティーに出たり、家に友人を招いてお喋りをするのが常らしいが、病気がちという事になっている私がそんな事を出来る訳もなく……とにかく他にやる事がない。>br<

流石に好きだったピアノも毎日となっては飽きてしまい、それに曲が終わるとお義母様が「どうしてもっと静かに過ごせないの」と暗に五月蠅かったと告げに来る。>br<

最近はお義母様の目を盗んで庭弄りか簡単に出来るお菓子作り、そして読書か刺繍。 > b r <

好きだと思っていたはずの読書も刺繍も、こう毎日ではやっぱり飽きてしまった。 > b r <

それに本来私は体を動かす方が好きだし性に合っていると思う。 > b r <

しかし今日も大人しくじっとしているしかないかと、私は重い足取りで家に戻り始めた。 > b r <

すると玄関先で丁度郵便配達人を帰らせたばかりの執事と出くわした。 > b r <

私を見るなり心配そうな顔付きになったところを見ると、さっきの遣り取りを聞かれていたらしい。 > b r <

そうでなくともこの家の使用人達も大体私を見れば心配そうな顔付きになるのだが。 > b r <

……幾ら杞憂だと言っても聞いては貰えない。 > b r <

彼らは私がいつ出て行ってしまうのではないかと心配しているようだが、追い出される事はあっても私が出て行く事は有り得ない。 > b r <

追い出されないようにと、頑張っているのに。 > b r <

「奥様、お手紙が届いております」 > b r <

「ありがとう」 > b r <

差し出された手紙を受け取り、思わず出そうになった溜息を噛み殺した。 > b r <

私が幼い頃に母がなくなった所為か、父と兄は異常に過保護なのだ。 > b r <

この結婚にも散々反対して私がどうしても頼み込んでやっと了承を貰ったくらいだ。 > b r <

以来週に一度はこうして手紙を寄越す、顔を見せに帰って来いという催促なのはわかっている。 > b r <

けれど私は結婚して一度も実家に帰った事はなかった。 > b r <

父と兄の顔を見たいとは思うのだが、毎日とは言えず少ししか会えない彼との機会を少しでも逃したくない。>br<

しかし私の結婚生活ぶりを噂で二人も聞き及んでいるのだろう、最近には特に内容が重複した挙句数枚にも渡っている。>br<

申し訳ないながらも今日は随分薄いなと思い、自室に戻って手紙の封を切った。>br<

けれど私が帰らないでいられるのもこうして週に一度は兄の几帳面な字を見る事が出来るからだとも思う。>br<

ふと笑みを零しながら手紙の内容を追った私の目は、徐々に見開かれた。>br<

実家から連れて来た侍女を慌てて呼び、掻い摘んで手紙の内容を話すと私と同じく侍女の顔がさつと青くなる。>br<

「とにかく私、行つて来るわ」>br<

「ティアファナ様、私も参りますっ」>br<

「そ、そうね、来てくれると嬉しいわ。でもなんと言ったものかしら……まさかこんな話を話す訳にも……」>br<

「そうですね、知られたらそれこそ何を言われるかわかったものじゃないです。どうせ不貞などと言いついて離婚を——」>br<

その言葉に私は思わず息を飲んだ。>br<

「あ、い、いえ！……大丈夫ですよティアファナ様。とりあえずこの事は内密に。デーン様も一緒になのでしょう？でしたら大事にはならないかと思えますし」>br<

「ええ。……馬車の準備をお願い」>br<

「わかりました、お任せ下さい」>br<

出て行った侍女を見送りながら、私は力の抜けるままソファに座り込んだ。>br<

「……こんな事が知れたら、……彼はきつと離婚と言うでしょうね

……」>br<

例えそうでなくとも、もう二度と言葉をかける事もなくなるかもしれない。>br<

今度は言葉だけでなく、軽蔑や侮蔑の眼差しを向けて来るに違いない。
>br<

妻として名前だけの役に立たない子供どころか、最低な人間として見られるに違いない。 >br<

——彼はきつと、名ばかりであつても妻の浮気を許さない。> b
r <

私は重い溜息を吐き出し、馬車の用意が出来たという言葉に従って重い腰を上げた。 >br<

世に言う政略結婚で俺は十五になったばかりの妻を手に入れた。

$$\begin{matrix} > \\ \mathbf{b} \\ r \\ < \end{matrix}$$

結婚できる年とはいえ、成人まで後三年もある。 >br<

けれど早い手を打たねばならなかった、それだけ彼女の背負う家名は絶大なものだ。 >br<

特に成り上がり貴族と呼ばれるうちのような家には喉から手が出るほど欲しいもの。 >br<

そうでなくとも王家直屬の古の家名となれば、狙う者は引く手数多だ。
>br<

だから多少卑怯な手と言われても、俺は手段を選ばなかった。 > b
r <

一人娘である彼女を早くに手放すのを散々渋られたが、こちらの条件に向こうも折れ、そうして俺は婚約発表をした週末には挙式をするという異例のスピード結婚をした。 > b r <

ぐずっている間に他の連中に手垢を付けられたのでは堪ったものじゃない。 >br<

幼くして母を亡くした彼女は父と兄に溺愛され、社交界デビューを果たしても滅多にダンス一つ許されず、男に免疫がないの是一目瞭然だった。 >br<

そんな彼女を丸め込むなど場に慣れた男なら容易いものだった。ただろ

う。>br<

實際碌に話した事もなく、一度ダンスを踊ったきりの男の申し込みを、最終的に彼女自身も受け入れた。>br<

尤もどれだけ父や兄が反対しようと彼女が嫌がろうと、断り切れぬ条件を提示したのはこちらだが。>br<

しかしその一度きりのダンスで、すでに彼女が俺に傾倒した事は見て取れた。>br<

だからこそ翌日には婚約発表をするという強気にも出られたのだ。

>br<

世間知らずな少女が、容姿もさる事ながら場慣れしている俺に好意を抱くのも無理はないだろう、無駄に女遊びをしていた甲斐もあったという訳だ。>br<

結婚後も彼女は一途に俺を愛している、どれほど酷い皮肉を受けようが、幼くして妻に娶った少女は他を知らないばかりに。>br<

——無論、それが狙いだったのもある。>br<

可愛くて、手に入れたくて、欲して仕方がなかった。>br<

初めて見たのは彼女の家の夜会での事だった、まだ出席も許されないほど幼かった彼女がちらりと顔を覗かせ、それを見た瞬間から俺は今もそんな思いに囚われ続けている。>br<

勿論困惑したし何度となく自問もした、それまで女という女を渡り歩いて来たはずの俺が、十にも満たない少女に一瞬で囚われてしまったなどと容易に認められるはずもない。>br<

しかし彼女を見かける度、そしてデビューを果たし日に日に美しくなっていくかという彼女を目にし続けた結果、……葛藤などどうでもよくなった。>br<

あの無垢な存在を手に入れない、そして自分だけが彼女を意のままにし、触れる権利を得たい。>br<

彼女が結婚出来る年まで待ったのは、俺に残った最後の理性だっただろう。>br<

結婚をし俺の妻となった彼女が、俺の一挙一動に一喜一憂する様は

快感と言つてよかつた。 > b r <

それまで女性にはそれなりに愛想がよかつたと思つていた俺が実はサディストだったのだと、彼女によつてしらめられた気がする。 > b r <

または、彼女が俺をそうさせるのか。 > b r <

とにかく何を言われても一途に俺を慕う彼女の姿は可愛かつた、泣きそうになりながらも寸でそれを堪える姿などは絵画に収めたいほど絶品だ。 > b r <

正直彼女の年など俺の腹が決まつた時点で無関係だった、しかし渋々といった体で結婚を承諾した彼女の父と兄が「成人するまで手を出さない事」などという条件を付けて来た為に、こちらも苦汁の思いで我慢をする羽目に至っている。 > b r <

しかし夜に営まない事は彼女の不安を煽るらしく、寝ている間無意識に擦り寄つて来る彼女を見る事が出来るので多少の溜飲は下げられた。 > b r <

甘やかしたいと思わない訳でもない、むしろする気ならどこまでも際限なく俺は彼女を甘やかすだろう。 > b r <

けれどそれは本来の意味で彼女が俺のものになつてからの楽しみとして取つておく事にした。 > b r <

今はまだ泣くのを堪えながらもそんな視線を俺に向ける彼女を楽しみたい。 > b r <

急がずともいい、彼女が俺から離れる事などないのだから。 > b r < 全く、あの溺愛親父と兄貴の事は言えない。 > b r <

余計な知識を与えたくなくて、雛鳥のような彼女を自分の懷にだけしまつておきたくて、俺も彼女をパーティーの類からは殆ど遠ざけている。 > b r <

もつと、ずつと、そのまま、——俺だけを一途に愛していればいい。 > b r <

彼女に出会ってから他の女とは二人きりで会う事さえしていなかったが、それすらいつそ清々しく感じる。 > b r <

仕事で家を空けている親父に偶に会つとその事で散々からかわれ
ても、もう他の女の匂いさえ煩わしくなった。 > b r <

欲望を霧散させる為にその分を仕事に打ち込むようになった、家で
シャワーなどは以ての外だ、彼女が使う場所かと思うと寝てる間に
も我慢が出来そうにない。 > b r <

それに今の内にある程度の基盤を固めておけば、彼女が成人する頃
には充分に時間が取れるようになるだろう。 > b r <

そうなつたら新居を探して思う存分二人でいられる。 > b r <
俺がそっくりそのまま性格を引き継いだような母親からは文句を言
われるかもしれないが……。 > b r <

母はとにかく彼女がお気に入りだ、美しい容姿もさながら、今時
の貴族女性には珍しい気質で、あちこちに出ては嫁自慢をしまくっ
ている。 > b r <

しかしながら俺とそっくりなので、彼女を虐めて泣きそうな顔を見
るのも好きという、我が母ながら厄介な性格だった。 > b r <
彼女はそんな母に対しても尊敬の念を抱いているようで、そこがま
た母を助長させているのだと思う。 > b r <

……俺が言つのもなんだが。 > b r <
それでも俺が仕事に出ている間は彼女を母に監視……。いや、見守つ
て貰っている立場だ、文句は言わないのが得策だろう。 > b r <

使用人達などは俺が帰る度、異口同音「奥様虐めはお止め下さい」
と言つ。 > b r <

あれだけ愛らしい彼女の姿を見て胸を痛ませる人間の方が普通だろ
う、……。俺と同じような意見を母以外に抱く人間がいたら即刻解雇
だ。 > b r <

勿論彼らは俺達がやっているのは愛故であるとわかっている、例外
は彼女が実家から連れて来た侍女くらいで、その侍女には本気で恨
まれているというか憎まれているだろうが。 > b r <

しかし俺から言わせれば、手を出す事を禁じられている状態で甘
やかしたらそれこそ手を出さずにいるなど不可能だ。 > b r <

ドロドロに甘やかして、そして融け切ってしまうのは俺自身だろうと思う。 > b r <

「なんだ、溜息なんかついて、この新婚が。幸せの溜息ってか？」 > b r <

じろりと同僚を睨むと肩を竦めて愛想笑いが返る。 > b r <

「まあ折角の新婚なのにこう忙しくちゃ溜息も出るよな。お前だつて可愛い可愛い奥さんが待つ家に毎日帰りたいたるうに」 > b r <
俺が自分から仕事を更に買って出ても知らぬ口調で言う。 > b r <

彼女の何を知って可愛いなどと抜かすか、腹の立つ。 > b r <

「奥さんまだ十五だよな？つーかほぼ犯罪だろ、幾ら結婚出来る年つつつてもさ。今時王族でさえ早期結婚なんざやらんぜ？そりゃあの家名は魅力的だけど、お前んちだつて困ってる訳でもないくせによつぽど可愛いんだろうなあ？女渡りのお前が結婚したとたんお誘い一つ頷かなくなつて。パーティーじゃ本気で添え物状態の女が泣き喚こうが、当の色男は現地解散ときた。あれだろ？奥さんをパーティーに出さないのは病弱じゃなくて監禁よろしくやってるからだろつて、専らの噂」 > b r <

ニヤニヤと言い放つ同僚の頭に平手を飛ばしても効果はないようだ。 > b r <

そういえば大分前にまだデビュー前だつた彼女が成人したら狙つてみようかななどと言つていたのを思い出す。 > b r <

……殺すか。 > b r <

「見た事もないくせによく言うな」 > b r <

溺愛親父が手を回していたのか、彼女が出ていた場は少なかった上に相当の人選がされていた。 > b r <

俺が呼ばれていたのは当時勢力を付けて来ていた家と、女に困らなかった俺自身が子供を相手にはしないと思つたからだろう——とんだ誤算だろうな。 > b r <

「だから噂じゃ聞き及んでるよ。月の女神って渾名されてるの、知

つてるか？」>br<

「なんだそれは」>br<

「儂くも美しく愛らしい美貌に加えて、閣下やお前が雲みたいに彼女の姿を隠しちまつて、その姿は滅多に拝めない月のようだから、だ」>br<

まあ、言い得て妙だなと思った。>br<

確かに彼女はあれでまだ十代の半ばかと思うほど美しい、今はまだ年相応の愛らしさが目立つが、成人を迎える頃には傾国の美女となつていてもおかしくはないだろう。>br<

しかし、と俺は不意に笑みを零す。>br<

本当に俺が雲なのなら、それこそ彼女を包んで何者の目にも触れさせないように出来るだろうに。>br<

彼女が完全に眠りに落ちたのを見計らつてから漸く細く柔らかな体を抱く腕を、日に日に俺は解くのが難しくなっていると感じる。>br<

いつその事、義父や義兄との約束など破り捨ててしまおうか。>br<

彼女の愛する二人からも引き離して、彼女の放つ光を俺だけが独占出来るようにしてしまいたい。>br<

まだ半年、あと二年半——これほど自分に忍耐がないとは思わなかった。>br<

いや、半年もつている今、多大な忍耐力だと自分を褒めるべきか。

>br<

「——失礼します。速達が届いています」>br<

突如した執務室にノックに返答すれば、配達人は終業時間ギリギリでやって来たのか、確認印を確かめもせず慌しく帰って行った。

>br<

俺に届けられた手紙の主の名に、俺は知らず眉を寄せて引出しからペーパーナイフを取り出す。>br<

「どうした？」>br<

俺の様子を奇妙に思ったのだろう、訝しげな目を向けた同僚に何も言わず、俺は一枚きりの手紙に目を走らせ——すぐさま立ち上がった。>br<

「おい？」>br<

「——悪い、今日はここまでだ」>br<

「何だ？何かあったのか？」>br<

「……………妻に何かあったらしい」>br<

俺はそれだけを言い捨てて、仕事場を後に馬車に飛び乗った。>br<

「ティアファナが家を出て男の元へ行つた。至急帰宅されたし——それだけが書かれた手紙がぐしゃりと俺の手の中で歪む。>br<有り得ない——そう思った。>br<

ティアファナの性格や身边は結婚前にもある程度調べていたし、そして結婚後も確認した。>br<

とにかく溺愛され隔離されて育つたような彼女は家を行き来する同年の男友達ですらいなかったようだし、結婚してからも手紙を寄越して来るのは専ら鬱陶しい義父か義兄と、あとは数人の女友達だけだったはずだ。>br<

家を出てまで会いに行くような男と知り合う機会も今は俺自身が潰している。>br<

有り得ない、…………有り得ない、はずだ。>br<

可能性はない訳じゃない、女友達を通じて暗号を送れば——しかし彼女がそんな事までするだろうかとすぐさま否定する。>br<

例えば恋い慕う男がいたとして、夫の目をそうして欺く事を由とする彼女ではない。>br<

まさしく蝶よ花よと育てられたティアファナはしかし我儕どころか貞淑で、一度信頼した者に対しては何処までもその信頼を貫き通し、他人を欺く事など決してないと言える。>br<

仮に俺への愛がなかうと、自分の夫という立場に対しても自分が人の妻であるという事に対しても相応の信頼と敬意を払う。>b

r<

15にしてそれでは頭の下がる思いだが、とにかく彼女は神に仕える聖女のような。>br<

けれど、けれど……。>br<

恋は人を狂わせる、確かに人である彼女とてそうだ、俺のように泥臭い欲望をその身に宿さないなどとは言えない。>br<

どこまでも利己的で彼女の一途な思いを手の平で弄んでいるような俺など、彼女がそんな恋をしてしまえば風前の灯もいいところだ、比較にもならず俺は即座に切り捨てられる。>br<

俺は無意識に額に手を当て重苦しい溜息を吐いた。>br<
愛されていると傲慢になり、彼女を見縊っていたつけが来たのか。

>br<

いや違う、俺は何度となく繰り返した。>br<

ティアファナは俺を愛している、俺だけを愛している。>br<
そう思っても、今まで楽しんですら見て来たはずの彼女の泣きそうに潤んだ瞳が、今は俺を責めるかのように脳裏に映る。>br<

まだ幼い彼女に優しい言葉一つかけてやらず、散々放っておいて今更引き止める権利があるとも思うのかと……。>br<

「ああ！帰って来たのね！遅いわ、遅過ぎるわよ！」>br<

「母上、小言は後に。一体何があつたんです？彼女は何処へ？」>

br<

家に帰るなり飛び込むように俺の前に出て来た母を諫め、俺は矢継ぎ早に問うた。>br<

すると俺に似た顔をさつと青褪めさせ細い眉根を寄せる。>br<
「私、聞いてしまったのよ。あの子が侍女と話している所を。あの子の兄から手紙が来たらしいの、その後よ、不貞がどうの離婚がどうのって！きつとあの子の兄が手引きしたに違いないわ、場所はわからなかったけれど、兄も一緒だとか話していたのよ。ああ、ああ、ケニー！止めて頂戴、今すぐあの子を連れて帰って！」>br<

徐々に母の言葉は悲鳴となつて、それを聞き付けた侍女達が慌て

て駆け出して来て母を奥へと連れて行く。>br<

不貞？離婚？ティアフアナが？>br<

強く否定していた思いは今、細く心許無いものとなって俺の中でグラグラと揺れた。>br<

確かに義兄は最初から義父以上に俺の素行を知って毛嫌いしていた、最後までしぶとく反対していたのも義兄だった。>br<

彼女が不貞を働く事など俄かには信じ難いが、俺と離縁させる名目でならティアフアナと誰かを引き合わせる事を義兄なら企めるかも知れない。>br<

執事長を呼び彼女が使った馬車の行方を調べさせるよう命じてからも、俺は椅子に腰を落ち着ける事も出来ずその場に佇んだ。>br<

俺がそう思いたいだけなのかも知れない、彼女は俺を愛し俺から離れる事はないと俺自身が信じ込みたいだけなのかも知れない。>

br<

彼女は突き放してばかりの俺でなく、他の優しい男の手を取る事を選んだのかも知れない。>br<

「――許さない」>br<

奥歯を噛んだ口から零れ出たのは最早言葉ではなく、呪いの呪文のような、酷く潰れた音だった。>br<

今更手離せる訳がない、彼女がどんなに嫌がっても泣き叫んでも、

――手を離せば生きて行けないのは俺の方だ。>br<

どんな事をしても愛されて傍に居て貰えようと試しては安心していた。

>br<

子供だったのは、俺の方なんだ。>br<

本編 後編

出向いた先は私の結婚前によく兄が仕事帰りに寄ってお土産を買って来てくれた店の前だった。 > b r <

小さなティーサロンなのだが、そこではお土産用に小さな小瓶に入ったジャムやクリームを売っていて、私はその美味しさと可愛さのファンだった。 > b r <

結婚後もこうして町を出歩くなど本当に滅多にない私はこれを機に店の中を見たいと思ったのだが、馬車を降りたとたん駆け寄って来た物体に抱き付かれ、願いは結局夢である事を悟った。 > b r <

「ティア！ああ、ティア！私の可愛いティア！久しぶりだね、本当に久しぶりだ、よくその美しい顔を見せておくれ」 > b r <

妹の私が言うのもどうかと思うのだが、兄は基本的におかしい。

> b r <

多分私が世間と隔離されて育ったようなおかしさと似て、母を亡くし忙しい父に代わって私の面倒をよく見てくれていた所為なのではないかと思う。 > b r <

恐らくそうして自身が育てたに等しい私は、兄にとって理想の女性像そのものなのだろう。 > b r <

夫に比べても遜色のない美形で、私が知る限りでも夫と並んで社交界の花形とまで言われた兄であるが、理想の女性像が生きて現実にいるお陰でどうも女性と付き合っても夫とは違った意味で長続きしないようだった。 > b r <

二度目の離婚を経た後、父ももう兄に結婚をせつつくような真似はしなかった。 > b r <

私と比べて妻に嫌気が差している息子に何か言うのも諦めたのかどうか。 > b r <

そう思い、私は不意に夫の事を思い出して胸が痛くなった。 > b r <

彼はどうかだろうか、兄と同じように、他の女性と私を比べて何かを思ふのだろうか。>br<

私が如何に役立たずな子供であるか……誰かに話したりするのだろうか。>br<

元々彼は兄と違い女性と結婚する気などないように振る舞っていたと思われても仕方がない生活だったと聞いている、そんな彼が事実その結婚をしたからといって思想を変えたなどと誰も思うまい。

>br<

しかし嫌な所があつても私に話してくれたらと思う、見向きもされないのはそれより辛いから。>br<

「兄様、それで——あの方は？」>br<

「おおそうだった」>br<

そうだった、ではない。>br<

「先日戻つて来たんだよ、そして真つ先にうちに来るなりお前の結婚の話を聞いて手が付けられなくなつてな。そのままお前の家に乗り込みそうだったから、今日はお前に来て貰ったんだ」>br<

「ええ……多分そういう事ではないかと。けれど、どう話しているものでしょう？あの方、昔から私の話など聞いているようで聞いていなくて……」>br<

侍女を馬車に置いてから兄に手を引かれ目の前のティーサロンに入つた私達は同時に溜息を吐き出す。>br<

ロバートは所謂私の幼馴染みだった、兄より三つ年下の彼は私のもう一人の兄のような存在であつたのだが、しかし彼の言動は日増しにおかしさを増し始め、今ではもういつからそうだったのか思ひ出せもしない。>br<

彼が「兄」ではなく「男」として私を見始めたのはそれくらい昔の話だった。>br<

それに気付いた兄達がロバートを私から引き離すようにしたものの、彼はあちこちで私を嫁にすると豪語していたらしいとは結婚前に聞いた話だ——尤も私が隔離されるように育てられていたのは周知の

事実で、誰も信用はしなかったそうだが。 > b r <

私が出席出来るパーティーはいつも彼が仕事で不在の間に行われていた。 > b r <

それなのにその間に夫であるケニスが名乗りを上げてしまったものだから、当時兄は文字通り私の前ですら地団太を踏んだ。 > b r <
しかし兄はこのままでいてロバートに攫われるくらいならと苦汁の決断をした（と自ら言った）ようだ。 > b r <

確かに私はロバートがあまり好きではなかった、正直に言えば兄と慕っていた彼が目の色を変えた時点で畏怖の対象になってすらいた。 > b r <

本当に幼い頃はその意味がわからなかったものだが、今となっては何故彼を恐れいていたのかわかる。 > b r <

ロバートにとつて私は自分の目を惹く容姿をただだけの欲望の対象に過ぎなかったからだ。 > b r <

私の意思など関係がない、ただ私は彼の中で悦楽を引き出す為の肉の塊だったという事だろう。 > b r <

兄のように慕っていたままなら、或いは私は彼に恋をする事が出来たのかも知れない。 > b r <

しかし彼はその猶予を与えてはくれなかった。 > b r <
今になって思う、恋を知った今だからこそ思える事だ。 > b r <

彼に恋を出来ていたのなら……もしくは私もその欲望を受け入れたかもしれない。 > b r <

何故なら私は今確かに、体で引き止める事が出来るのなら、それを躊躇う事などないと知っているから。 > b r <

こんな私を知っても、兄はまだ私に理想の女性像を重ねられるのだろうか、ふと苦笑した。 > b r <

「仕事終わりにこっちに来るように言つてある。人の目が多くあればあいつもそうそう下手な真似は出来ないだろうからな」 > b r <

確かに今の私の家に乗り込まれたのでは止める人間が使用人達ばかりになる、ロバートもうちほどではなくとも古くから続く名家だ、

彼に下手な手出しをしてただで済むとも思えない。 > b r <
それにあんな優しい人達の手を彼の事で煩わせるのも嫌だった。 >
b r <

何より、彼のような人がいる事がわかつては、私はそれを理由に
離縁を言い渡されてしまいかも知れない——それが一番恐い。 > b
r <

私あまり外出出来ない理由はそこにもある。 > b r <
結婚前も出掛ける時は必ず傍に兄か父か護衛がいなければ、必ずと
言っていていいほど見知らぬ男性に声を掛けられたり、酷い時には連れ
て行かれそうになった。 > b r <

私が誘いをかけているのでは勿論ないが、男を引き寄せていると離
縁の理由にされるかも知れない。 > b r <

なんて利己的でない女かと我ながら呆れてしまう。 > b r <
夫が私を本来の意味で妻に迎える事などないとわかっていながら、
偽物の立場にしがみ付いている。 > b r <

あまつさえ私はそれを盾に、彼と他の女性の子供が出来たらそれを
取り上げてしまおうとさえ企んでいるのだ。 > b r <
これではロバートと何の変わりもない、いつから私はこんな女にな
ったのだろう。 > b r <

「ティア、大丈夫だよ、お前には指一本触れさせない。私がお前を
守るからね」 > b r <

テーブルの向こう側から手を伸ばし、そつと私の頬を撫でる兄に
私は力無く笑みを返す。 > b r <

やはり兄は知っているのだろうかと思えた。 > b r <
本来その役目であるはずの私の夫は、とすれば好都合としてこの
状況を傍観するかも知れないと。 > b r <

——いいや、ダメだ、そんな事にはさせない、私は彼の傍から離
れたくない。 > b r <

どんなに利己的だろうと私欲に塗れたものであろうと、私はただ、
彼の傍にいて時折でいいから彼の関心を向けられていたいのだ。 >

b r <

そこに愛がなくともいい、私はもう、彼への愛を消す事など出来ないから。 > b r <

他所の女性を愛したっていい、だから私の居場所を奪わないで。 > b r <

「兄様……」 > b r <

夫は私が何処に出かけようと嫌味を言いこそすれ気にはしないだろうが、内情はどうあれ他所の男と会ったなどと知られては困る。

> b r <

離縁の理由など、彼に与える気はない。 > b r <

今日も夫は帰らないかも知れないが、執事に今日の外出の説明だけはお義母様にして貰おうかと思つた時だった。 > b r <

兄や夫と同じくらいの長身だが、それよりは少し体格のいい彼がサロンに姿を見せた事で、言いかけた言葉が喉の奥に引っ込んでしまふ。 > b r <

店内を見渡し私を捕えたその眼光に、私は久しぶりに体を震わせた。 > b r <

どうしてこうも違うものかと思う、もし夫にこんな目で見られたのだとしても私は嬉々として受け入れるだろう。 > b r <

大股で進んで来るロバートの気配に気付いたのか、兄が立ち上がって私と彼の間に立ち塞がった。 > b r <

兄に促され一応腰を落ち着けたものの、彼の目は未だ私を舐め回し突き刺すようにして来る。 > b r <

向かいに彼を座らせ私の隣に腰を下ろした兄は、静かに切り出した。

> b r <

「単刀直入に言うが、これ以上ティアに手出しはするな。勿論今後付き纏うのは言語道断だ」 > b r <

私が聞き慣れぬほどの兄の低い声にも彼は動じなかった、そもそも彼はこうなつて以来私の話も兄の言葉も聞き入れようとはしない。

> b r <

まるで夫から拒絶された後の私の未来の姿のようで空恐ろしくなつた。>br<

でも本当に夫が私に嫌悪の目を向ける日が来るとなったら、私は自分の気持ちを断ち切らなければならぬ、縋りたい居場所から去らねばならない。>br<

愛しているから今は踏み止まれる、けれど夫がそれに嫌悪を持つたら……終わリなんだ。>br<

それともいつそ、私はロバートを畏怖しながら、どこか羨ましいのだろうか。>br<

完全に私の気持ちなど無関係に求め続けられるその欲があれば、私は諦めなくてもいいのではと暗い希望を見出す。>br<

……本当に、なんて女だろう。>br<

父や兄がよく私に向かって言う「美しい」なんて言葉は到底不相応だ。>br<

「ロバート、私も幼い頃から共に過ごしたお前を見切りたくはない。しかしティアファナを泣かせるのは我慢が出来ない」>br<

ああ……兄は理解してくれていた、私が今やどれほど夫に恋をしているかを。>br<

テーブルの下でそつと重ねた手を強く握り返される、とても心強く感じた。>br<

「泣かせる？そんな事はしない。ティア、お前の夫はあのケニスだろう？俺だってあいつの事は聞き及んでいるさ。女にだらしない最低野郎だ。そんな奴が夫で、お前こそが我慢をしているんだろう。今だって何処の女とよろしくやっているか知れたもんじゃない。俺はティアを救いたいんだよ、愛してるんだ、わかるだろう？」>br<

「ロバート、私は我慢なんてしていないの。私は夫を……ケニスを愛しているわ。私の夫も愛する男性も、この先ケニス以外には有り得ないの。貴方は私にとって今も兄以上にはなれないのよ。お願い、わかって頂戴」>br<

「そう言えと言われているんだろう。あの成り上がりはお前の家名欲しさに幼いお前を攫ったんだ。犯罪だ！少女のお前にあいつはどれだけ好き勝手したんだ？その体をあいつは——」>br<

止めてと張り上げそうになった言葉は、突如テーブルに付かれた手によって遮られた。>br<

憶えている、どれだけそれを見て触れられた回数が少なくとも、感触もその形も何もかもを憶えている。>br<

その手は、私が愛するたった一人の手。>br<

「人の妻に品のない妄想は抱かないで貰おうか」>br<

——ああ、これは夢だろうか？>br<

「……ケニス……ッ」>br<

「ディーン殿、私の妻をおかしな男に引き合わせるのは止めて貰いたいな」>br<

刺すように睨むロバートの視線を物ともせず、ケニスは兄に目を流した。>br<

「五月蠅い。お前が絡むとややこしくなるのは目に見えてる」>br<

「それはそちらの家の事で、俺の知った限りではない」>br<
脳が痺れたかのように震えるのがわかった。>br<

あれほど彼の言動を目の当たりにして来たというのに、そのどれもが今の彼と重ならない。>br<

これほど冷たい目をしてはいなかった、これほど苛立ちを抑えた低い声をしていなかった……。>br<

私が見ていた彼は、一体……。何？>br<

「ロバート」ウォルダンだな。これ以上俺の妻におかしなやつかいを出して来るのなら、俺の名にかけて全力でお相手しよう。：

「ディーン殿も承知していて欲しい」>br<

「——……わかった」>br<

顔を赤くしてただ睨むしかないロバートに対し、兄は苦虫を噛み潰したという顔で頷く。>br<

それを目で確認したケニスは何を思ったのか、私の腕を引き立ち上がらせそのまま店を出た。> b r <

「夫の居ぬ間に他所の男に会いに行くとは、随分だな？」> b r <
彼が乗って来たのだろう馬車に引き摺られるようにして乗り込み、混乱をしていた私の頭上に言葉という冷水が浴びせられる。> b r <

制裁は、これから始まるのだろうか。> b r <
どうしたらいい？> b r <

会話の流れでロバートがどんな関係であるかは知れたはずだ、私の言葉も聞いていたに違いない。> b r <
けれど私がどう言おうとも、極端な事実は今彼が述べた通りだ。> b r <

私が彼の妻でいたのはたった半年だ、その間共に過ごした時間は全て思い出せるほど少ない、触れられもせず共に夜を過ごした事など眠るのが惜しかったほどもつと少ない。> b r <

それでも続けていけたのなら、少しずつ数は多くなっていた、そう願っていた。> b r <

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ、まだ終わりにしたくない、もつと傍にいたい、少なくともいい多くなっていい——彼の存在を近くで感じたい。> b r <

「どうして、泣く？」> b r <

言われて泣いていた事に気付いた、これだけ泣いた事が未だ嘗てあっただろうかと自分で驚くほど大粒の涙がぼたぼたと膝に落ちてドレスに染み込んでいく。> b r <

「わ、かれたく、ないです……お願い、です……っ……私を、捨てないで……」> b r <

言葉にして願う事は出来なかった、そんな言葉自体に嫌悪を持たれたくはなかったから。> b r <

けれどこのまま終わってしまうのなら、見つとも無くていいから全てを曝け出して縋り付いてしまいたい。> b r <

「——許さない」> b r <

掠れた声に、今度こそ私の全身が震えた。 > b r <

しかしそれを止めるかのように私の体を纏ったのが、彼の腕だと知るには随分時間を要した。 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r <

散々急がせた馬車のけたたましい音も聞こえないほど、耳鳴りでもしたかのように俺の耳には何も届いてはいなかった。 > b r <

これから目の辺りにする事になる情景を思い浮かべては否定し、だが否定し切れず、八つ当たりのように御者をせつつ。 > b r <

どう冷静に考えようとしても必ずどこかで矛盾が生じ、これだという結論に至らない。 > b r <

しかし目的地に近くなるにつれ、俺の心は荒れ狂う海のようなうたが嘘のように静まり返った。 > b r <

どうあっても、俺の結論は、結果はかわらない。 > b r <

ティアファナを手離す事など出来ない、例えそれが彼女の幸せの為であつても、俺と共に不幸に引き摺り込む事になつても。 > b r <

知らず自嘲が零れた。 > b r <

異性相手にこんな事を思つた事は一度としてない、一度だつて相手と自分の未来など想像だにしなかった。 > b r <

まして自分自身が幸か不幸かに導くなど、考えた事もない。 > b r <
泣く顔もどれだけ好きでも彼女を不幸せにしたい訳じゃない、誰

より幸福にしてやりたいと思う。 > b r <

だがそれも、他の誰でもなく俺の手でという前提だ。 > b r <

彼女が他の男の手を選ぶのなら俺は、彼女の不幸さえ厭わない。 >

b r <

こんな身勝手な男だから、彼女は俺のいない隙を狙つて他の男に会いに行つたんだろうか。 > b r <

けれど大いに見当違いな事だろう、自分に好意も関心もないと思つていた夫は、この世界中の誰より独占欲で身を焦がしているのだから。 > b r <

そして目的の店に入り何度も頭の中で想像した光景が現実となった

瞬間、確かに俺は想像が想像の域を出ないという事を知った。>br<

元より俺は何に対しても衝動的になる事はなく、好きでやって性に合ってると思った仕事でさえも別に捨てても惜しくはないくらいだった。>br<

女性に対してはそれが大きく出た結果だろう、ついでに言うところ巻き込まれるのも煩わしくて、相当勘違いした女でない限りその付き合いは精神的に乾き切ったものだった。>br<

けれどどうだ、今俺の理性は焼き切れそうなほど心許無いものとなり、僅かなきっかけで衝動的に何を仕出かすかわからないほど――殺意を感じていた。>br<

気付かれないよう、そつと三人が囲むテーブルに近付けば、聞こえて来る会話からどういった状況かが読み取れる。>br<

何より兄の手前だというのに目の前のティアファナに対し欲望を隠さない男の目に、俺は手を出さないようにしているのがやつとだ。>br<

それを治めたのはティアファナの言葉だった。>br<

この俺が一目見て心を奪われ、過ごす内に完全に骨抜きにされた少女を、わかっていたようでわかつてはいなかったのだと思い知らされた。>br<

これほど美しい女を手に入れながら、俺は己の卑しさのあまり、彼女でさえも見誤っていたんだ。>br<

愛さずにはいられなかったと、今確信する。>br<

俺の内なる感情を引き摺り出し醜くも美しくもする、たった一人の女。>br<

本来俺が触れていい存在ではなかったのかも知れない、世間的な事にしても彼女は成人にはまだ間がある子供だし、そもそも俺のようにな女性に対してお世辞にも素行がいいとは言えなかった男が手を出す相手ではなかっただろう。>br<

けれど法律上という立場を手に入れてすら身勝手に振る舞っていた

俺に、彼女は見るに眩しい姿と言葉で俺への愛を示してくれた。>
b r <

本当にわかっていなかったんだ。> b r <
彼女がどれだけ美しいのか、どれだけこんな俺を愛してくれている
か。> b r <

言い訳をして逃げ続けている男には本当に相応しくないほど。> b
r <

決めた、俺も覚悟を決めた、至極今更ではあったが。> b r <
どんなに俺が苦しくもと辛かろうと欲望と戦い耐える事になろうと
も、俺が俺の手で、彼女を幸福にするのだ。> b r <

だから、ティアファナ——俺は到底許せない。> b r <
お前が離れて行くのを、俺はどうしたって許せやしないんだよ。>
b r <

「ティアファナ……ティア、泣くな。泣かなくていい」> b r <
義兄と胸糞悪いウオルダン家の馬鹿息子から引き剥がすように連
れ去って、押し込んだ馬車の中で俺に捨てないでくれと泣く少女を
抱き締める。> b r <

信じられないだろうな、俺がこんなに情けない男だなんて。> b
r <

だから俺はずっと隠しておきたかったんだ、気のないフリをして、
それでも縋ってくる目が愛しくて、ずっとそうして愛されていたく
て。> b r <

こんな男だと知れたら、逃げられてしまうと思ったから。> b r <
でもわかったんだ、どうしても俺自身が彼女を手放せない事を。

> b r <

その為に、俺は自分とも向き合わなければいけない事を。> b r <

「ケニ、ス……さま」> b r <

「いいよ、ケニスでいい。そう呼んでくれ。君は俺の妻なんだから。
昔も、この先もずっと、俺の愛する妻は君だけなんだから」> b r <
俯いてぼとぼと涙を落としていた彼女の顔が上げられ、涙に濡

れた大きな目が見開いたまま俺を捕えた。 > b r <
俺はそれに文字通り心臓までを鷲掴みにされたように捕らわれていた。 > b r <

まるで夢との境目を探す迷子のような揺れる瞳。 > b r <

俺は堪らなくなつて小さな顔を両手で包み、親指でそつと溢れ出る涙を拭つた。 > b r <

確かに彼女はまだ子供という年齢だ、大人びていながらもまだあどけない表情が少女だと訴えている。 > b r <

突き詰めれば俺もウォルダンの馬鹿息子を言及出来る人間じゃないだろう、そんな彼女を自分の腕だけに閉じ込めて余す所なく触れてしまいたい欲望ははつきりと存在する。 > b r <

しかしそれと同時にその欲望にも匹敵する思いが溢れ返つて渦を巻く。 > b r <

あれほどまでに自分勝手な悦楽を満足させていた彼女の泣き顔を、笑顔に変えさせたい。 > b r <

——なんて、愛しい。 > b r <

「愛しているよ、信じられないかもしれないが……俺にはもう君だけだ。いや、最初から、俺が愛しているのはティアファナ、君だけなんだよ」 > b r <

ひくりと彼女の喉が鳴つた次の瞬間には俺を見上げたままだった瞳からぼろりと大粒の涙が零れ出た、それを合図に彼女がくしゃりと顔を歪めて俺の胸に飛び込んで来る。 > b r <

俺自身こんなに求めていたのかと驚くほど、俺の体は彼女の華奢な体に吸い付くように重なつた。 > b r <

彼女が眠りに落ちてからそつと抱き締め感じていたものとも違う、俺の中のぽっかり空いたスペースにピタリと収まる充足感。 > b r <
今とて浅ましく彼女を押し倒してしまいたい衝動に駆られない訳じゃない。 > b r <

けれど彼女も俺を求め、俺の体に回される腕の強さが、ぬくもりが、これほど満たしてくれるものだとは知つた。 > b r <

本当に俺は今まで何をやっていたのだと、情けない限りだった。

> b r <

どれだけ浮名を流しても俺は何も知らなかった、何も知ろうとしていなかった。 > b r <

ティアファナがそれを教えてくれる。 > b r <

そのぬくもりで、その一途な愛で、その全てで。 > b r <

「好きです、好き、愛してます。私、ずっと、ケニスの傍にいたいんです。私、ずっとずっと、ケニスの奥さんでいたいです」 > b r <
俺の首にしがみ付いて泣きながらそう訴える彼女に眩暈がした。

> b r <

俺はどうしてこんな幸福から逃げ続けて来れたのだろうか、今更不思議だ。 > b r <

抱き合う事だけが全てでなく、感じた事もない蕩けそうな快樂という名の幸福が、すぐ目の前にあったのに。 > b r <

「俺もだ、愛してるよ、愛してる。ずっとだ、逃がしてなんてやらない、俺から離れるなんて許さない。君はずっと俺の妻だ、俺がこの手で幸せにしたいと思う……俺を幸せに出来る、たった一人の人だよ」 > b r <

馬車の振動にも揺ぎ無く、俺達はそのまますつと隙間がないほど抱き合つて口付けを交わした。 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r <

家に帰ったとたんティアファナに突進して来た母は涙ながらに家を出て行くなど言い、暫く彼女に宥められ事の顛末を漸く聞き終えたかと思えば容赦なく息子を甲斐性なしと殴り飛ばした。 > b r <
自分の行いは棚に上げて理不尽だ、……慚然としていたらそんなところも本当によく似ていると彼女に微笑まれ、至極複雑な思いを味わった。 > b r <

散々夕食だのお茶だのなんだのと彼女からべつたりと貼り付いていた母をやつとの思いで引き剥がし、彼女を連れて寝室に戻った俺は覚悟を決めて今までの懺悔をした。 > b r <

呆れたような彼女の顔に俺は思わず青褪めかけたが、それは妻になるというのに制限を設けた父と兄に対してだったようだ。>br<しかし俺もティアファナのような娘か妹がいたらと思うと決して否定は出来ない行動で、それについては口を噤む事にしたが。>br<

「あの、呆れてしまわないで下さいね？」>br<

そう何度も俺に念を押して彼女が言う。>br<

「私は、ケニスが抱いて下さるのなら、それを願っていました。…私、もっと貴方と繋がっていたかったです。言葉を掛けて下さるだけでも嬉しかったけれど、それだけでは…引き止められない気がして。体でも何でも、ケニスが私に少しでも関心を持って下さったらと——」>br<

それを自分から言うような教育を彼女は受けてはいない、そう願う事さえ彼女にとっては酷く戸惑う事だっただろう。>br<

しかしそれでも俺を求めてくれた、その存在全てで俺を繋ぎ止めようと必死に思ってくれていた。>br<

感動するというのはこういう事なのだと、俺はじんわりと痺れた頭の隅で思う。>br<

義父や義兄の約束事など破る気なら破れた、出来なかったのはひとえに俺自身がこの未だ嘗てない愛情と欲望に恐れを抱いていたからと、彼女を傷付け恐れられるのが怖かったのだ。>br<

美しく強く心優しい愛情豊かな女だ、——俺の負けなど最初から決まっていた。>br<

「愛している、ティアファナ」>br<

言葉にした事もない、意味もわからなかったこの言葉。>br<頭で理解するものでも経験で積み重ね得るものでもなかった、これは溢れ出る抗えない真実だ。>br<

抱き締めれば精一杯で抱き締め返してくれるこの存在を表す全て。

>br<

「でも違っただんですね」>br<

「え？」>br<

ぱつと愛らしい笑顔を俺に向けた彼女を、思わず俺も見詰める。

> b r <

「私を大事に思ってたから事なのに、私ったら……」> b r <

「君が気に病む事じゃない。君が望んでくれるのなら俺は——」> b r <

今すぐにでも君を抱きたい——続けるはずの言葉は声にならなかった。> b r <

「私、成人まで精一杯努力します！」> b r <

「……え？」> b r <

「ケニスの思いに応えられるよう、私、精一杯努力して貴方に釣り合う女性になってみせます！」> b r <

「……いや、ティア……」> b r <

「私、絶対に素敵な女性になってみせますから、待っていて下さいね！」> b r <

——…………。> b r <

「……ケニス？どうしたんですか？そ、そういえばお仕事で疲れたのに来て下さったんですね……気が付かなくてごめんなさい！今明りを消しますから、ゆっくりお休みになって下さい」> b r <

——…………。> b r <

ぱたりとベッドに倒れ込んだ俺に甲斐甲斐しくシーツを掛けながらティアファナが部屋の明かりを消して、俺の隣に潜り込む。> b r <

r <

ベッドサイドのランプに手を伸ばす間際、俺を振り返り花のように微笑んだ。> b r <

「今夜は、もつと傍で寝ても構いませんか？」> b r <

俺はそれに答えるようにランプの明りを消した手を彼女に伸ばし、ゆるやかに、しかししっかりと抱き締め胸にその体を収めた。> b r <

安堵の、そして温かい息がどちらからともなく零れる。> b r <

「愛しています、ケニス。……私の、旦那様」>br<

もし、今俺の顔が彼女に見えていたなら、どんな顔に映ったろうか。>br<

酷く情けなくて、——とても幸せそうな顔に見えているといい。

続編 前編（前書き）

本編より後日、妻として正式？夜会デビュー編。

続編 前編

自分の過去の行いがどれだけのものか、愛しい妻を迎えた彼は嫌
と言っほど思い知った。 > b r <

そして如何に自分がそれまで愛を知らなかったのかだ。 > b r <
以前はそれなりに楽しんでいたと思われた男女の恋愛は、ともす
れば体や言葉を使っただけの、盤上のゲームに等しいものだったの
だ。 > b r <

ちつとも思い通りに行かず、まだ成人前だという少女相手に自分は
滑稽なまでに負け続けているに違いないと、彼はしかし満足も覚え
た。 > b r <

思春期特有とも言うべきか、それとも少女の性質故か、彼の妻は
酷く一途で健気だ。 > b r <

勿論それに日々心底惚れている事実はある、だがどれほど何かを仕
掛けようと、時にそれに引っ掛かりながらも真っ直ぐに彼を目標
し突き進む彼女に対し、勝機など見えないだろう事も明らかだった。
> b r <

「とつても楽しみです！」 > b r <

そう言い切った彼女の曇りない笑顔に顔を緩ませながらも、彼は
思わず胸中で天を仰ぎたくなる。 > b r <

自分の過去を問い質されれば離婚と言われても可笑しくないのだが
(そもそも彼女が世間知らずでもなく一途でもなければ婚姻に応じ
すらもしなかったらう)、男心はなかなか複雑で、嫉妬一つ覺
えてくれない妻が愛しいやら寂しいやらといった具合だ。 > b r <

半月後に予定された夜会はそこそこ大きなもので、そこには彼が
過去に「ゲーム」を行っった相手も多く出席するだろう。 > b r <
今まで彼が彼女をひた隠しにして来たツケが大きく払わされるとい
う訳だ。 > b r <

いっそのまま彼女を病弱だと偽り、自分の腕の中だけに閉じ込め

てしまおうかと思っていた彼の算段は、今度開かれる夜会の主催者である女主にはお見通しだったのかもしれない。>br<

何せ彼の妻をそれこそ溺愛して止まない彼の母とその女主は切つても切れない幼馴染みであつた。>br<

この屋敷の主人である彼よりも早くに招待状を奪い取つたかの母は、目を爛々と輝かせて、毎日毎日義理の娘をああでもないこうでもないとして着飾る事に余念がない。>br<

そして今まで妻としてちつとも彼の隣を許されなかった彼女は、彼の隣に相応しくあるうと、義母の傍目には拷問と呼べるような毎日にも嬉々として応じている。>br<

不当とも呼べそうな扱いを受けていた彼女を目の当たりにして来た使用人達も日々彼女に手を貸し喜びこそすれ、誰一人夫である彼の心労などわかるうともしてくれない——自業自得ではあるのだが。

>br<

「ケニス様、如何なされました。そのようなお顔をなさつてはティアフアナ様をご心配をなされますぞ」>br<

執事長のセバスチャンでさえ主の心配よりその妻の心配だ。>b

r<

隣の部屋から妻と母の弾んだ声を聞きながら、ケニスは深く椅子に腰掛けブランデー入りの紅茶を口にした。>br<

吐き出した溜息が長く重かつたのに自分の心情が表れている気がしてならない。>br<

「わかつているだろう。幾ら彼女が聡明でも、相手は女狐のような女なんだぞ。しかも今回はここぞとばかりに群れてやって来るに決まっている。世間知らずなティアがあの子達の攻撃に耐えられると思うか？」>br<

そこまで言う女性ばかりをわざわざ相手にしていたのは主人だろうにとは、この屋敷に長く仕え賢明な執事長は口にしなかった。>br<

しかし無言で目を伏せたセバスチャンの言いたい事はわかってしま

い、ケニスには苦い顔になる。>br<

彼の妻となつて以来滅多に顔を見せなかったティアファナが、今回初めてと言つてもいいほど大きな夜会に出席するとなつて、噂は瞬く間に広がつた。>br<

それもそうだろう、彼女は母を幼くして亡くしてから父と兄に溺愛され社交界デビューも人よりはやや遅かつた、その上デビュー後も内輪のパーティーだけに出席し相手は厳選されダンス一つマトモに踊つた事はない、そんな中成人前にも関わらず半ば強引にケニスが彼女を攫つてしまつた挙句妻となつてからも滅多に夜会には出席しない、本当に彼女を見た事があるのは極一部の人間だつた。>br<

そんな彼女がもう初めて公にされると言つてもいい今回の件だ、騒がれない訳がない。>br<

そもそもまだ15にして輝くばかりに美しいティアファナはその極一部の人間にとつても語り草だつた。>br<

好奇心と下心に目を細めて待つだろう男達からも、病弱だ知らぬ存ぜぬで隠し通して来たと言うのに。>br<

それに加えて今やぶつとりと遊びを絶つてしまつたケニスへの不満を彼女にぶちまけようと女性達も手薬煉引いている。>br< 遠巻きながらもティアファナとて耳にはしてるだろうが、實際目にすれば純粋な彼女が傷付かないでいられない訳がないだろう。>br<

本当はティアファナが少しでも難色を示せばどんな手を使ってでも招待は欠席と捻じ伏せるつもりだつた。>br<

そして少しでも過去夫と関係を持ったであろう女性達へ嫉妬してくれば、後でどんな償いをさせられようと、ケニスは大いに満足するはずだつたのだ。>br<

予定ではそのはずだつた、全く寸分の狂いもなくそのはずであつた。>br<

ケニスが仄めかして言つたが聡いティアファナはそれを理解したは

ずなのに、ちつとも全く全然嫌な顔をせず、それどころか考える余地もないという即答で「とっても楽しみです！」と言い切ったのだ。
> b r <

そして残されるはむしろ妻の思考が全く理解出来ない夫ばかりとなる。
> b r <

普通は嫉妬の一つでもするものではないだろうか、幾ら過去から彼女との結婚半年……その三カ月後の現在に至るまで本当に妻に対してもではないが良い行いをして来たとはお世辞にも言えない夫に對してであつても。
> b r <

確かに現実には愛を知る者にとつては遊び以下の行為で今残るものなど何も得ていないとはいへ。
> b r <

ケニス自身は例えティアフアナがどうとも思つてない男からとて声を掛けられるのも不快だし、出来るならば誰にも見せたくはないし、結婚後も未だにあの手この手で里帰りさせようとする彼女の父兄にも辟易としている、勿論ティアフアナを一目見ようと今回の夜会に挙つて出席して来る下衆な男達は以ての外だ。
> b r <

——つまり不肖の夫は自分のように嫉妬一つしてくれない事が悔しくもあり寂しくもあつたという訳だつた。
> b r <

ティアフアナが言葉一つ投げていようものなら喜び勇んで欠席と言ひ張つたであらう愚息の行いなど手に取るようにしてわかつていた母親はとつくに出席と再三に渡り先方に念を押していたのだが。
> b r <

「……一途過ぎると言うのも贅沢だろうか」
> b r <

答えは当然わかつていながらケニスは溜息と共に呟く。
> b r <
如何せんティアフアナは育つた環境の所為か、あまり人に対し負の感情を見せない事はわかつていた。
> b r <

彼がどれだけ欲望を持て余しそれを自制するのに彼女に辛く当たつても、ティアフアナは恨み言一つ言うどころか自身が至らないと責め、挙句15の年ですでに完璧とまで呼べるであらうマナーを更に不動のものとし、更には最近に至つてケニスの仕事まで雑務ではあ

るが手伝うようになっていた。>br<

そんな娘に義母は益々嬉々として自慢の娘だとあちらこちらで言い回っているのだが、若く美しく妻として非の打ち所もない彼女を人の目に触れさせたくもない息子にとっては大変迷惑な話だ。>br<

しかし愛する夫の為に日々活き活きと動き回り花の如く微笑む妻に対し、やはり夫も口を挟めず……。>br<

だからこそティアファナが夫の過去に嫉妬するより、夫に相應しくあろうとする事は明白だった。>br<

大体にしてケニスが結婚後もなかなかパーティーに同伴を許さなかったのすら自分の至らなさだと思い込んでいるのだから、ティアファナは漸く挽回の機会が与えられたと思っっているのだ。>br<それについて何度誤解だ六階だとケニスが言い募ろうとも、言い換えれば頑固な妻はちつとも夫に対し頷いてはくれない。>br<

全くもって自業自得という訳だ。>br<

「ケニー、見て頂戴！私の娘の素晴らしい事と言ったら！」>br<鼻息も荒く大よそ淑女とは思えない威勢のよさでドアを開け飛び込んで来た母にケニスは僅かにむっとする。>br<

「私の娘」より前に、「俺の妻」だろうと言いつけたのは、その素晴らしい娘が母の後ろからおずおずと顔を出した所為だった。>br<

ティアファナの母親をケニスも肖像画で見た事はあったが、そこそあちらは病弱という名に相應しい風貌で、確かに美しかったがそれ以上に触れてはいけないという強迫観念さえ抱かせるような儚げな人であった。>br<

しかしティアファナは全体的な母親の美しさを引き継いで尚、父親の生き生きとした輝きに溢れ、それは触れてみたいと思わせるに充分だった。>br<

誤解が解け夫に愛されていると確信を得てからの彼女はより一層日々美しさを増していると思うのは何もケニスの臆見目だけではな

い。>br<

ただでさえそうして女神が人の形を成して現れたような彼女が相応に着飾ればどうなるか……しかし予想はケニスの想像を貧困だと笑わせるようなものだった。>br<

「——ティアファナ」>br<

ゲーム上で言葉を紡いだ時にはどれほど自身に引出しがあるのかと苦笑したケニスが、どの言葉さえも紙に書かれた屑のように思え口を突いては出なかった。>br<

むしろ今の自分の心境でさえ表す言葉を持たず、今まで掻き集めて来た言葉は全くの役立たずだと罵倒さえしたくなる。>br<

立ち上がったケニスは花に集る虫のようにふらふらと、その名だけを呟き、ティアファナをその腕の中にしっかりと収めた。>br<美しいとしか言い様のない、しかしそれだけでは勿体無い、そんな妻の姿をせめて確かめようと抱き締める。>br<

「止めて頂戴、折角のセットが崩れてしまうわ」>br<

しかし無情にも彼の母親によって夫婦の間は引き裂かれた。>br<

どんなに恨みがましい視線を送った所で親は子の心を知らず——否知っているからこそである所が彼の母親たる所以だろうか。>br<「どう？どれも最上級の仕立てよ」>br<

むしろそうでなくてはならなかったのだと、ケニスも大いに納得して頷いた。>br<

隔離されるように育った所為か、どうもティアファナは自身を着飾る事にとんと興味がなく、普段は下町娘のような格好で過ごす事が多い。>br<

しかし彼女に相応しい服をと思えば、どれもこれもが上質なものになって当たり前だった。>br<

そうでなければ付けた宝石さえ彼女の前では色を失ったただの石になっってしまう。>br<

母が胸を張って言うに正しく、ティアファナの身に着けたドレスも

宝石も、彼女を引き立てながらも決して自身の存在も忘れてはいないと主張出来るものだった。>br<

「素晴らしい……ティアファナ」>br<

もうそれしか言葉を紡げないとばかりに感嘆したケニスに、ティアファナはその白い頬をぽつと赤らめにつこりと微笑んだ。>br<それだけでこのまま彼女を攫いほとぼりが収まるまで何処かに逃亡でもしようかと思った息子の考えはやはりすぐさま母によつて遮られる。>br<

「ドレスと宝石はこれでいいとして、次は香水ね。それから靴と、そうそう、この際だから化粧道具も一新しよう。いいですかケニス、妻がどれだけ輝けるかは夫に掛かっているのですよ。つまり夫の甲斐性のなさは妻の恥なのです。よもや私のケニスは妻に恥をかかすような夫ではないのでしょうか？」>br<

彼は心底自分の母から産まれた事を後悔した。>br<母の気質をそっくりそのまま受け継いだといつていい息子は、そう言われれば後には引けないプライドの高さも持ち合わせているのだ。>br<

「香水だけは夫に選ばせて頂けるんでしょうね母上？」>br<「ええ勿論ですとも。私の息子が貧困なセンスなど持ち合わせていない事はわかっていてよ」>br<

「それは光栄」>br<

母の気に食わぬ物を選ぶなという無言の通告に頭痛を覚えながらもケニスは礼をしてティアファナの手を取った。>br<

「しかしそろそろ母上も休憩をされては如何か。それにご自身のドレス選びにも目を向けなくては」>br<

「まあ！そうだったわ、私とした事が！今度はあのバーンズ家の女狐が来るのよ。どうせまた私に見せびらかそうと不釣合いな宝石を首に下げてやって来るに違いないわ。遅れをとつてなるものですかセバスチャン！セバスチャン！街に出ます、馬車の用意を！」>br<

慌しく来た勢いのまま出て行った母を苦笑して見送ったケニスは、改めてティアファナを抱き締め、そして手を引き自分が腰を下ろした椅子の前に立たせじつくりとその姿を觀賞した。> b r <

まだ化粧は施していないようだが、ケニスの視線に曝されたティアファナの赤みを帯びた頬は何よりも美しく彼女を彩っている。> b r <

「ケニス……？あの、どこおかしいでしょうか？」> b r <

「素晴らしいと言ったよ、それとも俺の言葉は信用がない？」> b r <

「そ、そんな！」> b r <

「——ああでも、俺自身がこんなに言葉を知らなかったとは初めて知った。君を表現する言葉がない、いや、例え詩人であろうともこの姿を表現し切るのは無理だろうけれどね」> b r <

ふわりと華奢な彼女を抱き上げ膝の上に座らせたケニスは、抱き締めたその体から漂う甘い芳香を吸い込む。> b r <

そして難しいと内心ごちた。> b r <

素のままです晴らしい彼女を引き立て尚且つどちらも主張を失わせない物を選ぶのは難しい。> b r <

この花のような甘い体臭を殺す事無く引き立てる香水などあるものとケニスは思った、彼女のこの香りこそが媚薬にも似た身も心も蕩かすような香りだというのに。> b r <

「そういえば君はいつも甘い香りがする。香水を付けてはいなかっただろう？」> b r <

「ええ。時々は体や髪に特別な香油を使っていますけど」> b r <
「特別な？」> b r <

「匂いのないものなんですよ。お父様がそうだったものをあまり好まなくて、私も付けたいとは思わなかったですから。でも肌や髪を整えるのに使った方がいいと侍女に言われて、それならとお父様が取り寄せて下さったものなんです。昔から、今も愛用しています」

> b r <

「そうか、やはりな。では俺の香水選びはまさに大任な訳だ」> b
r<

頷いたケニスに首を傾げたティアフアナの首筋に唇を落とすと、
ぴくんとその体が腕の中で揺れる。> b r<

それが愛しくて何度も繰り返し、顔を真つ赤にさせたティアフアナ
が拗ねるように見上げて漸くケニスは笑いながら唇を離れた。> b
r<

彼女が成人まで純潔を守るというあつてないようなケニスと義父
と義兄の約束は、ケニスによるところ大いに本意ながら未だ守ら
れてはいる。> b r<

それも彼女が大いに彼の意思を誤解してしまったのと、今までの彼
女に対する態度を一応ケニス自身も後ろめたく思っている所為なの
だが。> b r<

こうして時折戯れのように触れるのはお互い吝かではない。> b
r<

……例えその後決まつて彼が身動きするのすら難しい状況になろう
とも。> b r<

「ねえ、ケニス。本当は行きたくないのではないですか？あ、勿論
私を連れて行くのが嫌だなんて思つてはいないですけど」> b r<
ふとじつとケニスを見詰めた後ティアフアナが言つたのに彼が目
を丸くする。> b r<

誰にも見せたくないのは山々だが、ケニスの中には確かに彼女を
自分のものと見せびらかしたいという願望も大いにあつた。> b
r<

彼女が自分の過去の女達に嫉妬一つしてくれないのはもうほぼ諦め
たが、しかし今まで碌に公の場に出なかつた彼女が何を言われるか
は目に見えていて、彼はそれに対し全てを上手く庇える自信がない。
> b r<

その自信のなさが彼女の目の前に表れてしまったのではないかと、
ぎくりとさえした。> b r<

「私は楽しみにしていますと言いましたけど、ケニスが行きたくないのならそうして下さって構わないですよ？私は貴方が一番大事です、貴方の傍にいる事が一番幸せなのですから、私の楽しみを取り上げるなんて思わないで下さいね」> b r <

「ティア——時折君は俺の下に遣わされた女神ではないかと疑ってしまうよ」> b r <

ティアファナの透き通る瞳を覗き込んでケニスが言うとまさに女神の如く微笑んで彼女は首を振る。> b r <

「いいえ、私は貴方の妻です。天に帰れと言われても嫌です」> b r <

「ああ、ティア……愛している。誰が君の腕を引こうとも、俺が決して離すものか」> b r <

抱き締めて来る体を更に強く抱き締め、ケニスは果実のような唇に深く己の唇を重ねた。> b r <

そして蕩けそうになる思考で算段を捏ねる。> b r <

この愛しい存在に傷を付けるものは、例えもう自分であろうとも許す事など出来ないのだから。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

かくして日々は穏やかに、しかしながら水面下ではあちらこちらで計画が企てられ、そして夜会の日は訪れた。> b r <

第一の大任を果たした息子に対しては母も大いに満足し、ティアファナの出来栄えには最後の最後までケニスが幾度となく引き返そうと思ったほどだ。> b r <

そしてそれはやはり夫の贔屓目などではなく、ティアファナを一目見た瞬間には誰も彼もが呼吸すら忘れて立ち止まったようになってしまうのだから、やはりここからでも帰ろうと彼女の手を引くケニスを諫めるのは母の勤めとなった。> b r <

巷の夜会は二部構成が基本で、後半は男女が別れて談笑を楽しむ事になる。> b r <

ケニスの母が再三に渡り悪態をつき忌み嫌っているバーンズ家の

女主人は見栄っ張りの仕切り屋で、女同士の場合こそ本領が発揮される事はケニスも聞き及んでいた。>br<

何かというとバーンズ夫人は遠回しに成り上がりでケニスの母を貶すので、人一倍負けず嫌いの母とはしかながらいい勝負であるようだ。>br<

だが今回ばかりは勝手が違つと、ケニスはここに来るまでも散々と母に言い聞かせた。>br<

後半になってから女同士の場に男が割り込む事などは滅多にない、特に今回のように大々的に行われる催しなら使用人も多くいる故に尚更であつた。>br<

ケニスが出て行けない以上、ティアファナを口さがない連中から守れるのは母だけという事になる。>br<

だからこそバーンズ夫人の相手ばかりに気を取られていては駄目だと口を酸っぱくして告げたのだ――勿論息子の愚行を嘆くフリをして相当にケニスも母から嫌味を頂いたのだが。>br<

漸く顔出しを済ませたティアファナは当然ながら引つ張りだにされ、その都度浴びるほどの賛辞を受けた。>br<

それをはにかみながらも完璧なマナーで受ける妻にケニスは大変満足したが、それだけに不安は募る。>br<

過去の女性達にとってティアファナが美しかろうと醜かろうと、完璧だろうとそうでなかりうと、ケニスの隣に公然と並ぶ限りそれは大した問題ではないのだ。>br<

ケニスが誰をも対等に遊びの扱いとしていたからこそ渡つて来た橋が、今では如何に危うかつたのかがわかる。>br<

彼女達の牙がどれほどのものか知っていたからこそケニスはそれを避けていたのだが、全く要領がいいとはいえない、むしろ完全に仇となつている状態だ。>br<

今までは誰もがそうだからと抑えていたものが、特別な存在を前に一気に爆発するだろう事は必至だった。>br<
現に母親とそちらも瓜二つといったバーンズ家の一人娘などは、伴

った母同様ティアファナをこれでもかと睨み付けた。>br<
バーンズ家の女性が如何ばかりであるか聞いていたにも関わらず手を出した事が露見され、ケニスはその場で母にわざとらしく足を踏まれる事にすらなる。>br<

戻れるものなら過去に戻って自分を殴り付けたいと、ケニスは始終ティアファナから手を離さずに何度となく思った。>br<

「ティア、母上から決して離れるんじゃないよ。いいね」>br<
「もう、子供扱いはしないで下さい。ケニス、私はそんなに無作法でしたか？」>br<

「そんな事はないよ、そんな事があるはずもないだろう。皆ティアファナの虜になってしまったよ、私だけの妻なのに悔しいけれどね。この俺も君の虜の一人だ、心配で堪らないんだよ。一時でも手を離すのが恐ろしい」>br<

まさしく今生の別れかというように抱き締めた夫に妻は鮮やかに微笑んだ。>br<

「妻は旦那様だけのものです。私こそ貴方の虜の一人……忘れないで下さいね」>br<

そうしてまるで子供をあやす母のように頬にキスを残した妻が母と一緒に去って行くその美しい背を、夫は捨てられた犬のような思いで見送った。>br<

ティアファナの姿が見えなくなってさえその場から動こうとしないうケニスの肩に手が触れ、漸くケニスが顔を上げるとそこには知った顔が複数にやにやと笑みを浮かべて立っている。>br<

先程までの切ない表情をがらりと変えてケニスはそれを見、ふんと鼻を鳴らした。>br<

「うーわあ、やっぱりケニスだ。別人か、それとも別人格かと思っちゃった」>br<

「いやあ、噂以上だなお前の嫁さん。ありやあしょうがない、色男のケニスも称号返上になる訳だよ」>br<

「彼女から手を離す時のお前の顔！どうにかして残しておきたかつ

たね」>br<

口々に好きな事を言う友人達に顔色一つ変えず、ケニスは大腿で踵を返し別室へ足を踏み入れるなり差し出された酒を呷った。>br<

こうしている間にもティアフアナが誰かから何か言われていやしいかと、足がこちらの方へ動き出そうとしてとても素面ではいられそうにない。>br<

遅れてやって来た友人達がそれを面白そうに囲んだ。>br<

友人としても男としても、女遊びさえ抜けば非の打ち所のないケニスをからかえる絶好の機会だ、それを逃すではない友人達にケニスは酷く恵まれていた。>br<

友人達にとつてもケニスの花嫁となったティアフアナの噂話は格好の酒の肴だった。>br<

何せ成人も迎えていない幼妻を娶つて以来、あれほど時には自慢げに隠そうともせず夜会の度に変えていた女性達とはすっぱり手を切り、しかしその肝心の妻は殆ど家から出そうともしないのだ。>br<

元々そうして育てられた彼女はあらゆる噂があり、そしてその美しさも見る者が少ないとあつて尚更噂に尾ひれが付いていた。>br<

その辺もこの男に追求しそしてその花嫁を一目見ようと喜び勇んでやって来たものの、実際の彼女は全く男として彼の心情が丸わかりになるほど噂以上の女性で、その点についてはすっかり毒気を抜かされたのもまた事実だった。>br<

「つーか、いいのか？連れて来て」>br<

「そうだよなあ、幾らあれだけの別嬪でも、嫉妬に狂った女には関係ないだろうよ」>br<

「あーあ、お前が雲隠れさせてた訳だよな。あれじゃ男なら誰だつてそうするさ」>br<

「今頃お前が食った女達に取って食われてんじゃないのか」>br<

「——そう思うなら手を貸せ」>br<

ぎろりと睨んだケニスの視線ではなく、その言葉に友人達は言葉を失った。>br<

中には古くからの付き合いである者もいるが、その友人でさえケニスが言い方はともかく手を貸せなどと頼んで来た事はない。>br< 顔を見合わせた友人達は、今すぐにでもこの場から飛び出して行きそうな友人を再び見やった。>br<

「そうだジョナサン、お前この血筋だったな。誰か屋敷の者を手配してくれないか」>br<

「ええ？……でもなあ、今回はなんかやたら大叔母様が張り切っていて、邪魔したら後で何を言われるか——」>br<

「例の店の権利書で」>br<

「乗った！よし、従姉のエリザベスが来てるはずだ。彼女に頼めば俺達くらいの人数なら何とかなるだろ」>br<

一気に手の平を変えたジョナサンが意気揚々と部屋を出て行くのを見送り、残った友人達はしげしげとケニスを見やる。>br<

「お前……必死だな」>br<

「ティアファナは育った環境が環境だ、幾ら頭がいいと言っても、ただ自分を傷付けるだけの人間には慣れていない。それに彼女は負の感情を相手に返すのではなく自分で受ける。……心配なんだ」>br<

疲れたように溜息をつき顔を手で覆ったケニスに、友人達は再び顔を見合わせ、そして誰からともなく頷いた。>br<

これだけ面白——いや、友人達としても誇らしい男としてくれたティアファナには自分達からも礼を言うべきだろう。>br<

見るにも美しく優しそうな女性であったティアファナが口さがなく言われるなど、何より自分達の友人である男が愛した女性を侮辱されるなど、あつてはならない。>br<

「よし、この夫人とは俺の妻も親しくしている。多分一緒にいるはずだ、協力を頼もう」>br<

「俺達が引き止めている間にお前は上手く彼女を連れ出せ」>br<
「お前ら——……ありがとう、恩に着る」>br<
にやりと笑ったケニスに友人達も同様の笑みを返した。>br<
そうして友人達の協力を得て乗り込んでいった先では、まさにテイ
アフアナが鬼のように顔を変えた女性達に囲まれている所だった。
>br<

続編 後編

夫の今生の別れなど物ともせず、妻は意気揚々としたまま義母に連れられ別室へと向かっていた。 > b r <

ティアファナがこういった場に出る回数が少なかったとはいえ、彼女はそれに物怖じする性質ではなかったし、昔から父と兄を筆頭に出会い頭から雨霰の贅辞を受けて育って来たので慣れているとさえいえる――彼女にとっては親族の鼻屑目と社交辞令に他ならなかったが。 > b r <

初めてと言ってもいい夫からの始終のエスコートを受け、ティアファナはむしろ上機嫌だった。 > b r <

夫によればそうではなかったと言われるものの、やはり夫の横に妻として並び公の場に出る事は自分を認められるという事にもなる。

> b r <

何より彼女には本日大変楽しみにしていた事があったのだ。 > b

r <

「我が息子ながら本当に浅はかなのだけれど、あの子の妻として貴女は堂々としていればそれでいいのよ。何せ私の自慢の娘なのですからね、ティアファナ」 > b r <

どうやら成り上がりと言われるバークレーの名を嫌う古くからの貴族も少なからずいるようだティアファナも先程理解した。 > b

r <

しかし代々続くというだけならティアファナの実家もそうであり、それを一緒に名ばかりと称したかの人達は、ただとにかくこちらが気に食わないのだろうという事も。 > b r <

夫と義母が自分はその口さがない中傷を受け傷付くのではないかと心配してるようだった、だから努めてティアファナは大丈夫だと笑顔を見せた。 > b r <

実際その通り、ティアファナにそんな中傷の心配などは無意味だっ

たからだ。 > b r <

ティアファナは早くから父や兄が何故自分を隠すように育てていたのかを理解していた、大人が隠そうとするものほど子供は敏感に感じ取るものだ。 > b r <

自分の家が周囲にどう言われ、早くに亡くなった母がどう思われ、そして娘を隠すように育てる父と兄……その娘もどう言われているかは実はこっそり聞いていた事もある。 > b r <

早く大人になって父や兄を助けたかった、自分が子供であるが故に庇われる事しか出来ない事はわかっていたのだ。 > b r <

そして愛する夫を得て殊更その思いは強くなった。 > b r <
どうも誤解ではあったようだが、しかしティアファナは自身をまだ夫に相応しい女性だとは思わない。 > b r <

今回の場に来ていた女性を見渡せば、多分に彼と関係があつたであろうと思われる女性が幾人も自分を見、そしてうつとりとケニスに見入っていた。 > b r <

夫が何と言おうとも、彼に選ばれた人なのであるのは間違いがない。 > b r <

自分などよりもずっと大人で美しくて華やかで……ティアファナは自分なりにそれに近づくべく、彼女達の立ち振る舞いを勉強するつもりでやって来た。 > b r <

勿論真似などでは意味がない、大人の男に相応しい大人の女性とはどうあるべきなのか、少しでも無知を埋めようと思ったのだ。 > b r <

ケニスは三ヶ月前の一件以来人が変わったように優しくしてくれるようになったが、彼の言い分からすれば優しく出来なかったのはティアファナの幼さとそれを大事に思うが故だったのだ。 > b r <
年齢はどうしても追いつけないが、せめて成人の年を迎えるまでに大人の女性としての教養と立ち振る舞いを覚えたいとティアファナは決意を新たにしている。 > b r <

これを夫が聞いたら別の意味で嘆く事は請け合いだが、彼女はま

だそれを察す事が出来ないほどにはまだ少女であると言えた。>br<

「まあ、まあ！ティアファナ、遅いわよ。早くこっちへいらっしやいな」>br<

ご機嫌といった様子で部屋に入ったティアファナと義母を手招きしたのはこの屋敷の女主人だった。>br<

先程の顔合わせで美しく愛らしい容姿に加え、頭の回転よく喋り氣遣うティアファナをいたく気に入ったらしい。>br<

義母の親しくしている相手にそう思われた事はティアファナにとっても嬉しい事だった。>br<

少しの間はそれから夫人とその親しい人達の間だけで談笑は進んでいたが、それを予告もなく遮ったのは再三に渡り義母が毛嫌いしていたバーンズ夫人の一言だった。>br<

「ああ、何か毛色の違う者が紛れ込んでいると思ったら貴女でしたの、バークレイ夫人」>br<

毛色が違うとは、ティアファナも幼い頃こっそりと聞いた事のある、貴族がそうでない家や片方にでも一般人の血統を持った家に対しての差別的な言葉だ。>br<

今では貴族だけで血を絶やさないでいられる家こそ少ないというのに、まるでそれが全てという物言いの夫人の言葉にはティアファナも如何ばかりの人間かを悟る。>br<

これでは義母が毛嫌いする訳だと思っよりも先に、この屋敷の夫人が離れていたのをいい事に食って掛かって来たバーンズ夫人に対し義母も勿論黙っていられるはずもなかった。>br<

ケニスに言われた事を守っていたのは実に最初だけである、周囲の人間が止めもせずまたかと苦笑さえしていたのを見て、ティアファナもこれはむしろ止めずにやりたいだけやらせた方がいいのだろうと判断してその場を離れた。>br<

——そしてティアファナが待ちに待った瞬間がやって来たのだ。

>br<

男女の間では顔合わせやご機嫌窺いが多く、特にティアファナは今回初めて顔を合わせる人間が多かった事で近寄れなかったのか、漸く「彼女達」は複数連れ立ってティアファナに歩み寄って来た。>br<

お互い初めましてと形式上の挨拶を交わした後、ティアファナは今日の為に思い描いて来た質問のどれからぶつけようかと思案する。>br<

服や髪や香水一つとっても、ティアファナにとってケニスの好みを把握するのは難しかった。>br<

何せ何を着ても何を付けても何をどうしようとも、ケニスは満面の笑みでティアファナを抱き締め愛を囁くばかりで……それが嫌とは勿論言わないが、ケニス好みの女性を目指すティアファナにとっては僅かに不満な事なのだ。>br<

目の前に現れた女性達を見て、その服装と髪型やアクセサリを瞬時にティアファナは記憶する。>br<

名ばかりと言われているだろう妻が例え夫に伴われてこの場に来たとして、彼を思う多くの女性達はそれを物ともせず彼を誘惑しようとするだろうと踏んでいた。>br<

そうなると思えば彼女達が身に着けているものは彼好みのものだろうと推測されるという訳だ。>br<

「何よ、本当にまだ子供じゃない。貴女、若さだけが取り柄なんだから、精々彼に捨てられないでいられるのは精々後数年よ。子供に飽きたら彼は私達の所へ戻って来るんですから、あまりいい気にならない事だわ」>br<

真ん中に立っていた女性が艶やかな唇を曲げてそう言った。>br<

「ええ、努力しようと思っています。私、彼に相応しい大人の女性になりたいんです」>br<

ティアファナも笑顔でそう言った。>br<

彼女自身何も可笑しい事は言っていないつもりだったのだが、そ

の言葉に女性達の顔ががらりと変わる。 > b r <

「だから、貴女が何をしようと無駄なのよ。彼は貴女が物珍しいから手に入れただけ。貴女の名ばかりの家と周りにはいなかった若さにちよつと目移りがしただけなのよ」 > b r <

「そうであつても、私が努力しようと思う事には変わりはありません。私を大事に思つて下さる夫に応えるのは妻の義務ですし、私自身がそうしたいからです」 > b r <

「つ……相当勘違いした田舎娘みたいね。ケニスも魔が差したにしてもこれじゃあ悪趣味だわ、こんな子供をあまつさえ妻にするだなんて」 > b r <

きつと睨んだ女性に対し、今度はティアファナの顔がきりりとした。 > b r <

ティアファナは母譲りの儂げで温和な容貌をしてはいるが、なまじ美しいだけにそれを引き結ぶと思つてもいない迫力が出る。 > b r <

当人は知らぬ所だが、その硬質な雰囲気は周囲の空気も凍らせた。 > b r <

「な、なによ……つ彼に言い付けでもする気？残念だけど、貴女のような世間知らずの子供の言う事なんて彼は耳も貸さない」と――

> b r <

「残念です」 > b r <

「……え？」 > b r <

凜とした声が、少し離れた所で未だ諍いを続けていた義母とバークレー夫人の動きさえ止めた。 > b r <

――そして協力を重ね、漸く入室を許されたケニスとその友人達の足も。 > b r <

「彼が選んだ女性と会つのを楽しみにして来ました。その方達なら確かに私より夫をよく知っているでしょうし、何より彼が好む大人の女性としての着飾り方や立ち振る舞いを学ばせて頂くと思つたからです。それなのに、とても残念です」 > b r <

ティアファナは俯きもせず、じつと目の前の女性達を見やった。

> b r <

「図らずしも想う男性に対してそんな事を言うなんて。貴女方が私より彼がどれほど素敵か知らないなんて思いませんでした——それに」> b r <

くるとティアファナが後ろを振り向くと、まさに今こちらにやって来ようとしていた足を止めたままのケニスをそのままの表情で見やる。> b r <

「ケニス、貴方にも少し残念に思います。そういう事があると私もわからない訳じゃありません。でも少なからずお付き合いした女性にこんな事を言わせるお付き合いしかして来なかったのだと思うと、……残念です」> b r <

ふうとティアファナが息をついたとたん、弾かれたように駆け出したケニスがティアファナを強く抱き締め抱き上げた。> b r <

「ティア！違う、ティア！お付き合いなんかじゃないんだ、俺は君を知って、俺の初めては君だけだ！恋をしたのも愛したのも、自分が嫌で堪らなくなったのも情けなく思ったのも、それでも君に愛されるのならそれでもいいかと思つたのも！全部全部君が初めてだ。

俺は知らなかったんだ、君を知るまで、女性が俺にどんな意味を持つのか。君が教えてくれたんだ。ああ、ティア、俺の妻、ティアファナ、どうか愚かな夫を許してはくれないか」> b r <

まるで泣き縋る子供のように懇願し始めたケニスにティアファナも慌てて首を縦に振った。> b r <

するとここがどこだかも忘れたようなキスが降って来る。> b r <

「ケ、ケニスッ……ちよつと離れて下さい」> b r <

「ティアファナ！」> b r <

「私は許しますから——……だから彼女達にもきちんと謝って下さい。あんな事を言わたのは貴方のお付き合いのし方に問題があったと思います。貴方が幾ら付き合い方を知らなかったとはいえ、それに合わせようとして下さった女性の身になって考えたらわかるはずです。私が教えたと言つて下さるのなら……私の旦那様なら、わ

かつて下さるでしょう？」>br<

今思えばケニスが自分に冷たく当たつていても決して彼を嫌いになどなれなかったのは、ケニスがきちんと大事にしてくれていた根底があつたからだとティアフアナは思った。>br<

惘然とした顔ながらもケニスは深く頭を下げ「すまなかつた」と心底棒読みで女性達に詫びた、すっかり蜘蛛の子を散らしたように遠巻きでこちらを窺っている周囲としては「それはどうか」と思うような態度ではあつたが、彼の妻はそれに大きく頷いたところを見るとまあまず合格点らしい。>br<

そしてティアフアナは同じように今度は女性達に向き直り、「私の夫を侮辱した事を、夫に謝つて下さい」と告げた。>br<

そのティアフアナの堂々たる態度なのか、それとも妻の後ろでこれでもかと「断つたらお前の家は子々孫々呪われるぞ」と意いたげな視線を送つて来るその夫の所為なのか、とにかく彼女達も気圧されるようにしてケニスと同様おざなりながらも頭を下げたかと思うと逃げるようにその場を出て行つた。>br<

「ああつ、違うじゃないか！彼女達はティアフアナにこそ謝らなければならぬのに」>br<

「いいです。私が至らないのは私自身充分わかっています。本当の事を言われて腹は立ちません」>br<

「何を言う。君のような素晴らしい女性に、分不相応なのはむしろ俺の方だというのに」>br<

「同じ気持ちでいて下さつたんですね。とても嬉しいです。でもケニスに謝つて頂いたのですから、私に謝つて頂いたのと同じ事ですよ」>br<

「……君は本当に俺には勿体無い妻だ」>br<

感嘆とした夫の呟きと共にその腕がティアフアナに伸ばされるより先に、周囲から叫ぶような歓声上がり、思わずティアフアナは耳を塞いでしまうところだつた。>br<

「ティアフアナ！ああ、素晴らしい私の娘！その愚息が捕まえた

のなんて信じられないわ。いいことティアファナ、愚息がこれから何をしようと貴女が愛想を尽かす事になつても貴女は私の娘よ」>

真つ先に駆け寄つて来た義母がティアファナを抱き締めそう言うのに、その息子である例の愚息はとてつもなく苦い顔をした。 > b
r <

どうやら先の女性達には辟易としていたらしい他の女性達があつたという間にティアファナを取り囲んでしまい、まだまだ続きそうなお喋りにティアファナは嬉しいような困ったような笑顔を返す。>

取り残された夫といえば、次々に友人達から肩を叩かれていた。

$$\begin{matrix} > \\ b \\ r \\ < \end{matrix}$$

「一躍ヒロインだな、お前の嫁さん」>br<

「まあその、なんだ、……ファイト」>br<

「お前、今後ティアファナさんを一瞬でも泣かそうものなら、今まで以上に男女から夜道の背後を狙われるんじゃないか？」>br<
「えーと、……ファイト」>br<

「.....」
「ご進受取っておく.....」

> b
r <

かくして一夜で時の人となったティアファナはそれから毎日のように夜会へ引つ張りだになったのだが、夫が渋い顔でなんだかんだと招待状を突き返すのが、バークレイ家の新しい日課となった。

$$\begin{matrix} > \\ b \\ r \\ < \end{matrix}$$
[illegible]

「またか!？」
>br<

家に帰るなりそう叫んだ主人に、セバスチャンは「まだです」と顔に書きながら静かに礼をするに留まった。 >br<

ティアファナに対する態度を改めて以来努めてケニスは仕事を定時で終わらせ家に帰るようにしていたというのに、夜会のあれ以来今

度は母に連れ回されティアファナの帰りが遅くなっていた。>br<

母はあれから益々鼻高々となつて、ティアファナを買い物に連れ出しあれやこれやと買い与える事が多くなつた（といってもティアファナが大体をやりわり断るので散財というほどではないが）。>br<

何せティアファナが事実上遣り込めた女性の中に、母がこれでもかと毛嫌いしているバーンズ家の娘もいたのだからさもありなん。>br<

だが母の有頂天のお陰ですっかり夫の御鉢は奪われ、挙句の果てには何か言おうものなら母親自身が息子の過去の愚行を持ち出しては懇々と説教をして来る始末だつた。>br<

夕食の頃になつて漸く戻つて来た二人にケニスが渋い顔を見ると、とたんに母が「あら、以前なら朝帰りするほど仕事が趣味だったのにねえ」などのたまうものだから、流石にケニスは「至急母をどうにかされたし」と父に連絡を取る事を躊躇わなかつた。>br<

このままではティアファナが成人を迎える頃に予定している別居計画もなし崩しにされてしまう恐れがある。>br<

ぶるりと身を震わせたケニスに、侍女から紅茶を受け取つたティアファナが心配そうな顔で歩み寄つた。>br<

「お風邪でも召されましたか？」>br<

「いや、今後来るかもしれない恐怖に慄いた。だが俺は絶対に屈しない。素晴らしい妻の夫として俺は絶対に屈しないからな」>br<

誰かが聞いたなら「その状況で何を言う」と言われそうなものだが、彼の素晴らしい妻はにこりと笑つた。>br<

「旦那様がそう仰るのなら、私も絶対に屈しません」>br<

「……夫婦は常に、いつまでも一緒だ」>br<

「はい」>br<

紅茶をテーブルに置かせたケニスが差し出す腕に、ティアファナは躊躇いもなくその身を預ける。>br<

その度に早く全てを彼のものにしてしまいたいと思うが、自制心を

もって大事にしてくれると知っている今は、ティアファナ自身が焦る事無く着実に成人と共にその日を迎えようと思うのだ。>br<
尤も常日頃自制心を図らずしも強化され忍耐力を試され続けている彼にとつては、嬉しくもあり、嘆かわしい決意でもあるのだが。

>br<

「こう毎日付き合わされたのでは君も疲れるだろう。母上には俺が言つて聞かせる、たまには家でのおんびりしていなさい」>br<

「そんな事はないです、お義母様とお出かけするのは今までなかった事ですし……実は少し母と出かけるという事にも慣れていません。でもケニスを出迎えたいと思うので、今日のように帰りが遅くならないようにしますね」>br<

どこまでも自分に甘い台詞を吐いて来る妻に、ケニスは見も知らぬ誰かに笑つてやりたくなつた。>br<

例えば多くの誰かが求めても、この妻が夫と呼ぶのはただ一人——自分だけなのだ。>br<

そしてとたんに機嫌の良くなつた夫に、やはり出迎えた方が嬉しかったのだと妻は思った。>br<

「それに……家でゆっくりするのは、ケニスのお仕事がお休みの時がいいですから」>br<

母が毛嫌いするバーンスのような代々の貴族は仕事を持つていない者がまだ多い、あまりに古いティアファナの実家はまだその習慣もなく……というより早くに亡くした妻の隙間を埋める為と残された幼い子供達の為にティアファナの父は未だケニスの父をも舌を巻かせる勢いで仕事をしている。>br<

そんな訳で俗に言う趣味は母が言うように確かに仕事中毒な父とは違った意味で仕事しかなかったケニスだが、それほど仕事に追われなくてはならない事もない。>br<

むしろ年の割りには出来る限りの出世をしてしまった方なので、いっそ頭の硬い連中には煙たがられてもいたのだから、その連中にとつてもケニスが妻に入れ込み定時で帰るなどとは歓迎しきりだった。

> b r <

すでに家族を養えるだけの財産は一人で蓄えているとはいえ、ケニスが仕事を辞めずにいるのもまたこの愛する妻の一言故だ。> b r <

あまり忙しそうにするのは体が心配だが、時折仕事の事を難しそうに、しかし楽しそうに話すケニスが好きなのだと、ティアファナのその一言のお陰で。> b r <

頭の硬い上司にとって変わられるよりケニスが辞表を出さなかった事は彼の会社でも大いに感謝をされ、ティアファナはある時会社名義で送られて来た大きな花束と山程のお菓子に首を傾げた事がある。

> b r <

そうだというのにこんな事も言つてのける妻に夫は軽い眩暈がしそうだった。> b r <

一緒にいたいのだと言外に言われれば、だから仕事など今すぐ辞めてやるというのに。> b r <

「明日は休みだから、一緒にいよう。父上に連絡を取っておいたから、これからはそう毎日連れ出される事もなくなる」> b r <

出来るならばこう何時間も妻を拘束されるなど一生なくていいと思う夫だ。> b r <

「明日……ずっと一緒に？」> b r <

ぱつと顔を更に明るくしたティアファナは期待を込めて言い、そして長く深いキスで応えられた。> b r <

少し前からケニスに教わったキスを、自分から少し仕掛けてみる。

> b r <

ケニスの唇が離れた瞬間にその隙間を舌でちろりと舐めると、ぐつとティアファナの頭の後ろに置かれていた手が強く彼女の顔を引き寄せ、待っていたのは更に深いキスだった。> b r <

教えられた通り唇の隙間で喘ぐようにするティアファナの息すら奪うようにケニスの唇が襲い掛かって来る。> b r <

浅く開いた唇を割るようにケニスの舌が差し込まれ、戸惑い彷徨

うティアフアナの舌の形を確かめるように舐め上げ吸い付かれた。

> b r <

空気を求めて唇をずらすものの、それすら追って唇が擦られ食まれる。 > b r <

何度も何度も、唇も舌も息も、奪われ――。 > b r <

散々口内を蹂躪されて漸く解放される頃にはティアフアナはケニスの胸に凭れ浅く呼吸を繰り返した。 > b r <

宥めるようにケニスの手がティアフアナの頭から背中にかけてを何度も撫で、気持ちのよさにうっとりとしてティアフアナは目を閉じる。 > b r <

すると突然ティアフアナの額が小突かれ、彼女が目を上げると拗ねたようなケニスの顔があった。 > b r <

以前からもだったが、ケニスはこうして時折子供そのもののような顔をする、ティアフアナはそれがとても好きだった。 > b r <

だから例え自分が大人になっても、ケニスが好きになつてくれた時のままの自分も残しておきたいと思う。 > b r <

難しい事かもしれないが、ケニスの為ならば遣り甲斐はあるとティアフアナは思った。 > b r <

「わかつてて煽っているなら、今晚はお仕置きだな？」 > b r <

「え？」 > b r <

「もう少して16になるからな。そろそろ大人のキス以上の事も教えようと思ってた」 > b r <

「ええ？」 > b r <

「うん、お仕置きだから。どんなにティアが恥かしいからもう止めてって言っても許さない」 > b r <

「えええ」 > b r <

「一つ一つじっくりたづね教えてあげるから、覚悟しなさい」 > b r <

「ええー……はい」 > b r <

よろしくお願いしますと言わんばかりに小さく頭を下げたティア

ファナに、ケニスは苦笑して小さなキスをその頭に落とす。>br<
その体を抱き上げてベッドへそつと下ろすと、額同士をくっ付けて
ケニスは囁くように言った。>br<

「時間なんか嫌でもやって来るから、ティアはティアらしく大人になれればいいんだ。今だって充分なのに、それ以上完璧になれたら、今度は俺の方が皆に大人になれと責められるようになる」>br<
むしろ責められるよりティアファナを引き剥がされる予感が大いにした。>br<

「そんな事ないです。ケニスのちよつと子供っぽいところも、私大好きですから」>br<

妻の甘い一言に夫は自身の何かがどろりと溶ける思いがする。>br<

今となつては女狐と称するほど豹変してしまった美しい女性達に、今までそれこそ甘つたるいだけの言葉を幾度となく投げられたし投げかけもしたケニスだ。>br<

ともすれば戯れ以下にしかならなかった拙い言葉が、これほど自身を喜ばせるものだとなかった。>br<

否、その声が、その表情が、その存在だけが――彼を甘く蕩かせるのだと改めて知った。>br<

「ティア」>br<

寄せられた唇が甘い吐息でティアファナの耳を撫る。>br<
同時に形を確かめるようにして胸が撫でられると、知らず体がぴくりと反応した。>br<

そつとティアファナが窺うように見上げればケニスは優しく微笑みを零す。>br<

気恥ずかしさに視線を下ろせば、ケニスの指が徐々に胸に埋もれて行く様がティアファナの目に映った。>br<

驚いて再び顔を上げた瞬間胸の頂を指先が一瞬押すように触れ、背筋を走った感覚にティアファナの唇から少し湿った吐息が溢れる。

>br<

その音色さえも甘く感じる事にケニスは自分の胸が熱くなるのを感じた。 > b r <

そう、確かにケニスはティアファナの全てを感じ取りそして影響されている。 > b r <

これが人に触れる悦びなのだと、そう感じた。 > b r <

「あ、あのっ」 > b r <

これ以上なく自分を甘い表情で見下ろす夫に一瞬ティアファナはぎゅっと目を瞑ってから意を決して言う。 > b r <

まるで火でも点けたように自分の顔が熱くなるが構ってはいられなかった。 > b r <

「なんだい？」 > b r <

「あの、……胸を大きくするには、どうしたらいいですか……」 > b r <

消え入りそうな声でやっそう発したティアファナは、少しの間を置いてから横を向き噴き出したケニスに向かってむっと唇を尖らせる。 > b r <

確かに百戦錬磨だった夫には他愛もない事かもしれないが、ティアファナにとっては大変重要な事だった。 > b r <

先日の一件は少々有耶無耶になってしまった、しかしティアファナはしっかりと見ていたのだ。 > b r <

ケニスと関係のあっただろう女性達はそれぞれに流行のドレスや香水を身に着けていたが、髪や顔立ちには統一性がなかった。 > b r <
だが——皆胸が大きかった。 > b r <

「ティア、ティアファナ！」 > b r <

「わ、笑わないで下さい！教えて下さってもいいでしょう？」 > b r <

だがケニスの笑いは止まらず、真つ赤な顔で頬を唇を尖らせたティアファナを抱き込んでベッドを転がる。 > b r <

ティアファナは視界と共に高鳴った胸までもがぐるぐると回転している気がしてケニスにぎゅっとしがみ付いた。 > b r <

やがてひくひくと口元に笑いを残したケニスが仰向けになった自分の上にティアフアナの体を重ねる。>br<

まだ赤い頬を両手で包んで触れるだけの口付けをした。>br<

「胸の大きさなど気にしなくてもいい」>br<

「ケニスは自覚していないだけで、きっと大きい胸の方が好きなんですっ」>br<

半ば拗ねてそう言い切ったティアフアナに漸くケニスもその理由を思い至る。>br<

だがまたしても笑いが込み上げそうになり、これ以上は得策ではないと必死にせり上がるそれを噛み殺した。>br<

ケニスは全身がくすぐったくもどかしいような感覚に陥る。>br< まるでそれはどんな女性でも贗せられなかった彼を蕩かす愛撫のよう。>br<

「本当だ。誓つて、俺は胸の大きさを女性を選ぶ訳じゃない。あちらがそれを武器にするだけだよ、男を落とす為のね」>br< 「落とす、ですか」>br<

その表現にすんとティアフアナも納得した。>br< まさにケニスを一目見た時から「落ちた」のだ、足掻いても這い出す事の出来ない甘く苦しい何かの中に。>br<

「俺が落ちたのはティアフアナ、君の全てにだ。君が君であるからこそ、愛しい。君は俺の背があと少し低かったら、俺に落ちてはくれなかっただろうか？」>br<

「そんな事ないです！」>br<

慌てて首を横に振ったティアフアナはケニスの言わんとしている事を理解して、だが少々腑に落ちない気もする。>br<

すっかり状況は最初に戻ってしまった。>br<

ケニスがこう言うのをわかっていたからこそ、嘗て夫と付き合いのあった女性から色々と学ぼうと思っていたというのに。>br<

こういうのを「丸め込まれている」と言うんだわ、と若干釈然としない思いのティアフアナだ。>br<

しかしそれを自分に当て嵌めてみると、やはり同じ文句しか出て来ないだろう事に苦笑する。 > b r <

例えばケニスが今とは髪の色も瞳の色も顔も違ったところで、いつかは同じように恋に落ちただろう。 > b r <

外見がどう違っているても、結局それすら愛したに違いない。 > b r <

「わかつてくれたようで嬉しいよ」 > b r <

「はい……」 > b r <

「じゃあ、そういう事で」 > b r <

「え、きゃっ」 > b r <

ケニスがティアフアナを抱きかかえて体を反転させると、体重がかからないようにその胸に顔を寄せる。 > b r <

先程のように今度は唇で服と肌の境目をなぞった。 > b r <

「んっ、ん……」 > b r <

「くすぐりたい？」 > b r <

胸元に吹きかけられる息さえもぞくりとした感覚を蘇らせてティアフアナは少し首を竦める。 > b r <

「……少し」 > b r <

「力を抜いて……そう、少しずつ教えてあげるから、ついておいで」 > b r <

そつと手に触れたケニスのそれに指を絡ませてティアフアナが頷く。 > b r <

「貴方となら、どこまででも」 > b r <

吐息混じりに囁いたティアフアナの唇に、ケニスの唇が降りて来た。 > b r <

続編 2 - 1

ティアファナがそれに気付いたのは、ケニスが仕事から三日ぶりに帰って来たすぐの事だった。 > b r <

体調でも悪いのかと尋ねても違うと首を振られる、疲れたのかと尋ねても同じ事だ。 > b r <

しかし彼は何かを思案するようにやがて頷いて、一人にしてくれと書斎に籠ってしまった。 > b r <

——それがすでに五日も前の事だ。 > b r <

執事も困り果てたように首を傾げているばかりで、一向にケニスが元に戻る気配はない。 > b r <

今朝も早くから仕事に出たケニスを見送って、ティアファナはふと心配げにしていた瞳をふらりと泳がせた。 > b r <

本当に「元」に戻ってしまったのではないか——そんな思いが現実のようにティアファナを襲い、寒気を感じてぎゅっと己の身を抱き締める。 > b r <

そう、ティアファナと想いを通じさせる前の「元」に。 > b r <

思い当たる節はこの五日間で幾らでもあった、まずこの数ヶ月すでに当たり前のようになった抱擁も口付けもない。 > b r <

それどころか寝室を共にすらないのだ。 > b r <

まるであの頃の、ティアファナを突き放し避けて回っていたケニスのようだった。 > b r <

「奥様、大奥様にご相談なされては……」 > b r <

戸口で後ろからした声にはつと振り返り、ティアファナはセバスチャンに向かって緩く首を振る。 > b r <

義母に心配は掛けられない、先日も義父との旅行先から待ち切れないとばかりの贈り物を送ってくれたのだ。 > b r <

もしケニスの様子を尋ねてもしたら旅行を中断し飛んで帰って来るに違いない。 > b r <

折角義母が久しぶりに夫との旅行を楽しんでいる中だ、邪魔したくはない。>br<

言い知れない不安を抱きながら、努めてセバスチャンに笑顔を見せ「きつとお仕事がお忙しいのよ」と言うに留まる。>br<
まだ言い募りそうなセバスチャンにお茶を頼むとティアファナは逃げるようにして自室へと戻った。>br<

窓辺の椅子に腰掛けながら、どうした事だろうと自分に問い掛ける。>br<

義母の事では疑いも掛けないというのに夫を信じられないなんて……。>br<

そう思ってみてもティアファナの胸はそれこそ信じられないほどにキリキリと痛んだ。>br<

少し前まではこれが当たり前の状態だったというのに、あの頃耐えられた事がすでに五日で耐えられなくなっている。>br<

しかし知ってしまった今はもう無理だった。>br<
口付けられる事も、囁かれる事も、触られる事も覚えた今となつては、それなしにどうして生きて行っているのか途方に暮れてしまふ。>br<

ティアファナはセバスチャン自ら持つて来てくれたお茶を一口飲み、このところ反芻したものを整理しようと深呼吸を繰り返した。>br<

今は仕事が忙しいだけだ、きつと疲れているのだ——。>br<
繰り返しそう言い聞かせるが、視線も合わせてくれない夫の姿が脳裏にこびり付いて離れない。>br<

知らずはらはらと涙を零していたティアファナは俯いていた顔を上げ、ぐつと拳を握り唇を薄く噛む。>br<

泣いてばかりいてもどうしようもない、妻としてきちんと夫を支えなければ。>br<

ティアファナは立ち上がって頷くと、厨房へと向かって歩き出した。>br<

使用人達が何事かと驚く中、につこり笑って言う。 > b r <

「旦那様に精の付く物を作って差し上げたいの」 > b r <

「奥様、それならば私達が」 > b r <

それに首を振ってティアファナはさつさと支度を始めてしまう。

> b r <

思いが通じてからこうして何度もティアファナの手料理をケニスに振る舞った。 > b r <

とても美味しいと喜んでくれたケニスの笑顔を思い出しながら慌てている使用人達を尻目に食材を切り出す。 > b r <

中でも特にケニスが気に入ってくれたポットパイだ。 > b r <

スープと生地を作っておけば、ケニスが帰って来た時すぐに焼くだけにしておける。 > b r <

あれから家には帰って来ているものの、やはり以前のように夜が遅い。 > b r <

ただシャワーを使ったような香りがしない事がティアファナをある意味ほつとさせた。 > b r <

女性と会っている訳ではない……なのに、どうして。 > b r <

まるで蜘蛛の巣でも張ったようにもやもやとした思考を振り切るべく頭を振って、ティアファナは暫く無心でスープ作りに勤しんだ。

> b r <

もつと細かく切った方がいいだろうか、疲れている人には味付けが濃い方がいいだろうか、——必死に何かを頭に詰め込んで忍び寄る不安から目を背ける。 > b r <

やがてそれでも時間がまだであると、今度はデザートを作り始め、それを繰り返して結果五品もの食事を殆ど一人で作り上げてしまった。 > b r <

いい加減に食事をしてくれと頭を下げられ、ティアファナは渋々いつの間にか暗くなった窓の外を見ながら食堂に行き、結局自分が作った食事を口に運ぼうとした。 > b r <

その時外から馬車の音が零れ、椅子を倒す勢いで立ち上がったティ

アファナは玄関へと駆け出す。>br<
いつもよりずっと早い帰宅に心も足取りも弾むのが押さえ切れなかった。>br<

だが中央のフロアに出たところでティアファナは階段の下を見下ろしピタリと足を止める。>br<

細かに震え出した足が折れそうになって、無意識に手摺を掴んだ。

>br<

細く長く息を吐き出し、階段を一段一段ゆっくりと降りて行く。>br<

>br<

それに気付いた二人が顔を向けて来た。>br<

「少々仕事の事で話しがあつてね、彼女は……」>br<

「奥様ですね、初めてお目にかかりますわ。私、ヴァレリー」ディ
ーリアスと申します。ケニスにはいつもお世話になっておりますわ」

>br<

ケニスの言葉を遮り、これ以上はないと思うばかりの豊満で完璧なスタイルに妖艶な微笑みを向ける女性。>br<

思わずそれに見入り、ティアファナは慌てて挨拶を返す。>br<

ちらりと見上げた先の夫は妻の視線を避け、やって来たセバスチャンに上着を手渡した。>br<

食事の用意の有無を尋ねると、ケニスはヴァレリーを優雅にエスコートして階段を上って行く。>br<

ティアファナを置き去りにしたまま。>br<

呆然とただそれを見上げた。>br<

以前であつても家に女性を連れ帰って来た事など一度もないケニスだ。>br<

ひたひたと背中から迫る何かから逃げて、ティアファナは壁と手摺伝いに二人の後を追う。>br<

すでに食堂で席に着いていた二人は向かい合わせに座っていて、ティアファナはケニスの隣にそつと腰を下ろし、自分が作った食事が二人に運ばれて来るのを見守った。>br<

食事を途中にしていた所為で退席も叶わず、ティアファナはただじつと二人が自分にはわからない話を進めて行くのを耳に流すだけとなる。>br<

このところ自分とは目も合わせもしないケニスはヴァレリーに向かって微笑みかけ、彼女もそれに応えてあの悩ましげでさえある笑みを返す。>br<

「奥様、本当に美味しいお食事ですわ。これをお作りになったなんて信じられない。素晴らしい奥様を持ってケニスは幸せ者ね？」>br<

ふと話しの折りにヴァレリーがそう言うが、ケニスはただ曖昧に微笑むだけで何も答えはしなかった。>br<

ケニスは何も言わなかった、ただそれだけの事なのにティアファナの微々たる食欲は一気に消え去る。>br<

ティアファナは出来る限りのお礼を言い食事を再開した、しかし夫の為に作った温かい食事はまるで砂か氷の塊のようにさえ感じられた。>br<

徐々に指先が冷たくなり、感覚がなくなっていく手で必死にナイフとフォークを握り塊を飲み込む。>br<

そつとヴァレリーを見詰めると、長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳は一心にケニスに注がれているようだった。>br<

思いが通じてから最初に出た夜会の事をふと思い出す。>br<あの際はケニスに向けられる目がどこか誇らしくも感じたものだ。>br<

それもこれもケニスが自分の隣にいて、確かにティアファナを愛し見守ってくれたからなのだと悟る。>br<

これまではわからなかったのだ、実際夫婦になってからというもののケニスの隣に他の女性が並ぶのを目にした事はなかったのだから。>br<

これが真の嫉妬というものとティアファナは体の中にずっしりとした重い塊を感じた。>br<

今すぐにもケニスに抱き付き、どういう事なのかを問い詰めたくなる、その目を……その微笑みを強引に自分に向けさせてしまいたくなる。 > b r <

隣で交わされる楽しげな会話とは裏腹にティアフアナは冷たい海に沈んで行くような時間を味わった。 > b r <

やがて食事を終えたヴァレリーが礼を言っ立ち上がると、やはりケニスもまた当然のようにそれをエスコートして漸くティアフアナを振り返る。 > b r <

「下まで彼女を送って来るから、君はもう休んでいなさい」 > b r <
それだけを告げ、あっさりケニスはティアフアナに背を向けた。

> b r <

それを見送り使用人達が皿を下げて行く中にも関わらず、ティアフアナはとうとうテーブルに顔を伏せぐつと眉根を寄せる。 > b r <

どうしたらいいのかわからなかった。 > b r <

こんな気持ちは初めての事でどう扱っていいか困惑し、自分自身を持て余すしかないのだ。 > b r <

ただケニスは本当に仕事の話をしていただけで、不貞を働いた訳でもないのに自分の負の感情のまま詰る事は出来ない。 > b r <

そもそもティアフアナはそんな事が出来なかった。 > b r <

これだけ愛する夫にどうしてそんな事が出来ようか。 > b r <
むしろ例えばそうしてしまっ呆れられ嫌悪される事の方が怖い。

> b r <

どれだけ冷たくされようと、縋り付きたいほどの愛はまだ確かにあるというのに。 > b r <

幸福に浸された後、手を離される事に怯えてあの頃のように盲目にも振る舞えない。 > b r <

自分はこうではなかったはずなのに、一体どうなってしまったのだろうとどこかティアフアナは他人事のようにも感じる。 > b r <

溜息を噛み殺し、心配そうに自分を見る使用人達にも下がるように言いつけ、そっと食堂を出て再び階段の上へと来た。 > b r <

下を見下ろせばすでに部屋へ戻ったのか二人の姿はそこにない。>br<

一瞬ぞつとしたものを覚え、ティアフアナは無意識にケニスの書斎へと駆け出す。>br<

「ケニス！」>br<

ノックもそこそこにドアを開けた先で驚いたように目を見開くケニスの姿に堪らずほつと息を吐く。>br<

——消えてしまったのかと思った。>br<

「どうしたんだ？」>br<

「あの…… 今晩も寝室ではお休みにならないのですか？」>br<
ケニスはティアフアナに一瞬何か口を開きかけ、しかし開いていた本の上に目を落としたとしても視線を逸らす。>br<

それを追って歩み寄ると、僅かに距離さえとってケニスはティアフアナから身を引いた。>br<

鎖で引かれたようにティアフアナの足が止まったが、それでもケニスは視線を動かさずにいる。>br<

指先の冷たさが全身にまで回った気がした。>br<

「仕事が忙しいんだ」>br<

「でもそれではお疲れが取れないのでは……」>br<

「いいんだ！」>br<

突然の大声にびっくりとティアフアナは体を弾かせて後退りする。

>br<

驚愕に強張った顔は固まってしまい、何かを告げる事も叶わない。

>br<

ドクドクと鳴り響く自分の心臓だけがこの静寂に煩く音を立てているように思えた。>br<

どれくらいそうしていたのか、やがて息をついたケニスがやはりティアフアナには微妙に視線を背けたままで言う。>br<

「……すまない。とにかく、俺の事は心配ない。いいから君は早く休みなさい」>br<

それに頷いたのかどうか、何か答えたのかどうかわからないまま、
ティアフアナは気が付いた時には寝室にいてベッドの中で蹲っていた。
> b r <

ぎゅつと膝を抱え込み猫のように丸くなって思った。 > b r <

以前と似ているようでケニスの態度は少し違う。 > b r <

あの頃のケニスの態度は本人がそう言っていたが、とにかくただ基本的に避けていたし、何か言う時も突き放したままだった。 > b r <

——あんな風に謝ったりはしなかった。 > b r <

少なくとも気遣われていた点は喜ぶべきだろうにティアフアナはそれが出来ない。 > b r <

何かが違ってしまったている、そんな漠然とした不安が大きくティアフアナを揺るがした。 > b r <

以前に戻ってしまったのならいい、それならば希望は持てる。 > b r <

何せケニスはティアフアナを思うがあまりに避けて通っていたのだから。 > b r <

しかしケニスがあんな風に自身の態度に戸惑ったような瞳をするのが余計に不安を煽るのだ。 > b r <

どうしてしまったのだろうと、いよいよ途方に暮れてティアフアナは大きく息をつき無意識に緊張したままだった体から力を抜いた。

> b r <

まるで、そう、「こう」なってしまう事に戸惑いを覚えているかのようだ。 > b r <

ケニスの姿を思い出し、ティアフアナはきゅつと自分の頬を抓る。

> b r <

夢ではない。 > b r <

だとすれば、ほんの少し前までの「日常」が夢だったのだろうか？

> b r <

様々な思考がぐるぐると頭の中で渦巻き頭痛すら覚えて来る。 > b r <

何度も何度も考えて、打ち消して、そして漸く決断した。 > b r <

「私、……私は、貴方の妻です」 > b r <

「……ああ、わかつている」 > b r <

何かを耐えるようなその表情にティアファナは胸が引き絞られる
思いがする。 > b r <

ぐつと掌に爪が食い込むほど握り締め、必死に自分を奮い立たせた。
> b r <

——そう、私はケニスの妻だ、そしてこの人を愛している。 > b
r <

だから夫の憂いになるものは、取り除くべきなのだ……例えそれが
自分自身であつても。 > b r <

「どうかちゃんとお休みになつて下さい。貴方に憂いがないよう、
私は精一杯努めますから」 > b r <

「いや……君は何もしなくていいんだ、そのままがいい。ちゃんと
休む、約束するよ」 > b r <

その言葉に幾分かほつとして、しかし僅かに苦しげな何かを残し
た表情の夫を戸口まで付き添い見送った。 > b r <

すでに待機していた馬車に乗り込み、その何もかもが見えなくなつ
ても、車輪と蹄の音が聞こえなくなつても、暫くティアファナはそ
の場に佇んでケニスから目を離さずにいる。 > b r <

否、何もかもが針を止めた時計のように動かなくなつた。 > b r <
動けない、動きたくない——あの人が帰つて来るまで。 > b r <

ふとその思いに弾かれて、ティアファナは頭を振つて口の端を努
めて引き上げる。 > b r <

ちゃんと言えた、その事に猛烈な安堵と寂しさが襲い掛かつて来た。
> b r <

細かに震え出した両手を組んで握り締め、ずるずるとその場に膝を
折る。 > b r <

唇を噛み締め泣き喚くのは堪えた。 > b r <

これは誇つていい事なのだと必死に自分に言い聞かせて。 > b r <

これから自分は妻としての役目を果たすのだ、愛する人の役に立て何を嘆く事があるだろう。 > b r <

いつも思っていた事だ、ケニスの妻として相応しい行動が出来るようになりたいと。 > b r <

これが最後であろうとも、彼の役に立てるのだ。 > b r <

「奥様!？」 > b r <

珍しく声を上げて駆け寄って来たセバスチャンにティアファナは力なく笑みを返す。 > b r <

「大丈夫、何でもないの。旦那様をお見送りしただけ。早起きしたから、眠くなつたのかしら」 > b r <

「奥様、お顔色が優れないようです。寝室へお戻り下さい。今誰かを呼んで——」 > b r <

「いいの、一人で行けるから。少しだけ眠るわね。セバスチャン、昼には起こしてくれる？」 > b r <

「かしこまりました」 > b r <

納得のいつていない顔のセバスチャンに苦笑して、ティアファナは力の抜ける体に叱咤しながら氣力を振り絞って立ち上がる。 > b r <

やるべき事はまだある、少しだけ眠って一刻も早く支度をしなくてはならない。 > b r <

足を引き摺るようにして寝室に戻りベッドを身を投げ出すと、ぼんやりした頭でこれからの事を考えた。 > b r <

特に惜しい荷物はない、ケニスから贈られた手紙だけは持つて行く。 > b r <

それくらいならば、きっと許されるに違いない。 > b r <
兄に連絡をして、……その前に落ち合う場所を決めておかなければ。 > b r <

一体何と言われるだろう、いやあの兄ならきっと妹の「里帰り」を喜んでくれるはずだ。 > b r <

きつと、夫も——ケニスも、ほつとする。 > b r <

例えばケニスと過ごした時間がどれほど夢のようであっても、もう夢だったとは思わない。 > b r <

全て受け止めなければ、いつまでも少女の気分のままではいられないのだから。 > b r <

確かに彼と夫婦として過ごした、苦しくて寂しくて嬉しくて切なくて愛しかった日々を――幻にはしない。 > b r <

ずっと好きだった人、一目で心を奪って行った人、少し子供っぽくて意外と照れ屋で、愛しい貴方。 > b r <

「さようなら」 > b r <

貴方の憂いは、私を取り除いてあげる。 > b r <

続編 2 - 2

どうにもこれではいけないと、ケニスは昼食もそこに溜息を
禁じ得なかった。 > b r <

事実も、「妻」の事も、理屈は理解出来ているのにも関わらずだ。
> b r <

自分はこんな人間だっただろうか、何度も自身に対して投げかけ
た疑問を再び投げる事になる。 > b r <

自分の中の事実や世界と目の前に広がるそれが合致しなかった事
など、未だ嘗てあっただろうか。 > b r <

この数日嫌になるほど反芻して、ケニスはただ戸惑うより他なかつ
た。 > b r <

こんな事は初めてで、全く解決の糸口が見付からない。 > b r <
そうした自分自身にも戸惑うのだから、困惑は更に深くなるばかり
だ。 > b r <

努めて冷静にこの事態を分析してみるものの、物事を順序立てて
整理する事は出来るが、やはりその先の決定的な打開策は出て来な
い。 > b r <

恐らくきつかけは数日前の「あの日」の「あの出来事」だった、そ
れはわかる。 > b r <

だがそれから思ってもみない事態に直面し続け、自分が出来た事と
いえば逃げ出す事だけだったとケニスはすっかり自分に失望した。

> b r <

「どうした、新婚サン。悩ましい溜息なんかつきやがってまた奥さ
んの事でも考えてたのか」 > b r <

からかう同僚の声にも反論する余裕さえない。 > b r <

全く以ってこんな言葉を掛けられるという事もケニスを混乱の極地
に追いやるのだ。 > b r <

少なくとも以前はこんな風に冷やかされる事など皆無だった。 > b

r<

「俺は日頃、そんなに妻の事ばかり話していたか?」>br<
恐る恐ると聞いた言葉に同僚は食べていた昼食をもぐもぐとやつてから大いに頷く。>br<

「そりゃあもう。何かという奥さん奥さん。あんまりにもお前が酷いから、今じゃお前に粉を掛けるような女性もいなくなったのがいい証拠じゃないか」>br<

呆れたように投げられた同僚の視線を追うと、どことなく冷めたような女性の視線に気付き、だがそれもすぐ逸らされてしまう。>br<

ケニスは両手にじつとりと嫌な感じの汗をかく。>br<
女性から温度のないものどころか、視線を逸らされる事など一度としてなかったというのに。>br<

妙な焦燥感と孤独感を覚え、またしてもそんな自分に当惑してしまふ。>br<

出口のない迷路に放り出された鼠はこんな気分かとケニスは眉を寄せた。>br<

そんなケニスに同僚はふんと鼻を鳴らしティーカップを呷るように口にする。>br<

同僚の行動にケニスの方も片眉を上げて見た。>br<

自分が知る限り、目の前のこの男はそんな自棄にも似た行動は自ら控えていたはずだ。>br<

ケニスの心情を察したのか、同僚は片目を眇めてみせる。>br<

「お前のお蔭で目が覚めた女性が多いのさ。夢から覚めて現実の男と向き合う、ではそのお相手にはどういった男がよろしいでしょうか?」>br<

「……ガイラーか」>br<

「ご名答。全く、ある意味お前のお零れを与っていた連中にはなんとも確かに夢の終わりだよ」>br<

自分の所為ではないだろうと溜息をついて見せながら、ケニスは

話題の人を思い出す。 > b r <

ロビン「ワット」ガイラーは両親共名門の家柄で今社交界の若き花形だ、ケニスから多少色気を除き誠実さを加えるとああなるとは他の同僚曰く。 > b r <

如何にも好青年といった美貌に反さず、先日一言二言交わしたケニスも彼を誠実な人間と受け取った。 > b r <

確かに女性から見ればこれ以上ない物件だろう、遊びとしては一流の相手であったケニスが「使い物」にならないとわかれば、今度は堅実さを求めてしまうのもわからなくはない。 > b r <

そうだとしても難易度はガイラーとて相当に高いだろうとケニスは他人事のまま思う。 > b r <

ケニスとは違い生粋の貴族である彼はだからといって、最早低俗とも呼べるような貴族の遊びには興じないと有名だ。 > b r <

むしろ今時どうかと言えなくもない高潔さすら持っている。 > b r <
そんな人間の眼鏡にケニスから目移りしたような女性が果たして移るだろうか。 > b r <

そう例えば、彼のような実直な人間に相應しい女性は、若く美しく彼と同じ高潔で実直な……。 > b r <

「どうしたんだ、今度は顰めっ面して。頭痛か？」 > b r <
「ある意味、な」 > b r <

またつきそうになった溜息をケニスは意図して噛み殺す。 > b r <
全く自分自身のおちこちが分離しているようで敵わない、ふと無意識になったとたんに理解の及ばない感情らしき感覚が湧き上がって来るのだ。 > b r <

もどかしい事この上ない、それなりの人生経験もあるいい年の男が疼きを持て余してどうにも出来ないなどと。 > b r <
自分の事ながら嘲笑ってやりたい気分だった。 > b r <

汗ばんだ手でぐしゃりと思いを潰すように髪を掻き回そうとしたその時、ほっそりとした手が横から伸び二人が挟んでいた丸いテールに置かれた。 > b r <

「ヴァレリー」>br<

「ええ、ケニス。お久しぶり。アンディも」>br<

「やあヴァレリー。一緒にどうだい？」>br<

「お邪魔しますわね。この機を逃したらいつになるかちつともわからないんですもの」>br<

ヴァレリー「ディリアスはつんとケニスに向かって顎を逸らして見せそう言った。」>br<

アンディが引いた椅子に腰を下ろすヴァレリーから上着を受け取ってウェイターに手渡す。>br<

艶やかな髪を揺らしていつもながら優雅な仕草で注文を済ませたヴァレリーにケニスは内心苦笑した。>br<

ヴァレリーはケニスの叔父の前妻との子で従妹だ、年が近い事から二人は幼い頃よく一緒に遊んだものだ。>br<

しかしぱつと派手な外見の印象通り、やる事なす事大胆なヴァレリーにはケニスも散々手を焼かされた。>br<

おまけに一方的にケニスをライバル視して来るのだから、年頃以降は取り付く島もない。>br<

ケニスに遅れを取ったと再三周囲がもつと慎重になれと言いつけさせたにも関わらず、散々今までこねて逃げ回っていた結婚までしてしまった。>br<

相手はガイラーとはまた違った意味での「お坊ちゃん」で、ケニスにはこの「アマゾネス」の尻に幾ら敷かれようと不平を言うタイプに見えなかったが。>br<

「今日こそきつちり話を進めさせて貰いますからね。貴方と来たらこの数ヶ月というものの何か言う前にさつさとご帰宅なんですもの。」

ええ、お逃げにならないように今日こそは招待して頂くわ。結婚式にも出れなかったのですものね、当然ですわ」>br<

「それってケニスの結婚式の時君が熱を出して寝込んでいたからで、それに君は最近まで旅行を……ああいや何でもないとも」>br<

黒い目に射抜かれて口を噤んだアンディにケニスは同情の視線を

きりきりと胸を締め付けるのは罪悪感と、そして……。>br<
じつと自分に注がれる視線を何とか意識の外に追いやろうとして無駄に終わり、仕方なくヴァレリーを連れて物理的に逃げる。>br<
逃げる——このケニス「バークレ」が女性から逃げる！>br<
まるで酷い喜劇でも自ら演じているようで、道化に成り下がった気分だった。>br<

しかし皮膚の下から今にも突き破って出て来そうな何かを抑えるのに精一杯で、どこにも自分が知る「ケニス」は見当たらない。>br<

ヴァレリーとの仕事の話に集中し、ティアファナが作ったという食事も味わう間もなく舌に乗せたとたんに飲み込む。>br<
例えば賛辞の一つでもしようものなら、自分が何を言ってしまうのかわからなかった。>br<

糸で操られた道化師を演じた苦痛とも呼べる時間は恐ろしく長く、そして自身の中の「何か」との孤独な戦いであった。>br<
興味を隠そうともせず「妻」に視線を注ぎ話題を振るヴァレリーにいつそ怒鳴りたい気分だったが、しかしその衝動も隣にいる存在自身によって凍結させられる。>br<

ティアファナが傷付いているのはわかっている、そしてそれに対し理不尽にも痛む自分の心も。>br<
だがすっかり言葉を失い、ケニスはティアファナを前にするとどうしても舌がもつれてしまうのを自覚した。>br<
何を言っているのか、どう説明したものか、そんな考えだけが頭を空回りし言葉となって出ては来ない。>br<

こんな状態のまま何かを言えば言うほどティアファナを傷付けてしまうような気がして、そしてそんな自分が酷く嫌に感じた。>br<
堂々巡りをここ数日喚き出さなくなるほど繰り返している。>br<

そんなケニスを知ってか知らずか、首尾よく仕事の話を推し進めたヴァレリーだけは満足げだ。>br<

内心忌々しい思いでヴァレリーを連れ出し、ケニスの頭には一刻も

早くティアフアナから離れる事しか頭にはなかった。>br<
自分がそうさせていながら、これ以上ティアフアナの落ち込んだ気配を感じていたくない。>br<

文字通りまたしても逃げ出したケニスにヴァレリーが階段を下り切った所で綺麗に整えられた片眉を上げてみせる。>br<

これはすつかりケニスの母にそっくりでケニスは最早辟易とした。

>br<

母に多少なり似ていると自覚があるケニスだけに、鏡を見ているようにうんざりとする部分がある。>br<

昔馴染みは察しいい分、こんな時には非常に厄介だった。>br<

「言い分は聞かせて頂きましょうか？」>br<

「……話せる範囲にはない」>br<

盛大に溜息をついたケニスにヴァレリーが眉根を寄せる。>br<

「なによ、溜息なんかついて。今更奥様に恋煩い？本当に貴方つて昔からそうよね」>br<

気安くなつて来るとすぐに口調が砕けるそっちもそっちだとケニスは内心ごちる。>br<

違つと首を振つて見せても、ケニスはその真の意味が自分でもわからなかった。>br<

そつだ、全く何もかもがわからない、と途方に暮れてしまう。>br<

「きちんと話し合いなさいな、まだ若いお嬢さんにあの態度はないわ。夫の機微を何でも察しろというのは酷よ。それに比べて私の夫は——」>br<

「わかつたわかつた、君の下で潰れた可哀想なバート」>br<
「まあ、この甲斐性なし！」>br<

威嚇した猫のような声を上げたヴァレリーを馬車に追いやつて、ケニスは苦々しい思いを抱いたまま大股で書斎へ行く。>br<
ぐしゃぐしゃと思う様掻き回した髪を適当に撫で付け、気を紛らわせようと一冊の本を手を取った。>br<

頭に入っては来ない文字を目だけで追い掛け、少し取り戻したかと思われた平穩はしかしすぐさまドアを叩く音と切迫した声によって再び乱される。>br<

飛び込んで来たティアフアナの姿にケニスは力任せに首を捻って顔ごと視線を逸らし距離を取った。>br<

しかし全身全霊が勝手にティアフアナに集中してしまう。>br<彼女の白い肌が青褪め、そのまま透けて消えてしまうのではという馬鹿馬鹿しい危惧を抱く。>br<

その姿にまた嘔き出しそんな何かを己に感じ、ケニスはぐつと堪えて奥歯を噛む。>br<

一瞬でも冷静にさえなれたのなら、こんな事をせずには済んだ。>br<

自分自身への苛立ちのまま、今にも崩れ落ちてしまいそうな彼女に向かつて怒鳴る事などはなかったはずだ。>br<

ティアフアナを傷付けたい訳じゃない——そう言い訳して言い繕つてみても、付け足しのような言葉はただ虚しいだけ。>br<

出て行く間際の涙も忘れたような衝撃を受けた彼女の顔が忘れられず、ケニスは体中の空気がなくなるほどの溜息を吐き出し続け一睡もしないまま夜を明かした。>br<

予め言い渡しておいたセバスチャンも出て来ない中、たった一人支度を済ませ窓の外の白んだ空を見上げてから部屋を出る。>br<嫌に響く足音でティアフアナの眠りを妨げないかどうか気になった。>br<

恐らくそんな資格を今の自分は持つていないにも関わらず。>br<寝ても覚めても、確かにケニスは「妻」の事だけを考えていた。>br<

しかしどう接していいかわからない以上、闇雲にティアフアナを傷付けたくなければ顔を合わせないより他に行動が取れない。>br<

そう言い訳しているのかどうかとケニスが自嘲し、屋敷の中央階段

の手摺に手を掛けたところで足が止まった。 > b r <

階段の下で蹲るようにして膝を抱えていたティアフアナに胸が斬り付けられる痛みを覚える。 > b r <

「いつまでそうしているおつもりですか？」 > b r <

ティアフアナが振り向き立ち上がってそう言った声は、ケニスの思い違いでもなく何かに追い立てられているようだった。 > b r < いつまでも逃げ回ってはいられない、彼女は自分の「妻」なのだから。 > b r <

幼いけれどもしっかりと根を生やし真っ直ぐに伸びる若木のようなその心に目を奪われてしまう。 > b r <

「最初」に見た時ともまた違う美しさだった。 > b r <

「私、……私は、貴方の妻です」 > b r <

「……ああ、わかつている」 > b r <

絞り出したその声にケニスも全身が引き絞られる思いで告げた。

> b r <

わかつている、頭でも理屈でもわかつてはいるのだ。 > b r <

しかし赤子のように闇雲に手を伸ばす事も叫び喚く事も出来ずただその場に佇む。 > b r <

どうしたらいい、どう言えればいい、そもそも自分でわからない事を説明など出来ない。 > b r <

「どうかちゃんとお休みになつて下さい。貴方に憂いがないよう、私は精一杯努めますから」 > b r <

「いや……君は何もしなくていいんだ、そのままいい。ちゃんと休む、約束するよ」 > b r <

ティアフアナは悪くはないのだ、確かにそのまま素晴らしい人だとケニスでさえも思う。 > b r <

顔を合わせる事がすっかりなくなつたとしても、ケニスは彼女に対しての印象を違わないだろう。 > b r <

朗らかで細やかで、そしてその全てが自分に対する愛情故だと妙な自信さえも湧いてしまうほどだ。 > b r <

だからこそその光に晒された自分の後ろ暗さが際立ってしまう。>
b r <

——きちんと考えなければいけない。> b r <

ケニスはじつと自分の背を見送るティアファナの視線を感じながら馬車に乗り込み、組んだ両手を強く額に押し付ける。> b r <

悪戯に引き伸ばす事はティアファナを無駄に傷付け続けるだけだ。
> b r <

深い傷を恐れて浅い傷を見逃し続ければ、やがて致命傷になった事もわからずにいる。> b r <

あれだけ愛情豊かな彼女を無視し続けている事も限界に近くなってきた。> b r <

一つずつ説明しなければと、ケニスは何度も逃げ出そうとする自身の心に言い聞かせる。> b r <

例えばティアファナが泣く羽目になったとしてもだ、理由もわからず夫に避けられ続けていい気分のする妻など……少なくとも彼女はそうではない。> b r <

胸が痛かった。> b r <

あんな顔をさせた事、当たり前であろう言葉を言わせた事、そしてそれでも自分を気に掛けてくれる心が。> b r <

ティアファナを信じるのだ、そして彼女が愛してくれた自分を。

> b r <

ケニスは顔を上げぐつと拳を握り締める。> b r <

拙い言葉だろうと、自分自身でさえ嘲笑いなくなる気分であろうと、きつと彼女なら理解しようとする努力してくれるだろう。> b r <

そして自分も向かい合う努力をしなくてはならない。> b r <

他でもない自分自身の事であり、そしてこれは現実だ。> b r <

意を決し、ケニスは一度思考をクリアにしようとして仕事に集中し切り、帰りの馬車に乗り込みながら頭に浮かんだ言葉を一つずつ整理し始める。> b r <

自分に起こった事と、そしてそれに伴う感情。> b r <

反芻すると如何に自分のそうした点がヴァレリーの言う通り変わっていないのかわかる。 > b r <

恐らく本能に近い思いで彼女を大切にしているのだと悟った。 > b r <

漸く、認める事が出来た。 > b r <

だからこそ戸惑ったのだ、幼い日の自分をよく自覚しているからこそ。 > b r <

彼女は物ではない、まして自分を慈しみ愛してくれる人だ。 > b r <

上手くやれないまま振り回し、壊してしまう事が怖かった。 > b r <
彼女なしでは呼吸すらままならないと体が先に理解していた事に自嘲する。 > b r <

訳のわからない高ぶった感情のまま言葉を吐きその肌に触れ、そしてどうしてしまふかなどよくわかつていたから。 > b r <

彼女が怯えて逃げ出す前にこちらから卑怯にも逃げ出した。 > b r <
「手痛い言葉だったな」 > b r <

ヴァレリーの捨て台詞を思い出しケニスは苦笑する。 > b r <

慎重に説明すればいい、ゆっくりでもいいからもう何も隠さずに。 > b r <

自分の恐れも怯えも何もかもを彼女にわかって貰えるまで、何度でも。 > b r <

ケニスは無意識に緊張していた体から力を抜き息を吐いて凭れる。 > b r <

全く不甲斐ないと言うより他はなかった、避けて通れなかった事にしてももう少しどうにか出来なかったものかと愚かにも自分を恨みなくなる。 > b r <

——仕事を終え三日ぶりに家に帰るといふ日、ちょっとした事故に遭った。 > b r <

馬車を停めてどこかへ買い物をしに行こうとしていた途中、まさに立て付けをしている最中の店の看板がケニスの上に降って来たのだ。

> b r <

そして大した怪我もなかった代わりに、恐らくはここ数年の記憶を無くした——もっと正確に言うならティアファナに関する事は全て

> b r <

記憶を無くした事もわからなかった始末で、自ら馬車で病院に行ったりその事を仕事場に報告しに行ったりして漸く周囲の反応である程度の状況と自分が結婚した事を知ったのだ。> b r <

大事にはするまいと冗談でも言われた気分でその場は流し、家に帰って出迎えた「妻」を見たたん冗談では済まなくなった。> b r <
見るからに自分より随分と年若いであろう彼女に数々の浮名を流したケニスに全く気の利いた言葉を発せなかったのがそもその始まりだったのかもしれない。> b r <

女性を見て言葉に詰まり足が動かなくなるなどという体験をしたケニスは、その訳のわからない自身の感情と行動にすっかり戸惑ったという次第だ。> b r <

「打ち所が悪かったか」> b r <

すっかり異常なしと診断した医者など当てにならないと自分を棚に上げ酷く信頼を下げたものだ。> b r <

常に新しい事が舞い込んで来る仕事や社交界事情などはどうにかなつても、「妻」を迎えていた自分の「家庭」は全く儘ならない。> b r <

記憶が抜けている事を打ち明け医者之首でも絞めておくべきだったと何度後悔した事か。> b r <

それもこれも今まで例外もなかった「自分」の人生を過信していたからだろう。> b r <

その場限りの恋を楽しみ、根無し草のようにあちこちを自由に飛び回るそんな人生を疑いもしていなかった。> b r <

一人の女性を愛するのさる事ながら、ああも一途に愛される事も考えた事はない。> b r <

受け入れてしまえばぞつとする。> b r <

自分が逃げ回っている間に愛想を尽かされてしまったら、恐らく自分
分は取り返しもつかないものを自ら逃がしてしまう事になるのだ。

> b r <

今この気持ちが愛と呼べるものなのかはわからない、しかしこれに
名前を付けるべきは彼女のような気がした。 > b r <

最初に出迎えてくれて以来見た事のなかったティアファナの笑顔
が見たいとケニスは思う。 > b r <

全く憶えのない自分を夫と受け入れられなくとも、また新しく始め
て貰えるよう何でもしたいと気持ちが急いた。 > b r <

欲望を抑える事など何だというのだとケニスは鼻を鳴らす。 > b r <
今までのようにただ相手の立場と出方を見て解放すべきものではな
い、彼女の心を思いやれば自ずと最善の行動出来るはずだ。 > b r <
この数日、そうしてティアファナが支えてくれようとしたように。

> b r <

確かに少し前までの「自分」はやつてのけていたのだから。 > b r <
ケニスは何度も途中土産物を手にしたくなつたが、一刻も早く屋
敷に辿り着く事を優先した。 > b r <

馬車が止まるのと同時に自ら飛び出す勢いで屋敷のドアを使用人よ
りも早く開け放つ。 > b r <

だが待ち構えていたセバスチャンの顔色と言葉によつて、ケニスの
全ては遮られた。 > b r <

「大変です、旦那様。奥様が屋敷をお出になられたまま未だお戻り
になつてはならず——」 > b r <

ざつと体中から血の気が引く嫌な音がケニスには聞こえた。 > b
r <

「侍女によりますとお荷物が幾つなくなっているそうで、馬車の
行方を捜させましたが途中お降りになつてからは行方が」 > b r <

「つ実家だ！ティアファナの実家に馬車をつ！」 > b r <

「はい！」 > b r <

ドツドツと痛いほどケニスの胸が脈打ち、視界に映る屋敷に彼女

の存在がない事が想像以上にケニスを打ちのめす。 > b r <

だがすぐにケニスは自分を奮い立たせた。 > b r <

例え遅くとも構わない、逃げられようとも何度でも追い掛ける。

> b r <

彼女を愛した記憶があってもなくとも、これは多分二度目の――。

> b r <

続編 2 - 3

無意識に出そうになる溜息を何度も押し殺し、ティアファナは馬車の揺れに身を任せる。 > b r <

じつとしているとまた溜息が出そうになりそして押し殺す、その繰り返し。 > b r <

ディーンは仕事で近くに来ていたらしく、恐ろしいほど呆気なく、そしてご機嫌の返答が返って来た。 > b r <

指定した場所にティアファナが辿り着く前に早馬で返って来た手紙だ、恐らくディーンは先に到着して待っているに違いない。 > b

r <

それが嬉しいのか呆れるのか、ティアファナは判断に迷うところだ。

> b r <

とりあえず、実家から締め出される事だけはないだろうとほっとする。 > b r <

「あ、あの、ティアファナ様。これを機に少々ごゆるりとされては如何でしょう？」 > b r <

「……私、忙しくしているように見えたかしら」 > b r <

首を傾げたティアファナにアナが慌てて首を振る。 > b r <

「そうではございません。いつもいきいきとした様子でいらつしやいましたか……時には休息も必要ではないかと思うのです」 > b

r <

そう言ったアナの言葉を反芻し、やがてティアファナは少し微笑んで頷いた。 > b r <

確かにとティアファナは思う、ケニスと意思が通じてからはある意味目まぐるしい日々だった。 > b r <

義母とあちこち買い物へ出かけるようになったり、勿論ケニスともあちこちを見て回った。 > b r <

楽しくて、時も疲れも忘れる日々。 > b r <

「そうね……刺繍も途中のままだったものがあるし、家でゆつくりと過ごすのもいいわね」>br<

いつまでそうしているのかと、ティアファナは不意に胸を襲った不安から目を逸らす。>br<

そうする事も必要だと何度も自分に言い聞かせた。>br<

出来る事はやったのだ、夫の為に最善を尽くせたはずだ——けれど胸を過ぎるのは、寂しさだろうか？>br<

「あ、見えて参りましたよ。そうだわ、途中お買い物でも……」>br<

アナがそう言い掛け、馬車が停止したその直後だ。>br<

「っ！？」>br<

「ティアファナ！」>br<

バンツと勢いよく開かれた馬車の扉から飛び込んで来た塊がティアファナに向かって抱き付いて来る——前にティアファナの隣から拳が飛んだ。>br<

「無礼者おおおおおっ！——あ」>br<

アナの拳を腹で受け止め足元で蹲る姿にティアファナは慌てて上体を折り覗き込む。>br<

「だ、大丈夫ですか兄様っ」>br<

「あああああああ申し訳ございませんディーン様！私てつきり不埒者かとっ」>br<

ある意味そうであるには違いなかったので、ティアファナも訂正はしなかった。>br<

ディーンは腹を擦りながら大丈夫だと片手を上げてみせる。>br<少々額に脂汗らしきものが浮かんでいた。>br<

「相変わらずアナは容赦がないな、頼もしい事だ。そうでなくてはティアの侍女は務まらんからな」>br<

「は、有り難きお言葉。大変申し訳ございませんでした」>br<

「兄様、突然扉を開けるのは如何なものかと思えます。あれでは誰でも勘違いをしてしまいます」>br<

「久しぶりにお前に会うのだ、嬉しさが逸ってしまつてな。さあ行こう、ティア」>br<

矢継ぎ早にそう言つたディーンはティアファナの腰に両手をそえて軽々とその体を持ち上げて馬車から降ろす。>br<

「ディーン様！幾らティアファナ様はディーン様の妹君なれど、すでにケニス様の奥方になられたティアファナ様にどのように触れるなどとはつ」>br<

「こつちだよ、ティア」>br<

悲鳴を上げるアナなど最早聞いてもおらず、向かいに停まつている馬車へとディーンはティアファナを手招きした。>br<

それに歩み寄つてティアファナは大きな馬車に積み上げられた沢山の荷物を見上げる。>br<

これは何かと尋ねる前に駆け寄つて来たアナがディーンに言つた。

>br<

「お屋敷へ戻られる前にティアファナ様がご入用の物を購入して行きたいのですが」>br<

「ああ、それには及ばない。ここへ来る途中あちこち回つて用意させたからね。ほら、あれが最後だ」>br<

その言葉に目を向けると丁度御者が荷物を更に積み上げようと四苦八苦しているところだった。>br<

縄でこれでもかとぐるぐる巻きに馬車に縛り付けられている為落ちはしないだろうが、こんもりと盛られた荷物の山を付けて走る馬車は遠目にどう見えるだろうかと考えて、ティアファナは軽く頭痛がした。>br<

「さあ家へ帰ろう、ティア」>br<

ディーンが差し出した手を見詰め、ティアファナは己の手を伸ばしてそつと掌の上に指を乗せる。>br<

「帰る家」がまたしても実家になつてしまった事は、やはりどうも複雑な気持ちになつた。>br<

アナと共に馬車に乗り込み、中が広いのをいい事にべつたりとティ

アファナの隣に座ったディーンにアナは心底呆れ顔でティアファナは苦笑いだ。 > b r <

再び馬車が走り出してゆつくりとその場を去って行くのにティアファナは目を伏せる。 > b r <

――また遠くなつて行く。 > b r <

「そうだ兄様、父様はお元気？お手紙ではお元気だと言つて下さるのだけど、またお仕事のし過ぎで夜が遅くなつたりしてはいない？」

> b r <

「ああ、ティアの手紙が来る時は大抵早く寝るよ」 > b r <

頷いたディーンにティアファナはほつとしたが、それを正面で聞いていたアナは、大旦那様はティアファナの手紙に興奮し過ぎてある意味寝ていられなかったのだと察する。 > b r <

「家に着いたら父様の好きな物を作らなくては。家で料理をするのも久しぶりだわ」 > b r <

「ティアファナ様、お休み下さいと申し上げておりますのに」 > b r <

「ティア、勿論私の好きな物も作るんだろう？」 > b r <

「ええ、勿論」 > b r <

笑い合う兄妹を前にアナは密かに溜息を禁じ得なかった。 > b r <
「父さんにも手紙を出しておいたから、今頃家に帰つて首を長くして待っているさ」 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r <

果たしてその言葉通り、着いた屋敷の扉を開けたところでティアファナを攫うように抱き締めたのは父のブレントだ。 > b r <

ティアファナは自分を小さな子供にするように横抱きにし頬擦りする父に苦笑しながら頬にキスをする。 > b r <

「お久しぶりです、父様」 > b r <

「よく帰つて来たなティア。本当に待ち侘びたのだぞ」 > b r <
ティアファナを下ろすと昔のように手を繋いで奥へと引つ込んで行こうとするブレントの後をディーンとアナが慌てて追う。 > b r <

今晩はシェフに任せて久しぶりの家族の団欒を楽しむ事にしたティ
アフアナだが、ディーンだけでなくブレントからも色とりどりの箱
の山を見せられた時には流石に脱力しかけた。 > b r <

一年ほど前まではこれが当たり前の日常だった、それがまるで遠
い日々のような気がしてしまうティアフアナだ。 > b r <

それだけケニスと共に過ごした日々が濃密だったのかとも思う。 >
b r <

確かにアナの言う通りだと、親子水入らずを理由に疲れ果てた顔
で久しぶりの使用人仲間達に会いに行ってしまった彼女を思い出す。
> b r <

こんな時にも必要なかもしれない、夫の事しか頭にないようでは
彼の負担になったところで仕方がない。 > b r <
暫く頭を空っぽにして、今日の前にある状況だけを楽しむ事に努め
るのもいいだろう。 > b r <

それも大人になる為には必要な事かもしれないのだと、ティアフア
ナは半ばそう自分を納得させた。 > b r <

「ティアフアナ、あちらでの生活はどうなのだ？手紙ではなく、今
日はお前の口から聞かせておくれ」 > b r <

「そんなもの！ティアがここに今いるのが事実じゃないか！あそこ
での生活が嫌になったんだろう、ティア？だから私は反対したんだ、
あんな男はお前には相応しくないと――」 > b r <

「に、兄様、そんな事はっ」 > b r <

「少しお前は黙っていなさい、ディーン」 > b r <

「父さん！」 > b r <

身を乗り出したディーンを手で制し、ブレントは優しくティアに
微笑みかける。 > b r <

「そうなのか、ティア？」 > b r <

「いいえっ、そんな事はありません。ケニスもお義母様も、皆優し
くして下さいました」 > b r <

「ほら見る、ティアはこう言っている」 > b r <

どこか自慢げに胸を張ったブレントに兄妹はそれぞれ違う意味で肩を落とした。>br<

ブレントは最終的に娘の言う事が全てで、ティアファナの結婚の時も最終手段の娘のおねだりに頷いてしまった前科がある。>br< 全く当てにならないとディーンは内心恨めしげにこちた。>br< 「ケニスの為に……必要な事だと思ったから、出て来たのです」>br<

「そうか。まあゆっくりしていなさい、ここはいつだってお前の家なのだからね」>br<

微笑んだブレントはティアファナを手招きし、隣に腰を下ろした娘の髪を優しく撫でる。>br< それに微笑んでティアファナは久しぶりの父の肩に頬を預けた。>br<

これだけ早くこの家を出る事にはなったが、しかしティアファナに後悔はない。>br< ただ父の言うようにすでに懐かしいこの家が自分の居場所の一つであると強く感じた。>br<

——更にティアファナの隣に来て妹の頬を父から奪い返そうとする兄と父の攻防戦に目を瞑れば。>br<

「そうだ、ティア。その箱を開けてご覧、前からお前に贈ろうと思っていた物が丁度届いたんだよ」>br<

「何でしょう……ありがとうございます、開けて見ます」>br< ギリギリとディーンを押し返しながら言うブレントにティアファナは頷いて、言われた箱に歩み寄ってその包みを解いた。>br< 中には見覚えのある淡いオレンジの花が散ったドレスだった。>br<

驚いてブレントを振り返ったティアファナに微笑みが返る、その隣にいたディーンもドレスを見て目を見開き動きを止めた。>br< 「父様、これは……」>br<

「そうだよ、ロレッタのドレスをお前に合わせて直したんだ。ロレ

ツタもお前と同じで華奢だったからな、あまりサイズは直さずに済んだようだ。お前はまだこれから成長して行くからね、少し大きめにして貰ったよ」>br<

「父様！」>br<

ティアファナは立ち上がると父に駆け寄って抱き付いた。>br<

「ありがとうございます、大事に着ます」>br<

家に多く飾られている母の肖像画の中でも、このドレスを着たものが一番多い。>br<

あまり外に出る事もなかったロレッタが、一番好きな花といつも傍にありたいと望んだ事でブレントが昔作らせたものだ。>br<
ティアファナにとって母はこのドレスがとてもよく似合っていたと思う。>br<

母を思い出す時はいつもこのドレスを着ていた。>br<

「早速着て見せておくれ」>br<

「はい」>br<

ティアファナは大きく頷いてドレスを胸に抱え自室へ行く。>br<

久しぶりの自分の部屋は以前と同じように整えられていた。>br<

寂しく、そして心苦しく思わなかった訳ではない。>br<

早くに妻を亡くし、そして一人娘である自分も早くに嫁ぎ、父を残して行く事に。>br<

ディーンとはあの通り上手くやっているようだが、ディーンは子供を持たぬ内に離婚を繰り返してしまっているの、やはりブレントは寂しいのではないだろうかと思ってしまう。>br<

ティアファナとして手紙より直に父の顔を見た事が嬉しかった。

>br<

これをいい機会と思い、嫁いであら出来なかった親孝行をしつかりしようとティアファナは大きく頷く。>br<

途中使用人の部屋に寄ってから呼んだアナに手伝って貰い、母のドレスを身に纏って鏡の前に立った自分に不思議な思いを抱いた。

> b r <

ティアフアナは昔から母のような人になりたいと願っていた。>
b r <

死しても尚あれだけ父に愛される、そしてそれだけ誰かを愛せる、
そんな人になりたいと。> b r <

幼い頃は父にねだって話を聞いては母の真似をしたものだった。>
b r <

ロレッタは花が好きだったと聞けば庭弄りを覚え、ロレッタが音楽
を好んだと聞けばピアノを習い、ロレッタの好きだったお菓子を聞
けば料理を始めた。> b r <

全体的な雰囲気はよく母に似ているとティアフアナ自身もそう感
じる。> b r <

しかし幼い頃理想とした母に少しでも近付けているだろうか考え
れば少々疑問が残った。> b r <

母は父をどんな風に愛し、そして接したのだろう。> b r <
聞いてみたかった。> b r <

「よくお似合いですわ、ティアフアナ様」> b r <

ほうと感嘆の息を零したアナを振り返ってティアフアナは微笑む。
> b r <

「ありがとう」> b r <

「さあ、大旦那様にお見せしなくては。きっと涙を流してお喜びに
なられますわ」> b r <

その冗談にティアフアナは笑えなかった、尤もアナは冗談で言っ
たつもりはなかったが。> b r <

動きやすく軽いドレスは自然とティアフアナの足取りを軽くし、
ステップを刻むように歩く。> b r <

これを着た母と父が庭の木の前で微笑み合っている絵を思い出して、
ティアフアナは思わずにつこりと笑った。> b r <

ドレスを身に着けた事で少しでも母に近付けやしなだろうか、僅
かに期待に胸が弾む。> b r <

勿論、今すぐに夫が屋敷のドアを叩いて迎えに来てくれるなどとは思っていないが。> b r <

でもいつか、もしかしたら、そんな日が来るかもしれない。> b r <

ティアファナはそう願う自分の心を許した。> b r <

「父様、お待たせしました」> b r <

「ティ……—っ！」> b r <

「っ……！」> b r <

再び部屋に戻ったティアファナは、駆け寄ろうとした父に足を掛けずでのところで耐えた父から反撃を食らう兄の姿から視線を逸らし、後から入って来た使用人が再び淹れ替えたお茶をソファに腰掛けて口にする。> b r <

本当にまたこの日常に戻って来たのだなあと、父と兄の抗論を聞きながらティアファナは思った。> b r <

「よく似合うよ、ティア」> b r <

「ああとでも綺麗だよ、ティア」> b r <

「……ありがとうございます」> b r <

ディーンの顔を驚愕んでいるブレントと、ブレントの足を踏み付けているディーンに、ティアファナは苦笑いでそう言った。> b r <

ふとケニスは何と言っただろうと考え、溜息を零しそうになった口でクッキーを噛む。> b r <

想いを通じてからのケニスならまた「賛辞するに相応しい言葉が見付からない」などと言っかもしれないが、今のケニスはどうだろう。

> b r <

また戸惑ったように目を逸らし、それでも言葉だけは告げてくれるだろうか。> b r <

しつこくティアファナはクッキーを噛んで、お茶を飲み思考と共に流し込む。> b r <

すると漸く息子との戦いに勝利したらしいブレントがティアファナの前に跪いてその手を取った。> b r <

「本当に……本当によく似合っているティア」>br<

「父様」>br<

ぎゅっとその手を握り返しティアファナは微笑んだ。>br<

「明日、お仕事は？」>br<

「いや、ないよ。ティアがこうして家にいるのに仕事になど出かけていけない」>br<

「それなら明日はお庭で昼食を取りましょう。私が全部作りますから、ね？」>br<

あの庭の両親もそうしていたらしい。>br<

遠くに出かけられない母の為に、父が少しでもピクニック気分を味わわせようと、庭で食事を取ったのだ。>br<

一瞬間を震わせたブレントはやがて大きく何度も頷く。>br<

「ああ、そうしよう。……そうしよう、ティアファナ」>br<

「わ、私も行くぞ！」>br<

立ち上がって声を上げたディーンにブレントの一瞥が飛んだ。>br<

「お前は明日仕事だろう」>br<

「休むに決まっているだろう」>br<

「仕事を突然休むのは感心しないな、ディーン」>br<

「父さんだってそうじゃないか」>br<

「私はこの年だ、いつなりとも休んでいいと周囲からも言われていてね」>br<

「私だって働き過ぎはよくないと言われているっ」>br<

「大丈夫だよ、お前はまだ若いのだから」>br<

「とにかく私も明日は仕事を休むんだ！——アトウロ、アトウロ！明日は仕事を休むぞ、今すぐ社に連絡を！アトウロ！」>br<

執事の名を呼びながら慌しく出て行ってしまった息子に苦笑を零す父をティアファナが見下ろす。>br<

「全く、あれは誰に似たのだろうね」>br<

「父様でしょう？」>br<

「……私はあんなに酷くはないよ。ところでティア、本当のところはどうだい?」>br<

有無を言わずティアファナを膝に抱き上げソファに座った父をティアファナは見上げて首を傾げる。>br<

しかし先を促す優しい目を察し、少し視線を膝の上に落とした。>br<

「本当、です。ただ、ケニスは私がいると家でゆっくり休めないよ
うなので……それで」>br<

言い終わる前に自分を抱き締めて来た腕にティアファナは体を委ねた。>br<

こうして父に包むように抱き締められるのはいつぶりだろうとぼんやり思いながら。>br<

ケニスの時とは違う、ただ絶大な安心感だけがそこにあった。>br<

「お前はあの人を愛しているんだね」>br<

「……そうです、とても……とても」>br<

「少し寂しいね」>br<

そんな父の言葉にティアファナはまた首を傾げて見上げる。>br<

「お前がいつの間にか、そんな風に大人になっていたなんて」>br<

「いいえ、私はまだちつとも」>br<

「そうかな。少なくとも、愛する人の為に自身にとって辛い決断を自分でするほどには、お前は大人になったんじゃないかな。私はそう思うよ。昔からお前は大抵の事は私に頼らず一人でやってしまってたがね」>br<

悪戯げに微笑んで片目を瞑った父にティアファナはくすくすと笑う。>br<

そうだった、ティアファナがあれこれ何か新しい事を始める度に、父と兄が後ろから付いて来て、手を貸そうとするとティアファナは

いつも不満げに拗ねたのだ。 > b r <

「少しずつ、そうなれていたらいいです。私、母様のような人になりたいの」 > b r <

「お前は本当にロレッタによく似ているよ。大丈夫、ティアファナ、お前は私の自慢のレディなんだからね」 > b r <

笑った父が頬にキスをすると、ティアファナもにつこりと笑ってキスを返す。 > b r <

少しの間そうして二人は何かの秘密を共有するようにくすくすと笑い合った。 > b r <

「——なんだろう、表の方が騒がしいな」 > b r <

顔をドアの方に向けてそう言った父の膝から降り、ティアファナも頷く。 > b r <

どうやら兄が何事かを怒鳴っている、そしてそれに反論するような切羽詰った声も辛うじて聞こえた。 > b r <

やれやれとブレントが肩を竦めて出て行こうとするのにティアファナも後に続く。 > b r <

「お前はここにいなさい」 > b r <

「いいえ、兄様に何かあつては……」 > b r <

「何かあるように育てはつもりはないがね」 > b r <

はあと溜息を吐いて少しティアファナに距離を取らせると、そつと玄関の方へと歩いて行く。 > b r <

父の背中を見守りながら、徐々に大きくなって来たディーンの怒鳴り声にティアファナは目を瞬いた。 > b r <

「何度言ったらわかる、ここは貴様のような男が来る所ではない、帰れ！」 > b r <

「夫が妻を迎えに来て何が悪い。いいからそこをどいて貰おう」 > b r <

続いて聞こえて来た低い声にティアファナは思わず飛び出して階段の下にある姿を見付ける。 > b r <

「ケニス！」 > b r <

テ
イ
ア
フ
ア
ナ
の
声
に
顔
を
上
げ
た
ケ
ニ
ス
の
視
線
を
捉
え
た
と
た
ん
、
テ
イ
ア
フ
ア
ナ
は
咄
嗟
に
駆
け
出
し
た。
> b r <
> b r <
> b r <

長い長い時間だった、逸る気持ちのまま御者を急かしてみてもこれ以上馬の速度は上がらない。 > b r <

膝の上で握った拳は痛みすら麻痺して白く変色していく。 > b r <
早く、早く、早く、繰り返されるのはそればかり。 > b r <

どうしてと頭の隅がそんな己を嘲笑するのがわかった、けれどそれについての答えなど持ち合わせてはいない。 > b r <

そして浮かんで来るティアフアナの悲しげな顔に胸の奥が痛む。 > b r <

今にも消えそうな佇まいに手を伸ばして抱き締めなくなる。 > b r <
そうしてしまえばよかった、いつそ何も恐れずにそうしてしまえば、せめて彼女は今この手の中にいただろうに。 > b r <

ぐつと奥歯を噛み締め、体を揺さぶる振動に耐える。 > b r <
そうしていなければまた無意味に御者に向かって怒鳴り散らしそうだった。 > b r <

全く以前の彼女を憶えていないのに、どうしてかそのぬくもりが恋しいと思う。 > b r <

触れられないのがこんなにも嫌だ、無くす事は考えたくもない。 > b r <

だから、——早く。 > b r <

「だ、旦那様っ！」 > b r <

やがてどれくらいの時を経て、漸く止まった馬車が完全に停止し切る前にケニスは扉を蹴り開けて外へと飛び出した。 > b r <
目にした屋敷の扉に向かって駆け出し勢いよく拳を叩き付ける。 > b r <

返答がないのに苛立って、何度も拳を振り上げた。 > b r <

「どちら様で——ケニス様!？」 > b r <

「ティアフアナを出せ」 > b r <

扉を開けた使用人らしき男に詰め寄ると、たじたじとケニスの迫力に使用人が後退りする。 > b r <

焦りに突き動かされるままケニスが屋敷の中に入ろうとしたその時、足音と共に顔を見せたのはケニスも知っている男だ。 > b r <

デイン「アドルフ」クリフォードはケニスと並んで社交界では有名な人だ。 > b r <

ただケニスとは違ってデインは何度が結婚経験があり、そしていずれも子供を残さず離婚している。 > b r <

手当たり次第に手を付けるような好色でもないだけに、むしろケニスより女性方には人気があった。 > b r <

恐ろしく整ったその今は険しい顔を久しぶりに見たなと思い、ケニスははつとした。 > b r <

そうだ、この男には確か掌中の珠とも噂されているほど大事にしている妹がいたはずだ。 > b r <

まさかという思いにしかし否定は出来ず、ケニスは内心舌打ちした。 > b r <

昔の記憶が確かなら、この男とケニスは全くそりが合わない。 > b r <

性格的なものもさる事ながら、恐らくは根本的なところで似ているものが同属嫌悪を引き起こさせるのだらう。 > b r <

全く不本意ではあるが。 > b r <

きりりと自分を睨み付けた眼光に怯まずケニスも前に出る。 > b

r <

考えたくない事ではあるが、ティアフアナがこの男の妹であるに間違いはないだらう。 > b r <

ケニスでさえも一度デインの妹が如何に素晴らしいかという彼の「洗礼」を浴び辟易としたものだったというのに、どうして「自分」はそんな男の妹になど手を出したのか。 > b r <

……否、その答えは自分がここにいる事で出ている。 > b r <

例えばティアフアナが誰のものであるうとも、自分にとってそんな

ものは関係がなかったに違いない。> b r <

「ケニス」バークレー……よくものこのことこの屋敷に顔を出せたものだな、恥を知れ」> b r <

「久しいな、ディーン」アドルフ殿」> b r <

「貴様に名を呼ばれるのは吐き気がする」> b r <

数々の女性をその視線だけで蕩かしたという彼は、その女性達が見たら真っ青になるであろう嫌悪の表情を浮かべ吐き捨てた。> b r <

「ティアファナはどこだ」> b r <

「ティアは貴様の家を自ら出て来たのだ、教えてやる道理はないな」> b r <

ふんと鼻で嘲笑うディーンにかつとケニスの頭に血が上りかけるが、ここにティアファナがいると確信した。> b r <

ディーンを押し退けて奥へ行こうとするも、体格的にも同じほどの男に阻まれては思うように行かない。> b r <

「ちよつとした行き違いだ。通して貰おうか」> b r <

「行き違いだと？どうせ貴様の浮気癖がまた出たんだろう。だから私は言っただ、貴様のような男にティアは相応しくない」> b r <

「いい加減妹を理想化するのには止めたらどうだ？お前は昔から何も変わっていないな」> b r <

「貴様にだけは言われたくない」> b r <

ぎりぎりとお睨み合い、押しつ押されつの時間だけが過ぎる。> b r <

とうとう苛立ちに耐えられなくなったケニスが強引に押し退けようとするディーンの拳が寸前で避けたケニスの頬を掠めた。> b r <

「何度言っただわかる、ここは貴様のような男が来る所ではない、帰れ！」> b r <

「夫が妻を迎えに来て何が悪い。いいからそこをどいて貰おう」> b r <

睨み合ったまま、互いの手がそれぞれの胸倉に伸びようとした瞬間

間、悲鳴のような声に遮られた。 > b r <

はっとその声の方へケニスが目を向けると、目が合ったと思った時にはティアファナが階段の上から駆け出すところだった。 > b r <
「ティアファナ！」 > b r <

縛れそうな足元に慌ててケニスが駆け寄り、最後の段を蹴ったティアファナを全身で抱き留める。 > b r <

何故か途方もないほど世界を巡り歩いて、やっと辿り着いた場所のような気がした。 > b r <

ぬくもりと柔らかさと香りと、そしてその存在をしっかりとこの手に確かめる。 > b r <

「離れる！」 > b r <

鋭く上がったディーンの声にケニスは咄嗟にティアファナを抱き上げてディーンの手から遠ざけた。 > b r <

視線を戻すと驚きに目を見開いたまま、困惑し切った「妻」がいた。 > b r <

この人は自分の妻だとケニスは空いた自分の何かにすっぱり収まる如く、そう感じる。 > b r <

髪も瞳も鼻も唇も、何もかもが愛しく愛らしい。 > b r <

漸くこの手に触れられたと、ケニスは酷く安堵した。 > b r <

「ケニス……？」 > b r <

「いいドレスだね、よく似合っている。綺麗だ、ティアファナ」 > b r <

頭のどこかでそんな場違いな台詞をと思つても、ケニスはそう思うより先に言っていた。 > b r <

ただ本当によく似合っている、オレンジ色の花々はティアファナをより明るく見せた。 > b r <

一瞬きよとんとケニスを見上げぱつと頬を染めて微笑んだティアファナは、しかしドレスの花も萎れてしまいそうなほどに美しい。 > b r <

嘗て誰かにそう思った事があつただろうかとケニスは内心自嘲した。

> b r <

ただ口にした事があるのは、自分がどう思ったかではなく、相手がどう思うかの言葉だけ。 > b r <

その微笑みが向けられた事に嬉しくて心が震える。 > b r <

「母様のドレスを仕立て直して頂いたんです」 > b r <

「そうか……素敵だ」 > b r <

「ありがとうございます……」 > b r <

すぐ近くで見詰める瞳に、嘗ての自分も吸い込まれたのだろうとケニスは信じざるを得ない。 > b r <

そうしているだけで、今も自分の全てが惹き付けられてしまっているのだから。 > b r <

「騙されるんじゃないティアフアナ！こいつがどうせ他の女に現を抜かしたのだろう」 > b r <

すっかりディーンがいた事すら忘れていたケニスは、しかしティアフアナを腕から離さずにディーンに向かってふんと鼻を鳴らした。 > b r <

そしてティアフアナに視線を戻し、伺いを立てるようにそっとティアフアナの額に自分のそれを近付ける。 > b r <

「ヴァレリーは従妹で、ただの仕事相手だよ。あれは結婚もして夫を尻に敷いている」 > b r <

「嘘を言うな！」 > b r <

「ディーン殿、少し黙ってて頂けないか」 > b r <

「ケニス殿、久しいね」 > b r <

苛々とディーンに向かつて言ったケニスは聞き覚えのある声に顔を向け、そっとティアフアナを下ろすと目の前の人物に頭を下げた。 > b r <

「義父」としての彼に憶えはないが、しかし仕事相手としては何度か面識がある。 > b r <

貴族でありながらその手腕はケニスの父も舌を巻くほどだ。 > b r <
「ご無沙汰しております。突然の訪問になり申し訳ありません」 >

b r <

「いや構わないよ。丁度夕食だ、ケニス殿も一緒にどうかね？」>

b r <

「父さん！」> b r <

「は、頂戴致します」> b r <

流石にティアファナとディーンの父親だけあって、未だ隣を狙う妙齡の女性が後を耐えないという噂通りの笑顔をケニスにも惜しみなく与えたブレントにケニスも深く頭を下げた。> b r <

憤怒しているディーンに奪われる前にティアファナに向かって腕を差し出すと、恐る恐ると腕が取られる。> b r <

それに力が抜けそうなほど安堵を感じ、そして底から湧き上がるような熱いものを感じた。> b r <

ただ腕に触れられただけで、こんな気分を味わうとは思わなかった。

> b r <

欲望以外に、優しい気持ちさえ感じる事が出来るなんて。> b r <

誰かに縛られる事を嫌悪してさえた自分がどうだろう、小さな手に腕を繋がれている事が誇らしくて仕方がない。> b r <

なので、とりあえず斜め後ろから自分を突き殺そうという視線を送って来る義兄に見せ付けてみる。> b r <

突き殺そうから、刺し殺そうという視線に変わったただだった。>

b r <

食堂に通されティアファナの椅子を引くと戸惑ったような視線が見上げて来るのにケニスは微笑む。> b r <

そして自分もその隣に腰を下ろし、談笑を（主に義父と）しながら夕食を囲んだ。> b r <

しかしティアファナに説明する隙というものがない。> b r <

表面上穏やかにしているブレントは、言葉巧みにティアファナを今夜は絶対に引き止めておこうというのが見え見えた。> b r <

だがそれに丁度いいと乗り、ケニスはティアファナの部屋に泊まる事を承諾された。> b r <

ディーンは怒り狂って怒鳴り散らしてはいたが。 > b r <

少々場所が場所であるが、だがケニスに今ここがどこかを気にしている余裕はない。 > b r <

幾らティアフアナが自分を拒否しなかったと言って、悔しいがディーンの言う通り、ティアフアナが自ら屋敷を出て行った事実を変えられてはいないのだから。 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r <

用意された寝巻きに着替える頃にはケニスの緊張もピークに達していた。 > b r <

シャワーを浴びたというのに嫌な汗をかき始め、どうにも落ち着かない。 > b r <

恐らく初めて通されるであろうティアフアナの実家の部屋に一人待たされている所為もあるかもしれないが。 > b r <

当人がすでに嫁いでいるというのにすっかり整えられている部屋を見て、若干複雑な思いに駆られるケニスだ。 > b r <

笑顔で無言のプレッシャーをかけて来た義父は、仕事であった時よりも数段大きな存在に見えた。 > b r <

どうやら夫を庇ってくれたらしい娘の言う事を信じていると言いなからも、恐ろしいほど目が笑っていなかった。 > b r <

一体自分はある父親と兄相手にどうやって娘を嫁がせる事を了承させたのかと思う。 > b r <

まああらゆる手段を用いたであろうとは察せられた、何せ「今」ですら衝動に突き動かされるままこうしてここにいるのだから。 > b r <

控えめなノックと共にドアが開かれた瞬間、ぱちんとケニスの中の何かが弾ける。 > b r <

ふわふわとした裾の寝巻きを纏ったティアフアナのその頼りなげな姿は、あれこれ渦巻いていたケニスの思考を全て真っ白にさせた。

> b r <

「ティアフアナ……」 > b r <

手を差し出すと、一瞬ケニスの表情を窺ってティアファナはそりと細い指先を乗せて来る。>br<

思わずその感触に震えそうになる自分の手をケニスは必死に堪えた。>br<

ゆつくりと導いて中央に置かれていた椅子へとティアファナを座らせる。>br<

そして彼女の手を取ったまま許しを請う在任の如くその前に跪いた。>br<

そう、まさしくこれは懺悔だ。>br<

「どうか……聞いて欲しい。俺の話を」>br<

擦れた声で訴えると、小さくティアファナの頭が縦に振られる。>br<

それに安堵し僅かに息を吐いて、そしてケニスは大きく吸い込んだ。>br<

「俺は、君に関する記憶を無くした」>br<

「え……」>br<

「恐らくは数日前ちよつとした事故に遭って——」>br<

「事故!？」>br<

声を上げて立ち上がり掛けるティアファナを制して、宥めるようにその手を擦る。>br<

「大丈夫、殆ど無傷だよ。しかし頭に衝撃を受けた所為か、どうも君に会う以前の記憶しか持っていないんだ」>br<

さつと血の気を引かせたティアファナの手を強く握った。>br<

想像もつかない、もし逆の立場だったらと思うと、今でさえケニスには耐えられそうもない。>br<

愛しい人が自分の事だけを忘れてしまったなどと。>br<

「ケニス……」>br<

「ティアファナ、どうか——」>br<

「頭に衝撃を受けたなんて!後になって痛み出したらどうするおつもりですか。私だけではなく、お義母様もお義父様の事もお忘れ

になってしまったらどうするおつもりですか！」>br<

はっと気付いた時には大きく見開かれたティアフアナの目からははらはらと大粒の涙が零れ出る。>br<

慌てて手を伸ばし頬のそれを拭うも、後から後から切りもなく流れて来る。>br<

「もう一度お医者様に診て頂きに行きましょう。痛みがないのは今だけかもしれませんが、痣などがありますか？眩暈は？ちゃんと眠れていますか？」>br<

泣きながら矢継ぎ早に言うティアフアナにケニスが面食らってしまふ。>br<

そつと手を両頬に宛がうと、涙に濡れた瞳がケニスを切なげに見上げた。>br<

「どうして俺の事なんかをそつ心配する？幾ら記憶がないとはいっても、君を避け続けて逃げた事は事実だ」>br<

するとティアフアナは何度も首を振り、流れ続ける涙がぱたぱたと散る。>br<

それが酷く悲しく思えるのに、ケニスは場違いに綺麗だとも感じた。>br<

無意識にそつと近付いて唇で涙を受け止めれば、その温かさ信じられないほど自分の目頭も熱くなる。>br<

「わたしっ言いました……わたしは、あなたの、つまだって、言いましたっ」>br<

小さくしゃくり上げながら途切れ途切れにそう言ったティアフアナの唇を衝動的に己のそれで塞ぐ。>br<

ただ何も考えず心の赴くまま、深くこの甘やかな唇を味わおうと。>br<

ケニスはティアフアナに覆い被さるように上体を起こし、頤に指を掛け上を向かせるともつと深く唇を重ねる。>br<

何度も角度を変え擦り合わせ啄ばみ、ただ唇で彼女のものを味わう。>br<

いつしかお互いの唇がぼうつと熱を放つまで続けられた口付けを漸く止めると、ティアファナの開かれた唇から艶やかな吐息が零れてまたそれを奪いたくなる。>br<

「ティアファナ……」>br<

荒い呼吸を繰り返すティアファナを宥めるようにその頬を何度も優しく撫でる。>br<

気付けば自分の呼吸も乱れていて、舌も使わない口付けでこれほど昂ぶった自分に少し信じられない思いを感じた。>br<

そのまま抱き潰してしまわないかと、恐る恐る手を伸ばし細い体を抱き締める。>br<

そつと背中に回された手に、泣きたくなった。>br<

「君が愛しい。今、俺はそう思う」>br<

「……私の事、憶えてはいないのに……？」>br<

「ああ。そう、きつと、俺はまた君に恋をして、愛したんだ」>br<

不思議だった、あれだけ怯えていたものがすっかり自分の中から消え失せてしまっている事に。>br<

「嬉しいです」>br<

「君を憶えていなくとも？」>br<

ティアファナはゆつくりと、だがしっかりと頷く。>br<

「だって、私も貴方を愛しているから」>br<

年相応のそんな言葉に更に強くティアファナを抱き締める。>br<

この存在を失わずにすんでよかったと心底思った。>br
だがその思考にはつとケニスは顔を上げる。>br<

「別れるなんて言わないだろう？記憶が戻るかどうかはわからないが、俺は君を失いたくない。もう一度、始めから俺とやり直してくれないか」>br<

両肩を掴んで言ったケニスにティアファナは大きな目を瞬かせた。>br<

「わ、別れるなんてそんな……」>br<

「別れようと思ってここに帰って来たんじゃないのか?」>br<
するとふるふるとティアファナが慌てて首を振る。>br<

今度はケニスが目を瞬かせた。>br<

「私はっ……ただ、私がいるとケニスが休めないようだったので、それで」>br<

つまりケニスの体を案じるが故に家を出て来たと。>br<

ただ逃げ回っていただけの自分に、あんな辛い顔をして、そんな決断をさせてしまった。>br<

ケニスは再び目の前に跪き、ティアファナの両手を取る。>br<

「ティアファナ、もう一度……いや何度でも俺は誓う。夫として、君を愛する男として、君を幸せにする。以前のようにには出来ないかもしれない、それでも今の俺の精一杯で」>br<

「——はい……はいっ」>br<

再び涙を溢れさせたティアファナを抱き締めて、幾度もその頬に口付けを落した。>br<

以前の自分も、きっと同じようにするしかなかったのではないかと心のどこかでは思いながら。>br<

「よかった、……君に愛想を尽かされたのかと思った」>br<

「そんな事ないですっ。わ、私こそ、私がいつまでも子供だから、ケニスが呆れてしまったのかと」>br<

「君がまだ十代だっけ聞いて驚いたくらいだよ。ああ、容姿の事ではなくね。あんまりしつかりしているものだから、益々俺は自分の不甲斐なさを思い知った」>br<

少し首を傾けたティアファナは小さく笑ってケニスの首に腕を巻き付けて来る。>br<

そんないっそ子供っぽい仕草にこれ以上なくケニスの鼓動が高鳴った。>br<

「ティア……そう呼んでも?」>br<

「勿論です」>br<

笑顔で頷いたティアフアナに胸が温かくなるのを感じながら、ケニスはティアフアナを抱き上げようとその体に腕を回す。>br<ティアフアナがそれに気付いて彼女自身も立ち上がりかけた瞬間だった。>br<

ドレスの裾を自分で踏んでしまったらしい傾いた彼女の体を支えようとケニスが更に腕を伸ばす。>br<

そして床に落ちる前にその体を腕に抱き止めた事でほっと息を吐き出した。>br<

だがそれも束の間の事。>br<

ケニスはティアフアナの悲痛な叫び声にただ眉を寄せる。>br<上から見下ろす泣きそうな彼女の顔に、自分の心も泣きたくなったのを感じながら。>br<

>br<>br<

続編 2 - 5

その手を両手で握りながら、目を閉じている夫の顔をじっと見詰める。 > b r <

すぐ呼んだ医者に見せたところ外傷はないとの事だったが、ティアファナはその言葉に安堵は出来なかった。 > b r <

力ないその大きな手に指を絡めて祈るようにそこへと額を当てる。

> b r <

自分を庇ったばかりにテーブルに再び頭を強く打つ羽目になって、ティアファナは情けなさに泣きたくなった。 > b r <

もしまだ記憶が失われたのならと思うと居ても立ってもいられなくなる。 > b r <

己の記憶が失われる事ではなく、またケニスが苦しむ事になるのではないか——それが辛い。 > b r <

あんな状況に陥ってもケニスは再びティアファナを愛すると言ってくれた。 > b r <

それを願っていたはずなのに今はもうそうでなくていいとさえ思ってしまう。 > b r <

思い返せば記憶のない中ケニスは確かに苦しんでいたのだ。 > b r <

もし自分がその立場だったらと思うと、とてもケニスのように振舞えていたとは考えられない。 > b r <

すっかり記憶にない「夫」を見て、果たしてケニスと同じく少なからず心配するような言葉さえかけられていたものかと。 > b r <

きつと不安に苛まれ一番にこの実家へと逃げ帰っていたに違いない。

> b r <

幾ら自分を避けていたとはいえ、ケニスはそれをしなかった。 > b r <

そう、幾らでも方法はあったはずなのだ。 > b r <

己の記憶にもない女性を妻としておく道理などない、例え事実がそうであったとしても。 > b r <

ケニスが少しでもティアフアナ自身を顧みてもいなかったのなら、疾うに離縁を言い渡されていただろう。 > b r <

けれど追いかけて来てさえくれた、そして再びティアフアナの聞きたかった言葉をくれた。 > b r <

ティアフアナはふと息をついて顔を上げると、濡れたタオルで再びその顔をそつと拭う。 > b r <

ブレントはああ言ったが、やはり自分は遠く及ばないと感じた。 > b r <

よかれと思ってやった事でも、結局裏目に出てしまっているような気がしてならない。 > b r <

もつと自分が上手くやれていたのなら、ケニスは再びこんな目に遭う事はなかったのだ。 > b r <

誰も彼もがティアフアナはよくやっていると言う、——それがまるで子供をあやすような言葉に聞こえた。 > b r <

知らずはあと深い溜息を零してしまったとたん握っていた手がぴくりと揺れ、慌ててケニスの顔を覗き込むとうつすらとその目が開く。 > b r <

どくんと様々な思いが心臓を跳ね上がらせたが、ティアフアナはそつと夫の名を呼んだ。 > b r <

「……ティア……？」 > b r <

聞き慣れた呼び名にどこかほつとしたものの、ケニスに向かつて頷いて見せ、ティアフアナは立ち上がって部屋の外で控えていたアナに医者を呼びに行かせる。 > b r <

部屋に戻ると起き上がっていたケニスに慌てて駆け寄った。 > b r <

「ケニス！ いけません、まだ起き上がっては——」 > b r <

「ああ、頭が痛い。……俺は、どうしたんだ？」 > b r <

「今は何も考えず、お休みになつて下さい」 > b r <

半ば強引にケニスをベッドに押し付けるとドアがノックされ医者

が入って来る。>br<

ティアフアナも幼い頃から世話になっっているかかりつけの医者だ、視線をそちらに走らせるといつもの人の好い笑みが返った。>br<
「大丈夫だよティアフアナ、そんな顔をするもんじゃない。怪我人が君を心配して病人になるといけないからね」>br<

その言葉に視線を戻せばケニスが眉を寄せてティアフアナを見上げています。>br<

「さて、バークレー殿。痛むところはございますかな」>br<

「頭が、脇のところだ」>br<

「テーブルにぶつけた時にコブが出来ているようですから。吐き気や眩暈などは？」>br<

「いや、ない。……テーブル？」>br<

手際よく目などの状態を確かめていく医者に対し、ケニスは一人怪訝そうな顔をする。>br<

薬を処方して「安静に」と言い置いた医者が出て行くと、ベッドの脇の椅子に座ったとたんティアフアナは手をケニスに掴まれた。>br<

「俺は一体どうなったんだ？テーブルに頭をぶつけたというのは？」>br<

矢継ぎ早にそう訊ねるケニスにティアフアナの目が見開かれた。>br<

「憶えておいでではないのですか？私を庇って下さったのですよ？」>br<

「いや……それにここはどこだ？病院ではなさそうだが」>br<

暫くティアフアナはケニスの顔を見詰めて瞬きし、そしてゆっくりとその手を握り返す。>br<

焦るようなその表情を、出来るだけ落ち着かせるように。>br<

そして自分自身もまた冷静さを取り戻す為に。>br<

「では、街を歩いていた時に看板が落ちて来た事は？」>br<

「……ああ、そういえばそうだったな……俺は気を失ったのか？」

> b r <

「ええ、外傷は先程お医者様もコブが出来ただけだと仰ったでしょう?」> b r <

するとケニスは酷く顔を歪ませてティアフアナから視線を逸らす。

> b r <

具合でも悪くなっただのかとその視線を追いかければ、乗り出した体にケニスの腕が巻き付いてその体の上に乗り上げさせられた。> b

r <

慌ててティアフアナが上から退こうとしてもしつかりと腰に巻き付いた腕は剥がせそうにない。> b r <

まだ休まなくてはならない体の上に負担をかける事にならないかと気が気ではないティアフアナにケニスが言う。> b r <

「見るな。頼むから見ないでくれ」> b r <

「……ケニス?」> b r <

「全く、まるで喜劇役者だ! あんな事で気絶するなどと、情けない」> b r <

顔を胸に押し付けられたまま、ティアフアナはそんな言葉に精一杯で首を振る。> b r <

「情けなくなど……命を落していたかもしれないですよ?」> b r <

自分で言ってしまったてぞつとしたティアフアナは、身を震わせてケニスにしがみ付いた。> b r <

目の前にケニスがいたから思い当たらなかったが、確かに充分そんな可能性だつてあったのだ。> b r <

思わず力の抜けて行く体を抱き上げられて、見るなと言ったくせにケニスの目線まで顔を上げさせられる。> b r <

「大丈夫だ、ここにいるよ。心配を掛けてしまつてすまない」> b r <

「いいえ……本当に、ご無事で何よりでした」> b r <

緩く首を振ったティアフアナの頬がケニスの両手に包まれて、穏

やかな口付けが降って来る。>br<

「ところで、ここは？」>br<

「私の実家です」>br<

「な——……くっ！」>br<

「ケニス！どうか安静にしていして下さい」>br<

ゆるゆるとケニスの上から退くと、ティアファナは再びケニスの額をタオルで拭いた。>br<

しかし困惑の表情のままケニスは頭の脇に手をやって首を振る。>

br<

「一体どうして」>br<

「あの、丁度見付けて下さったのが先程のお医者様なのですよ。それで、この屋敷の方が近かったので、病院よりゆつくり休めるのではないかと。きつと記憶が混乱しているでしょう」>br<

他に上手い言い訳は見付からなかったが、確かに事故の時の記憶が曖昧なケニスは信じたようだった。>br<

そしてティアファナはブレントやディーンに全く話をしていなかった事を思い出してはつとする。>br<

また自分が家を出たなどとケニスに言われでもしたら、その記憶のないケニスは益々混乱してしまうだろう。>br<

「わ、私、何か飲み物を取って来ます。何がよろしいですか？」>br<

「君がここにいてくれたらいい」>br<

咄嗟に首を振り掛け、それを止めて静かにそう言ったケニスにティアファナの目頭が熱くなった。>br<

この数日間、どれほど望んだ言葉かわからない。>br<

けれどそれを願って縋るだけでは駄目なのだと悟った、例えケニスがそう望んでくれたとしてもだ。>br<

ティアファナはそつとケニスに顔を近付け、その頬に唇を落とす。>br<

子供のように目を瞬かせる夫が可笑しかった。>br<

「いつなりとでも、私の心は貴方のお傍に」>br<
「ティア……？」>br<

「何がよろしいですか？」>br<

にこりと笑んで再び尋ねた妻にケニスは僅かに肩を竦めながら微笑んで「温かい物を」と言う。>br<

ティアファナは頷いて部屋を出ると、なるべく足音を立てぬように急ぎ足で父の許へと向かった。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

ブレントは僅かに瞠目して苦笑し、デイーンは散々悪態をついては最後にこれ見よがしな溜息をつく。>br<

「ティア」>br<

「はい？」>br<

だらりと肘掛に腕を投げ出したデイーンにティアファナは侍女が持つて来たティーセットで支度をしながら首を傾げた。>br<

「お前の夫は馬鹿だ」>br<

「デイーン、身も蓋もない言い方をするな」>br<

「否定して下さい父様……」>br<

窘めたつもりのブレントが咳払いをするのにティアファナも息をついて首を振る。>br<

「そんな事を仰って。兄様も昔は——」>br<

「私の事はいいんだっ」>br<

「全くお前は誰に似たんだか」>br<

首を振ったブレントに思わずティアファナとデイーンの視線が飛んだ。>br<

そして再び咳き込もうとしたブレントが思い切り息を吸い込み過ぎて咽ると、ティアファナはティーポットにカバーを被せて父の背中を擦るべく歩み寄った。>br<

「またいつ記憶をなくすかわからないぞ。今からでも遅くない、家に戻って来なさいティア」>br<

「お断りします」>br<

取り付く島もない妹に兄が眉尻を下げたが、ティアファナはブレントが落ち着くまで背を擦ってからポットやカップを乗せたトレイを持ち上げる。 > b r <

「確かにまたいつ記憶がなくなってしまうかもしれない……それで、私はあの人の妻でいたいんです」 > b r <

兄を振り返りそう言っ て部屋を出たティアファナは、「誰に似たんだ」と言う兄の問いに「勿論ロレッタだ」と誇らしげに父が答えたのを耳にはしなかった。 > b r <

外に控えていた侍女達が慌ててティアファナに駆け寄りトレイを持とうとするのに首を振って、しかし後を付いて来た侍女が開けたドアの向こうにいるケニスの姿にほっとする。 > b r <

しかし兄や父に状況を説明しても、これから屋敷に戻ったらどうしたものかと半ば途方に暮れた。 > b r <

セバスチャンでさえ恐らくケニスの記憶喪失の件は知らなかっただろう、それにケニスが仕事先で言っているとも思えない。 > b r <話してしまった方がいいのか、しかし記憶喪失の事を話してしまつてケニスが気に病まないか——それが気になった。 > b r <

「ありがとう」 > b r <

ティアファナはゆつくりと呼吸をしてそつと歩み寄りポットからお茶を注いだカップをケニスに手渡す。 > b r <

それを口にしたケニスが僅かにでも眉を寄せやしないかと、ティアファナは横目で注意深く見守つた。 > b r <

そしてふと注がれている視線に気付き顔を上げれば微笑んでいるケニスがいる。 > b r <

「新しいドレスだね？」 > b r <

「母様の物を作り直して頂いたんです」 > b r <

横のチェストの上に目をやったティアファナの視線を追つてケニスは頷く、壁に掛けられている絵の中でティアファナの母であるロレッタが同じドレスで微笑んでいた。 > b r <

「よく似合う。君は母君にそっくりだ。昔からブレント殿もご自慢

の訳がわかるよ」>br<

「父が？」>br<

「そう、ブレント殿は今も愛妻家で有名な方だから。その愛娘を頂きに上がる事になった時には柄にもなくとても緊張した。仕事ではとても落ち着きのある方だが……妻の話となると腰を折ってばかりなのを見ていたからね」>br<

思わずその光景が目に見えて顔を覆いたなくなったティアフアナをケニスに笑う。>br<

そつと触れて来た大きな手をティアフアナも握り返した。>br<

「ブレント殿には少々申し訳ない事をした」>br<

そう言ったケニスに意味がわからずティアフアナが首を傾げる。

>br<

ケニスが申し訳ないと思う事など何もないと思うからだ、むしろ仕事の面においてはブレントへの協力すら惜しんでいない。>br
しかしケニスはそんなティアフアナの心を読んだように首を振る。

>br<

「やつと十代も半ばになった君を取り上げてしまった。勿論後悔はしていないが。しかし結婚してからというもの、君がこうして実家に帰った事はなかっただろう？配慮が足りなかった」>br<

「い、いいえ、私がそうしたかったです。ケニスには——」>br<

言い募ろうとした唇は伸びて来たケニスのもう片方の指に遮られた。>br<

「君の部屋を見ていて思ったんだ。きちんと今もこうして整えられている、何一つ埃を被る事無く」>br<

ケニスの言葉にティアフアナも頷いた。>br<

帰ると連絡をしてから整えられた訳ではなさそうな部屋は、ティアフアナが知らない新しいカーテンも掛けられている。>br<

先程も父にどれほど寂しい思いをさせていたかを悟ったばかりだ、娘のいない部屋を父がどんな思いで整えていたかを思うと胸が苦し

くなる。>br<

「明日、父様と庭で食事を取ると約束をしたんです。体が丈夫ではなかった母と父が昔そうしていたように」>br<

「それがいい。暇を取って旅行へ出るのもいいな。君も異国へ行った事はないんだろう？」>br<

「はい。ケニスは色々な国を知っていらっしやるんでしょうね」>br<

「どこもそれぞれに素晴らしいよ」>br<

カップを置いたケニスがティアファナを抱き上げて来るのに従って、体を預けその胸に頬をくっ付ける。>br<

どくんどくと聞こえて来る鼓動が何よりティアファナを安堵させた。>br<

「いつか、ブレント殿と一緒に行ってみよう。彼も色々をご存知だとは思うが、きっと君と一緒になら景色も全く違って見えるに違いない」>br<

「父と？」>br<

顔を上げたティアファナにケニスは頷く。>br<

ティアファナにとっては考えもしない事だった、幼い頃から深い愛情を注いでくれた父ではあるが仕事が忙しく接した時間は兄と比べれば格段に少ない。>br<

そして思い当たり、だからこそ父はそれを言い出せないのではないかと気付いた。>br<

思い返せばいつでも父の手紙にはティアファナを励ます言葉だけだった、顔を見せると催促をされた事は一度としてなかったのだ。>br<

「そうしたい、です……私、もつと父と……」>br<

込み上げて来た涙を堪えようと唇を少し噛んだ所為で言葉は声にならなかった。>br<

だがそれをすっかり聞き取ったのだらう、ケニスはティアファナの髪を撫で続ける。>br<

「ティア、君は俺の妻だが、彼の娘でもある。ずっとね」>br<
「……はい。あの、明日の食事は私が作る事にしたんです」>br<
「そうか。じゃあ支度をして、今日はもう君も休まない」と>br<
目を拭って頷いたティアファナは部屋を出て、すぐに歩み寄つて来たアナにその旨を伝え寝る支度をする事にした。>br<
衣装部屋から着替えを取って来たアナと共に浴室へと向かっている
と、ふとティアファナは気付いてアナに顔を向ける。>br<
「私は客室で寝た方がいいかしら」>br<
「何故です？」>br<

「旦那様は怪我をしているのだし、あのまま私の寝室をお使い頂いて――」>br<

「無駄手間ですね」>br<
服を抱えきつぱりと首を横に振ったアナにティアファナが首を傾げる。>br<

「どうせ旦那様はティアファナ様を追いかけて客室まで行ってしまわれるに決まっています。大変無駄手間です」>br<

「そんな事は……」>br<

ないとも言いきれない気がした、突如ティアファナはケニスがここまで追いかけて来てくれた事を思い出して赤面する。>br<

「よろしゅうございましたね、ティアファナ様」>br<

「アナ……ありがとう」>br<

につこりと笑ったアナにティアファナは再び涙を堪えて前を向いた。>br<

そう、追いかけて来てくれた、記憶がなくとも彼は自分を妻だと否定しなかった。>br<

それがとても嬉しい、自分のやって来た事を少しでも認めて貰えたようだった。>br<

「そうだわ、明日庭で食事をする事にしたので、皆で。朝支度をするから手伝って欲しいわ」>br<

「構いませんよ。………何ですって？」>br<

ティアフアナをぎよろりと見たアナに驚きながらももう一度言う。
> b r <

するとアナはあちこちに視線を彷徨わせた挙句、辿り着いた浴室の扉に凭れかかつて大きく溜息を吐き出した。 > b r <

「アナ？」 > b r <

「いいえ、ティアフアナ様、よろしゅうございます。このアナ、ティアフアナ様付きの侍女としまして、なすべき事をなす所存にございますとも！ええ、ええ、例え戦場であろうともアナがティアフアナ様をお守り致しますっ」 > b r <

ぐつと拳を握り締め深く頷いたアナに「戦場ではなく庭なのだけれど」とは言えないティアフアナだ。 > b r <

しかしその熱気に当てられるようにティアフアナも密かに頷く。 > b r <

少なくとも四人分の食事を用意するのは初めての事だ、今までは父や兄と夫や義母くらいのものだったのだから、多少勝手は違うだろう。 > b r <

朝早くから作り始めなければ間に合わないかも知れない、ティアフアナはその事に気付いて慌てて浴室に飛び込む羽目になった。 > b r <

結論から言えば客室は必要がなかった、それはアナの言った通りではなく客室に行くまでもなかったという事だが。 > b r <

ケニスの様子をもう一度見てから休もうとしたティアフアナをケニスがベッドに引き摺り込み、よく眠っていなかった事もあってあつという間にティアフアナが眠りに落ちてしまったからだ。 > b r <

夫の腕に抱かれて眠りに落ちる寸前、ティアフアナは安堵と共にとても不思議な思いを感じた。 > b r <

自分を抱き締めピツタリと寄り添うケニスの体がまるで自分の一部のように感じたのだ。 > b r <

心が近くになったように、何故かふとそう感じる。 > b r <

ティアフアナはそれがどうしてか考えようとはせず、ただ髪を梳い

て来るケニスの手の大きさに目を閉じた。 > b r <

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r <

翌朝はまさしく戦場だった、厨房に立ったティアフアナの許へケニスやブレントやディーンが入れ替わり立ち替わりやって来て、最終的には我慢し切れなくなったコックに追い出された。 > b r <

その甲斐もあつてか日が真上より傾いた頃には全て出来上がり、ティアフアナは並べた料理を前に満足げに頷く。 > b r <

「お嬢様、後は私共がやりますから」 > b r <

「そうです、ティアフアナ様、お着替えをつ」 > b r <

厨房前でうろろしていた料理が全く出来ないアナもここぞと半ば悲鳴を上げながらティアフアナを部屋へと引き摺って行く。 > b r <

彼女はどうにもティアフアナが汚れるのを極端に嫌っていた。 > b r <

「さあさあ、髪を解いて、支度をしなくては。このままでは旦那様達の髪も髭も伸び切つて床に付きますよ」 > b r <

口髭を生やしているブレントのものが一瞬にして伸び切ってしまったのを想像して思わずティアフアナは声を上げて笑った。 > b r < 「そう、そのお顔を見れば旦那様達も文句は仰らないでしょう。尤も、一言も口を利けなくなりそうですかね」 > b r <

意味のわからなかったティアフアナはそれに曖昧に頷いて支度を始めた。 > b r <

とてもふわふわとした気持ちで、このところ沈んでいた気持ちが一気に引き上げられて空を舞っているかのような気がする。 > b r <

ティアフアナは鏡の前でにっこりと笑った。 > b r <

ここへ帰つて来た事が間違いではなかった気がして、それがとても嬉しかった。 > b r <

> b r < > b r <

続編 2 - LAST

確かに視界ははつきりとしているにも関わらず、頭は息苦しい霧の中に浸されたようだ。 > b r <

何か酷い違和感を覚えてもそれが何かがわからない、今はただケニスにとってティアファナが腕の中にいるのが救いだっただ。 > b r <
ティアファナの態度からしても何かがおかしいとは感じるのだが確信には至っていない。 > b r <

そして考えようとすると頭の中に靄がかかる。 > b r <
小さく柔らかい体を息苦しくないよう抱き直すと、きゅつと背中に回された彼女の手が握られ、その確かさにケニスはふと息をついた。
> b r <

思い出せるのは先程ティアファナにも話した部分だけだ、しかしどうも釈然としない。 > b r <
幾ら義父や義兄がケニスに思うところがあるにせよ、運ばれて来た怪我人を追い返すような人物ではない事もわかつてはいるのだが。
> b r <

また痛みを覚えだした頭を抱える代わりにティアファナの細い髪に唇を寄せた。 > b r <
どこか自分が不安定な場所に立っていると感じて、甘い感触がそれを取り払ってくれる。 > b r <

ずっと心配を掛けてしまったのだろう、ベッドに引き摺り込むなりあつさり寝息を立て始めてしまった彼女の頬を撫でてでも起きる気配はない。 > b r <

ティアファナの髪をゆつくりと梳きながら、彼女のドレス姿を思い出した。 > b r <

彼女の母親であるロレッタとはケニスも面識はないが、勿論ブレントの愛妻として噂は聞き及んだ事がある。 > b r <

異国の貴族令嬢であったロレッタは療養に来ていたこの土地でブレ

ントと恋に落ち、周囲の言葉を物ともせず結婚したらしい。>br<
ティアファナが少々エキゾチックな雰囲気さえ漂わせるのはその母親によく似ている所為だ。>br<

ただ、と今は閉じたその瞳を覗き込み、ケニスは思う。>br<
ティアファナはロレッタのように病弱ではない、自由に外へ出る事も出来るしやろうと思えば何も出来る。>br<

彼女は恐ろしいほど器用で頭もいい、性格が素直なお蔭か何でも柔軟に吸収する。>br<

そう、その意思さえあればティアファナはきっと出来ない事はないだろう。>br<

それを認めるのが怖かったただけだ、いつでも腕に閉じ込めていなければいつ飛び立ってしまうかと恐ろしかったただけだ。>br<

今頃になって義父の気持ちがありありとわかる事にケニスは苦笑する。>br<

愛する者を失い、そして遣されたその結晶たる存在を周囲に隠しておきたかったのも道理だろう。>br<

事実ティアファナはあつという間に義父の許から去る事になってしまった、多分に皮肉にも彼が危惧していた通りの結果になってしまったという訳だ。>br<

彼女にも言ったようにそれを後悔する事はないが、如何にブレントがティアファナの帰りを待ち望んでいたかをこの部屋によって思い知らされ、そして気付かされた。>br<

もし己がその立場になったのなら、何度胸を引き裂かれても足りない思いがするだろう。>br<

しかし義父も義兄ですらもその立場をティアファナに訴える事はしなかった、ケニスの事はともかく常にティアファナを思っていた事がわかる。>br<

一体義父はどんな思いで妻のドレスを娘に託したのだろうか、それは考えてもわからなかったがただそこにある愛情は確かにケニスも感じた。>br<

今彼女が腕の中にいるのは何もお互いの愛情だけではない、今までティアファナを守り育て慈しんだ存在があつてこそなのだ。>br<だからこそティアファナはこうも自分の心の中でしっかりと輝いているのではないかと、そう思った。>br<

恐れているばかりで、果たして己が彼女に相応しい夫だと言えるだろうか。>br<

ティアファナは常にケニスに対し愛を示して来た、決して逃げ出すとはせずに傷付いても立ち向かつて来た闘士なのだ。>br<その愛と志を今更疑つてどうする、彼女は逃げない、この先もずっと。>br<

何故か今そう強く信じる事が出来た、自分にぴったりと寄り添うこの存在のお蔭で。>br<

だからこれからは、彼女を閉じ込めておくだけの事をしてはならない。>br<

例えどこへ飛んで行つたとしても、ティアファナはケニスの許へ必ず戻つて来る。>br<

様々なものを見て、様々な事を感じても、彼女の愛は決して揺るがない。>br<

きっと、自分がそうであるように。>br<

——そう感じる事が出来た。>br<

ケニスはそつとティアファナの額に唇を落とし自分も目を閉じる。>br<

心底よかつたと思つた、何故か得体の知れないものを見過ごしているような気分の今、ティアファナのこのぬくもりが現実を教えてくれる。>br<

彼女が望む事をどんな事でもしたい、ケニスは尚更に強く決意した。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

しかし考えるのとは行動するのでは大きな隔たりがある。>br<ケニスは伯母のメリッサが甘いものを断つと言いながら三日も続か

ない事を思い出し何とも言えない気分に陥った。 > b r <

朝からティアフアナが籠ってしまつた厨房の前で右往左往するしかない他二人の男を見て心底そう思う。 > b r <

いい加減腹に据えかねたコックが追い出さなければティアフアナ自身に邪魔にされていた事だろう。 > b r <

はあと息をついてケニスは落ち着かない様子のブレントに声をかける。 > b r <

「他で待ちませんか？我々がこうしてはティアフアナを急いでしまふ」 > b r <

「……ああ、そうだな。そうしよう」 > b r <

「なんで貴様まで一緒に……早く帰れっ」 > b r <

ぶつぶつと言うティーンを尻目にブレントと共に客間へ行くと、使用人がすぐにお茶の支度をして出て行く。 > b r <

大きなソファに向かい合つてゆつたりと座り、やがてケニスは静かにブレントに向かって頭を下げた。 > b r <

「なんだい？」 > b r <

「申し訳ありませんでした。今までティアフアナをこちらへ伺わせなかつた事、お詫び致します」 > b r <

ケニスがそう言つて顔を上げるとブレントは面白そうな顔をして目の前のティーカップに口をつける。 > b r <

そんな義父を見るのも初めての事だ、妻と娘の事は置くとしても仕事では常に表情を変えないブレントだったからだ。 > b r <

ティーンがまた口を挟もうとするのを制し、ブレントがやがて肩を竦める。 > b r <

「それで、詫びを入れるという事は、ティアフアナを返してでも頂けると？」 > b r <

「冗談を」 > b r <

思わず首を振つたケニスにブレントがまた珍しく声を上げて笑ふ。 > b r <

流石にティーンも見ない顔だったようで、ぎよつとした視線がブレ

ントに行った。>br<

「どんな心境の変化があつたのかは存じないがね、……私も君の気持ちには理解出来るつもりだよ」>br<

「お恥ずかしながら、こちらでも漸く思い至つたところです」>br<

「ああ、流石にご賢明だな。私が君の年ではなかなか」>br<

笑い続けたブレントはふと窓の方に目をやって、手にしていた力ツプを置いた。>br<

「私は娘を信じている、その娘が信じた君を信じている。親馬鹿と言われようともね。私にはそれが全てだ」>br<

もう一度ケニスは深く頭を下げた、気恥ずかしい思いを隠すようにして。>br<

これまで様々な事を経験して来たつもりだったが、やはりつもりになつていただけと言うより他はない。>br<

己の感情のままこれでもいいのだと彼女が拒まないからぶつけ続けられていたものの、こうして彼女を見守る形で愛する人を前にするとそれがどれだけ思慮のなかった事かがわかる。>br<

賢明などとは遠く及ばない。>br<

微笑んだブレントの顔を見て、ケニスもまたここへ来てよかったと思つた。>br<

それならば自分が無様に頭を打つた事にも意味があるのだらうと、そう思える事が出来る。>br<

昨夜涙を堪えたティアファナの顔を思い出し、そして今ブレントの微笑みによつて遅過ぎた選択ではない事を知つた。>br<

「よろしければ、いずれ休暇をとつて我々と旅行に出ませんか」>br<

「君達と?……しかし」>br<

言い淀んだケニスは頭を振る。>br<

「そうしたいのです。ティアファナも、私も。よろしければ、是非共に」>br<

少し間を置いたブレントはやがて顔を綻ばせて頷いた。>br<

それにケニスも密かにほつと息を吐き出し、ティアファナの笑顔が浮かんで頬を緩める。>br<

今まで表面上としてしか理解の出来なかった二人の親子の絆を感じ、ブレントの愛情がケニスにとっても有り難い事だと思えた。>br<兄の方はともかく、仕事で忙しくしていてもブレントの愛情は確かにティアファナに届いていたのだろう。>br<

だからこそ彼女はああも愛情深い、そして至らない夫に対しても辛抱強い。>br<

もつと扉を開いてやる事だと、ケニスは考える。>br<

確かに外には様々な危険も誘惑もある、だがそれを恐れて籠に閉じ込めておいてはやがて彼女の羽も痩せ衰えてしまっだろう。>br<そしていつか鳥籠を、その主を、疎ましく思うようになってしまふ。>br<

否、そうはならずとも、彼女の本来の自由な愛情を奪ってしまう事は確かだ。>br<

愛する者が唯一人しか存在する事はなくていい、沢山の愛するものの中で己を選んでくれる事にこそ意味がある。>br<

きつと思う以上に自分は欲が深く、贅沢者なのだとケニスは笑った。>br<

「それなら私も同行しよう」>br<

「デイン、見つとも無い真似をするな。本当に私はお前の事だけはロレッタにどう報告していいか」>br<

当然とばかりに胸を張ったデインにブレントが額を押さえ首を振る。>br<

ちらりと寄越したデインが視線にケニスは瞬時に同じ方向へと視線を逸らした。>br<

勿論ティアファナと多くの時間を過ごしたという義兄の愛情も疑うまでもないが、それはそれこれはこれだ、口煩いだけの小舅を同行させるつもりは更々ない。>br<

全く同情の余地もないが、彼はあまりにも理想に拘り過ぎるのだ

とケニスと思う。 > b r <

これだいて過去彼の結婚生活は悲惨なものではないとケニスも聞き及んでいたが、どうにもそれに耐えられる女性が稀なのも事実だ。

> b r <

麗しい美男であるディーンに優しく扱われて悪い気を持つ女性はいないだろう、しかしそれに助長しない女性もまた稀な事である、貴族であればあるほどに。 > b r <

以前ケニスも彼の妻達を見た事がある、だが何度見ても印象は同じだ。 > b r <

結婚当初に見た女性達は清楚と言ってもいい身形だったにも関わらず、それが幾許か過ぎるとすっかり様変わりしてまるで女王気取りだった者もいた。 > b r <

そして彼はその妻達にすっかり愛想を尽かすという訳だ。 > b r <
だからと言ってその理想たる女性像を己の妻に重ね合わせるのも甚だ迷惑な事で、男としてケニスも気持ちにはわからないでもないが自業自得だという気もする。 > b r <

そしてそんなディーンを見ると、やはり自分がどれほど幸運なのかも思い知るのだ。 > b r <

何度も何度も彼女の愛情を試そうと背を向けたあの時にすら、それがわかっていたというのに。 > b r <

「お待たせしました！」 > b r <

そう言つて飛び込んで来た彼女の姿にケニスはまさしく幸運の訪れを感じた。 > b r <

初めからそうだった、今以上に幼い姿をしていた時からケニスの心に彼女の姿が飛び込んで来て一気に全てを照らし出したのだ。 > b r <

当てのない闇の中だった自分の未来を照らし、そして今尚隣に寄り添い先を照らし続けてくれる。 > b r <

躓いても立ち止まっても、笑顔で手を差し出して。 > b r <

「行こう、ティア」 > b r <

立ち上がって歩み寄りケニスが差し出した腕にティアフアナは笑顔で頷き手を絡ませる。>br<

そう、どこへ行っても、彼女はこうして戻って来て自分の腕を取ってくれるのだ。>br<

――例えば、夫を心配して実家に戻っていても。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

美しく晴れた空の下、庭での食事は和やかに進んだ。>br<主に義兄とのちくちくとした嫌味の応酬を除けばではあるが。>br<r<

ただケニスにとっては「君達は実によく似たところがあるな」と笑ったブレントの一言が地味に疲労を増大させた。>br<

やがてティーンが秘書によって仕事に引き摺られて行くと間もなくブレントも屋敷の中に戻り、残されたケニスとティアフアナはただ言葉もなく庭の大きな木に凭れかかって空を見上げている。>br<「ティアフアナ」>br<

そう呼びかけるといつものようにティアフアナは短く返事をして顔をケニスに向ける。>br<

「心配を掛けてしまつてすまなかつた」>br<

「え……いえ、そのように謝られる事ありません」>br<

「そうやって俺を甘やかす事はないんだよ。一時でも愛する妻を忘れた夫なんて」>br<

びくりとティアフアナの肩が揺れ、見る見る内に彼女の大きな目が更に見開かれていく。>br<

その大きく丸い目が愛らしくてケニスは微笑みティアフアナの肩を引き寄せた。>br<

「いつ……?」>br<

「そうだな、……さつき君が部屋に飛び込んで来た時に。初めて会った時もそうだったね、君はそうして俺の許へ飛び込んで来た」>br<

衝撃がまだ収まらぬといった表情で、やがてティアフアナは頷く。

> b r <

二人が初めて出会った日もこの庭での事だった、パーティーから抜け出したケニスの許へと慌てた様子で飛び出して来たのがティアフアナだった。 > b r <

ケニスはその時の事を思い出して密かに微笑む。 > b r <

あの時の事は確かに幸運だった、あまり人との接触を許されていなかった彼女と初めて面識を持ったと言つていい日だったのだから。

> b r <

それまで時折姿を見掛けたただけだったというのに彼女の姿はいつまで経ってもケニスの脳裏からは消えてなくならず、そうして一方的に一目姿を見るに留まり続けた結果彼女の方が己の前に飛び出して来たのだから、幸運以外の何物でもない。 > b r <

そこで言葉を交わしたのはたった一言二言だけだったが、ケニスにはそれで充分だった。 > b r <

見る度に美しくなる彼女の声はどう変わったのだろうと、より一層彼女への思いが尽きなくなった。 > b r <

「あの時ははしたない真似をして……」 > b r <

気恥ずかしそうに俯いたティアフアナの顎に指を掛けて上を向かせると、ケニスはその朱色に染まり始めた頬へと唇を落とす。 > b r <

「一体どこの妖精が飛び出して来たのかと思つたんだ」 > b r <

「まあ」 > b r <

「本当だよ。あの時はそれ以前に君を見かけてからまた日が経っていたから、一瞬誰かわからなかった」 > b r <

あの時ほど女性の成長が早いものだと感じた事はない。 > b r <
そして父親の影に隠れていた人形そのものだった少女が確かに生きて動いているのだと、まるで夢のように思つた事も。 > b r <

「初めて君の目に俺が映つた。君の声を聴いた。もつと君が忘れられなくなった」 > b r <

「わ、私も素敵な方だと……思いました、またお会いしたいと」 >

b r <

「そう？君にダンスを申し込んだ日にはすっかり忘れられているのかと思ったよ」> b r <

首を振ったティアフアナを抱き締めて、最後に作った菓子匂いだろ？彼女に染み込んだ甘い香りを吸い込む。> b r <

「俺はずっと怖かったんだろ？、君がいつまたそうして俺の許を飛び出して行くのか？」> b r <

「私はそんな事しません？。……あ、でも、……それが必要な時はそうする勇気も大事なんだと思いました」> b r <

「俺にはそんな勇気もなかった」> b r <

ティアフアナの傍に己が不必要などと、今ですら想像するのも恐ろしい。> b r <

もうあの頃には戻りたいと思えない。> b r <

何の当てもなく、仕事で転々とあちこちを飛び回り女性から女性へと渡り歩いた、あの頃には。> b r <

知らなかったのだから無理もないが、今更幸福を手放すような危険は冒せない。> b r <

だが幸福を逃すまいとして縋り付き閉じ込めると、愛しみ寄り添うのは違う。> b r <

「ティアフアナ、君は俺の幸運だ」> b r <

「……幸運？」> b r <

頷いたケニスはティアフアナの両頬を手で包みその瞳を間近で見詰める。> b r <

「俺の光に包まれた未来に続く扉の鍵を、君が作り出してくれた。

そんな扉がある事さえも気付かずにいた俺に指し示してくれた。君が、俺の幸運そのものなんだ」> b r <

己の額をティアフアナのそれに擦り付け、長い睫毛に縁取られた艶やかな瞳を間近で覗き込む。> b r <

木陰から零れる日差しがその瞳に反射してきらきらと輝いて見えた。

> b r <

それはまるで今ケニスが言った通りの、未来の姿をしている。> b
r<

「私こそ、貴方は……ケニスは、私の幸運です。貴方に会わないでいたらと今思うと、少し怖いです。私はただ、父や兄が望むままの姿でいて、それが全ての幸せだと疑わなかったでしょう。そして私に向けられている真の愛情にも信頼にも気付けなかった」> b r<
ゆっくりと身を預けて来るティアフアナを抱き締めてケニスは頷く。> b r<

まだ歩き始めたばかりの自分達の道は長く長く先が続いている、そして今まで歩んで来た道も確かにあるのだ。> b r<

「ゆっくり行こう、先はまだまだ長いんだから。これからまた気付く事も山ほどある、お互いに」> b r<

「はい」> b r<

顔を上げて微笑んだティアフアナに微笑み返し、ケニスは口付けを降らせるべくそつと顔を近づける。> b r<

「ティアーツ!!」> b r<

「は、はいっ!」> b r<

突然二人の間を切り裂いた叫び声に対し、反射的にティアフアナが立ち上がった所為でケニスの唇は彼女のドレスに落ちる事になった。> b r<

「今ロレッタの部屋を掃除させていたらこれが出て来たんだ。お前にプレゼントするから、さあ、早く身に着けてみなさい」> b r<

駆け寄って来たブレントが笑顔で髪飾りを差し出すのにティアフアナも笑顔で頷いて屋敷の中へと入って行く。> b r<

「……ところでケニス殿、その体勢は苦しくないのかね?」> b
r<

前のめりになったケニスに首を傾げて言った義父に思わず前言を撤回したくなる言葉を必死で飲み込む。> b r<

本人は何と言うか想像がつくと言うものだが、どうもこの間の悪さは義兄に通じるところがあり、そして己にもそれが言える事を非常

に複雑に思うケニスだ。 > b r <

「お義父さん」 > b r <

ケニスの言葉に眉を上げてブレントが振り返る。 > b r <

「私も、ティアファナを信じています」 > b r <

はつきりと言ったその声にブレントは何も言わず、ただ微笑んで頷く。 > b r <

そして立ち上がったケニスと屋敷へ戻る道すがらゆつくりと口を開いた。 > b r <

「勿論だとも、我が娘に疑わしき事など何一つないのだからね。ティアはすぐに顔に出る、何かあれば一度でわかるんだよ」 > b r <

「……はい」 > b r <

何とも穏やかな口調であるが、再びぐさりと釘を刺された事をケニスは素早く感じ取った。 > b r <

つまり、「約束」はまだ生きているという事だ。 > b r <

溜息をつくように肯いたケニスをブレントがくつくつと笑う。 > b r <

「何、心配をせずとも時はすぐに過ぎてしまうものだからね。そう

とも、娘が嫁いでしまうのも、あつという間だ」 > b r <

「……私の娘はまだ産まれてもいませんが……」 > b r <

「そう言っていられるのも今の内という事だ。然るべき日には是非酒を飲もうじゃないか、ケニス殿」 > b r <

必死の抵抗は義父の前に華々しく散る。 > b r <

全く仕事においても己が優位に立った事のないこの男に対しては、妻とは違った意味で勝てる気がしなかった。 > b r <

「それもまた、いいかもしれませんね」 > b r <

先にはまだまだ様々な事が待ち受けているだろう、だからこそ今のこの一瞬を逃してはいられない。 > b r <

例え時には離れても、常に心が繋がっている。 > b r <

だからきつと彼女の全てを逃がす事はない、そしてまた彼女も逃げる事はない。 > b r <

いつもずっと、我が傍にいて。 > b r <

「如何ですか？」 > b r <

髪飾りをつけてはにかみながらやって来たティアフアナをケニスは高く抱き上げて笑った。 > b r <

> b r < > b r <

番外編 1 - 1 夫の数奇なる一週間（前書き）

こめです。

番外編 1 - 1 夫の数奇なる一週間

「有り得ない」と何度もそう自答したが、またすぐに「そうだろうか？」と自問する羽目に陥った。 > b r <

何度も何度も浮かんでは打ち消しを繰り返し、神経が磨り減り尖るところか無くなる気さえする。 > b r <

しかし結局は「有り得ない」と希望的推測で自問を押しやって精神を保つのがやっとだ。 > b r <

—— ティアファナが冷たくなった。 > b r <

我ながら恐ろしい事に起こった事実を言葉にすればこの一語に尽きる。 > b r <

しかし事態は恐怖をも凌駕する深刻な問題だ、これを笑う者は真に愛する者を知らないからだと声を大にして言いたい。 > b r <

とにかく、大問題だ。 > b r <

少しばかり冷静なつもりで振り返ってみても、あまりこれといった事は思い浮かばない。 > b r <

数日前少し口論になったが、それとて半日ももたなかったくらいだ。 > b r <

大体ティアファナが数日前のそれを持ち出して今更八つ当たりをするとも思えない。 > b r <

故に原因が全く思い当たらず、自問自答を繰り返す羽目になる。 > b r <

もしティアファナが自分に嫌気を差していたら、と考えて。 > b r <

…… 違う、有り得ない、そんな事はないし、認めないし、ティアファナを侮辱する事になる。 > b r <

万が一、もし万が一にでもそうなったのなら、俺はこうして悶々と一人神経を磨り減らしている暇もないだろう。 > b r <

何せ彼女は心でこうと決めたらとことん向き合う性質だ、言いたい事も言わずに俺を無視するなんて行動には出ない。 > b r <

だとすれば考えられる原因も絞れるかとも思うが、やはり全く思い当たらなかった。>br<

聞いてみようにも声をかければすぐさまつんとそっぽを向かれてしまふ始末で取り付く島もない。>br<

そうして朝から侍女と買い物に出かけてしまった彼女の後姿を呆然とするしかないまま見送って、俺は今上の空で仕事場にいる。>br<

さつきから周囲で虫が飛んでいるような音が聞こえるが、今はそれどころじゃない。>br<

「ケーニース！……お前生きてるかあ？」>br<

「ああもう煩い、考え事をしているんだ、放っておいてくれ」>br<

「仕事に出て来て放っておけないだろう……。お前やつぱり前の一件で頭の打ち所が悪かったんじゃないか？」>br<

全く煩い虫だ、こんな時に仕事になんて来るんじゃないか。>br<

解けもしない思考がまたこんがらがるじゃないか。>br<

「それとも何か、お前がこの疑問に答えてでもくれると言うのか！」>br<

「わあ！なんなんだお前はっ。……なんだよ、疑問って。何か深刻な悩——」>br<

「妻の事だ」>br<

「ああ、そうだろうと思いましたがよ」>br<

なんだその投げやりな口調は、こっちは俺の人生がかかっている大問題なんだぞ。>br<

「今度は一体何をやらかしたんだ。結婚してからこっち、随分喜怒哀楽が激しくなったな」>br<

「独身者が知ったような口を利くな」>br<

「あーそーですか」>br<

「……妻が冷たくなっただ」>br<

自らの口から出すのも恐ろしい事実には戦慄していると、アンディが目元を片手で覆う。 > b r <

失礼な奴だ、だから独身者にはわからない問題だと言った。 > b r <

これがどれだけ重大な事実かわかっていたのなら、今頃アンディも女の尻を追いかけるような虚しい真似は止めているだろう。 > b r < 哀れとしか言いようがないな。 > b r <

「お前が何かしたんだろ、どうせ」 > b r <

「それが思い当たらないから悩んでいるんだ」 > b r <

「女性つてのは男の俺達にはわからない事で心の天気が変わるものさ。お前こそよく知ってるだろうに」 > b r <

「ティアファナはそんな女性じゃない」 > b r <

どこかの国の天気のようにこころ変わられていたのなら、俺はとつくにまたアンディと同じ独身者に戻らされているだろう。 > b r <

全くとんでもない。 > b r <

「そうは言うが、お前の奥方は特に繊細そうだからな。思ってもみない些細な出来事に心が引つ掛かる事もあるだろう」 > b r <

確かに……そう言われればそうとしか言いようがない気もして来る。 > b r <

そうだ、ティアファナは俺が思ってもみない事までよく気がつくし、感じ得たりもする。 > b r <

じゃあ何か、俺はティアファナがあんな風になるような事をしでかしておいて、思い当たりもしない愚鈍な夫だと言うのか。 > b r <

——すっかり反論出来ないところが痛い、しかし本当に昨夜まではいつも通りだったのに何故。 > b r <

「眠ってから起きるまでの数時間……眠っている間に何か……」 > b r <

「昨夜までは普通だったのか？」 > b r <

「ああ、昨夜もいつも通り話をして寝た。眠るまでは笑ってさえい

たんだ、ところが起きてからが……」>br<

もう口に出したくはない。>br<

いつもなら起きて一番にするキスどころか抱擁もなく、一人で寝室を出てしまっていた彼女は一人先に朝食を食べていて、声をかけたら――……ああ恐ろしい。>br<

普段豊かな表情を浮かべていないとまるでティアフアナは人形そのもののようで、それがまた硬質さに輪をかける。>br<

あの瞳に俺が映らないなど、一日が始まった気がしない。>br
よって今の俺はまだ朝すら迎えていない事になる、仕事どころじゃない。>br<

「いやまあ、とりあえずお前、ここを出て下の店にでも行こう。さつきからお前が唸っている所為で他の手も止まってるからな」>br<

アンディの言葉に顔を上げれば、即座に周囲の人間の視線が他所へと逸らされた。>br<

まあいいだろう、今日はもう仕事をするような気分じゃない。>br<

むしろ明日を迎えられるかどうかの瀬戸際だ、……なんて恐ろしい。>br<

伴って来るアンディと部屋を出て外の適当な店へ入ると、見覚えのある店主が人の顔を見るなり奥の部屋へと促して来る。>br
この際有り難いが、人を悪魔が来たような顔で見るのは失礼に当たるというものじゃないか？>br<

「で、本当に心当たりがない訳か？」>br<

「全く」>br<

我ながら目に届く範囲のティアフアナの行動は逐一憶えている。

>br
昨夜とて眠る前には何度もキスをした、それから何度も愛の言葉を交わして……。>br<

「おいおい、現実逃避をするな。……そして舌打ちをするな」>b

r<

煩い男だ、そんな事だから女性が逃げるんだ。>br<

「お前今失礼な事思っただろ」>br<

「当然の真実を思い浮かべたまでだ。しかし本当に思い当たらない……俺の目も見ないし、話を聞いてもくれない」>br<

「……今心底お前の奥方が偉大だなあと感じたよ。女渡りのケニス
がそんな風になるとはなあ」>br<

「ティアファナを失ったならあの何の楽しみもない人生に戻るんだぞ
！」>br<

ぞつとして身を震わせると、また失礼な事にアンディが肩を竦め
て緩く首を振る。>br<

「お前、ああいうのが楽しみだったろ」>br<

「一時のものだ、過ぎれば何も残らない」>br<

そう、顔を合わせなくともこうして表情の一つ一つを思い浮かべ
る事もなかった。>br<

今彼女がどう過ごしているか、それを思うだけで心が満たされるよ
うな事もない。>br<

ただお互いに通り雨のようなそれを共にする、それだけだ。>br<
あの生活に戻れと言われたのなら、いつそ俺は何もかもをなくした
のと同じになる。>br<

それだけ、ティアファナが俺の生活に浸透している。>br<

ウェイターがやはり人の顔を窺いながらおずおずと飲み物を持
つて来て脱兎の如く引き返して行く様に思わず指がテーブルを何度
も弾いた。>br<

どうもイライラとしてしまう、尤も苛付きを感じるのは問題点がわ
からない自分自身に対してだ。>br<

「とりあえず、話を聞いてくれるまではご機嫌窺いに徹したらどう
だ。何か彼女を喜ばせるような事をして心を解すんだよ、そうすれ
ば耳も傾けてくれるさ。彼女は言っただけでわからないような人でもなさ
そうだしな」>br<

「俺の妻をわかった風に言うな」>br<

「面倒臭いなお前」>br<

「ふむ、だがいい案だ。ティアが喜ぶものか……」>br<

彼女と心を通じ合わせて以来様々な贈り物をした結果、彼女が一番喜ぶのは植物の種か苗だ。>br<

だがそれも先月始めに季節に合わせて贈ってしまった手前、また同じものではワンパターンだろう。>br<

勿論ティアファナは同じ物を貰ったところで嫌な顔をする訳もないが、今回はそれでは駄目な気がする。>br<

今の現状を思えば、何かもう今まで以上にない贈り物であつと言わせて喜ばせる事が出来なければ駄目だ。>br<

しかし今までの生活が生活だったのか、彼女にはある意味困った事にあまり物欲がない。>br<

古いドレスも侍女と共に自分で手を入れて新しく直してしまうとか、そうして物持ちもいい。>br<

宝石や香水にはあまり興味はないようだし、刺繍道具も先日から義父が山と送って来るのでこれ以上贈られてもティアファナは困ってしまうだろう。>br<

本も彼女自身が気に入ったものを直感で選んで来る為、ジャンルにも一貫性はない。>br<

食べ物はどちらか言えば彼女は自分で作る方を好む。>br<

……………。

>br<

「アンディ、俺は今自分の引き出しのなさに失望した」>br<

「ああ、それはある意味お前の奥方が難しい人だという事だな」>br<

どこか腑に落ちない点もあるが肯くより他ないだろう、ティアファナにはこれさえあればという物があまりない。>br<

庭弄りやピアノや刺繍も言ってみれば趣味の一部に過ぎず、それがなければいけないという事はないのだ。>br<

趣味は趣味としてあくまで臨機応変に楽しむ程度で、ティアファナ

の生活の中心は驕りでも何でもなく、俺自身だろうと思う。 > b r <
「そうだ、どこかに出かけるのはどうだろう」 > b r <

「目も合わせてくれないのか」 > b r <

まさに他人事と言った顔でお茶を啜ってから言ったこの同僚には
軽く殺意を覚えた。 > b r <

しかしその通りだ、目も合わせてくれない話も聞いてくれない……
そんな状況でデートに誘ったところで頷いてくれるとは到底思えない。
> b r <

デートに誘った挙句無視されたら、俺は一体どうなってしまうんだ
ろう。 > b r <

そう思っただけで思考が止まり白濁した。 > b r <

「しかし本当に何もなかったのか？」 > b r <

「少し前に少々口論になっただけだ。それも半日もたなかったし、
妻はそんな事をいつまでも引き摺るような人じゃない」 > b r <
「なんだ、ネタは上がってるんじゃないか。それで、何の口論をし
たんだよ？」 > b r <

勝手に注文をしたサンドイッチを口にしながら椅子に凭れてすっ
かりリラックスしているのが腹立たしい。 > b r <

だがしかし俺自身がわからない以上、第三者なら見えて来る事もある
かもしれない。 > b r <

これもティアファナの為、そして俺自身の明るい未来の為だ。 > b
r <

この男の仕事を山の如く増やしてやるのは後でいい。 > b r <

「いや本当に些細な事だったんだぞ？」 > b r <

「だから、男にとって些細でも、女にとって大問題なんて事は山の
ようにあるんだよ。その逆も然りだ。全く、本当にお前は結婚して
から鈍くなったもんだな。はっはっはっ」 > b r <

……いずれ書類の山に押し潰されるといい。 > b r <

「その、つまりだな、最初の子供は男がいいか女がいいかという事
で、少々——待て」 > b r <

いつの間にか平らげたサンドイッチの皿を置いて部屋を出て行くとするアンディの靴紐を踏むと、前のめりになった奴は派手な音を立ててソファの背凭れに鼻をぶつけたようだった。> b r <

「いつてえ！何すんだお前！」> b r <

「お前こそ話の途中で席を立つとは何事だ」> b r <

「ここに來た事を心底後悔してるよ。……畜生、なんでこう貧乏くじばかり……」> b r <

ぶつぶつと言うアンディがソファに座り直したのを確認してから、俺は溜息と共に当時の事を思い出しながら話し出す。> b r <

今思い返しても些細だと言うより他はない。> b r <

あの時お互いの意見は反発したものの、すぐにどちらでもいいという結論に達して笑い合った。> b r <

どちらにしても俺達が我が子に対する愛情は変わりがないし、それに最初の子にはすぐ弟か妹が出来る事も考えられる。> b r <

まあ卵から孵っていない雛を数えるのは愚行というものだしな。

> b r <

そう、そもそも卵すら生まれていない。> b r <

今すぐにでもそうしたいのは山々だが、それには彼女だけでなく夫の俺にも準備はある。> b r <

少なくとも、妻の心も理解出来ないような夫は、父親として胸を張れないという事だ。> b r <

「その事ではお互い、どちらでもいいという結論に達したんだ。自分達がどんなに仕方がない話をしていたかに笑いもした」> b r <

「まあそうだなあ、子供だけは生まれてみない事には今からどちらだとか言っても仕方がないだろう」> b r <

それはそれに頷いてあの時のティアファナの笑顔を思い浮かべる。> b r <

あの時俺が決意したように、彼女もまた近い将来母親になるという現実を考え出したようだった。> b r <

彼女がいい母親になるというのは俺にとって疑いようもない事だ、

しかし実際子供を産むのは女性なので男の俺にはわからない様々な不安もあるだろう。>br<

そんな事も理解し包んでやりたいと思うのに現実はこのさまた。

>br<

手を拱いているだけの父親など、いずれ生まれて来るわが子に見せる訳にはいかない。>br<

もしティアフアナそっくりの女の子に「ママはどうしてパパみたいな人と結婚したの？他にいい人がいなかったの？」などと問われた日には……………。>br<

「急に顔真つ青にしてどうしたんだ。お前情緒不安定過ぎるぞ」>br<

「そんな事は駄目だ！！」>br<

「わあ！」>br<

自分で叩いたテーブルと共に音を立てた目の前のソファを見れば、その脇に転がっているアンディの姿が見える。>br<

「そんな所で遊んでいる場合じゃないんだ、アンディ」>br<

「おーおー、全くその通りだな。…………ああ、そうだ、ケニス。もう少し遊び心を持ったらどうだ」>br<

「と言うと？」>br<

腰を擦りながらソファに座り直したアンディがそのままずるずると深く凭れながら足を投げ出す。>br<

「最初から奥方の好きな物を贈るんじゃないでな、こちらから好きにさせるという事だ」>br<

ふむ、発想の逆転と言うやつだな。>br<

しかし一体どんなプレゼンテーションをしたらティアフアナが興味を持つてくれるだろう？>br<

素直な性格からか大抵の事には好意的に受け止めてしまう彼女だ、だがやはりそれだけではいつもと同じになってしまっただけ意味がない。>br<

勿論ティアフアナが些細にも喜んでくれればいいが、今回はこうあ

つと言わせるだけでなく全身で喜びを体現してくれ飛び付いて来て
「ケニス愛しています！」と言う言葉を是非とも勝ち取らなければ
ならない。>br<

いや、はにかみながらそう言われるのも吝かではないな。>br<
難しい、だが何故か非常に難しい気がする。>br<

しかしそれなくしては俺の未来も閉ざされてしまう、この先までデ
イアフアナに無視を決め込まれては食事も喉を通らなければ夜も眠
れない。>br<

「何か思い付いたか？」>br<

「いや、俺は心底彼女を愛しているのだと再確認した」>br<

「神妙な顔で考え込んだと思えば今度はそれが。お前が奥方に骨ま
で溶けているのは皆よくわかつているさ」>br<

「それが真実なのだから、当然だな」>br<

「……奥方は本当に変な趣味をしていると思う」>br<

「ティアフアナを侮辱する気が貴様！」>br<

「わかったわかった面倒臭いなわかったって！もう仕事をする気が
ないならあちこちの店を回って決めたらどうだ？ただ、今までと同
じような物は避けるよ」>br<

疲れたような顔をしたアンディに頷き、俺はさつさと店に向かう
事にした。>br<

背を向けた部屋からはアンディの長い溜息が聞こえて来たが、恐ら
く気の所為だろう。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

久しぶりに店が立ち並ぶ街に立ち、戦いを挑むかのような心持で
胸の前で腕を組む。>br<

ここは女の戦場とばかり思っていたものだが、全くティアフアナと
結婚してからは全ての価値観が覆される。>br<

「おや、坊ちゃんじゃないですか」>br<

「……ああ、久しいな、ジョニー」>br<

振り返った先でジョニーがにこりと目元に深い皺を寄せながら微

笑んだ。>br<

彼に会うのは本当に久しぶりだ、俺が十代の頃まではよく彼の店で服を仕立てて貰ったものだ。>br<

特に彼は珍しい骨董品のマニアで、よく奥にある彼の部屋を訪ねてそれらを見せて貰っていた。>br<

そして彼は周囲にいるような気難しい老人ではなく、彼が服を仕立てる仕業そのもののように人の心を感じ取れる人だ。>br<

「難しい顔をして、何かお悩みですね？」>br<

「少し……時間を貰えないだろうか？」>br<

「ようございますよ」>br<

相変わらず見る者の心を和ませるような笑みを浮かべた彼に俺は少しほっとして、ジョニーを連れ立って彼の店へ行く事にした。>br<

久しぶりに来たというのに店の形をすっかり覚えているような氣になつて懐かしさを覚えた。>br<
そして記憶とちつとも変わらない店に俺は何かの希望を見出す。>br<

幼い頃はここで様々な骨董品を見て目を輝かせたものだ。>br<
奇妙な形の発明品、不思議な絵画、謎めいた言葉の本、とにかく全てが俺の好奇心を煽った。>br<

彼の所有する物の中にならティアファナが驚くほど氣に入る物が見付かるかもしれない。>br<

「坊ちゃん、こちらへどうぞ」>br<

「ジョニー、もう坊ちゃんは止めてくれ。俺も少し前に……結婚したんだ」>br<

幼い頃の悪戯を知る祖父に報告するような気持ちで言つた俺にジョニーはすぐ温かく微笑む。>br<

「おめでとうございます」>br<

「ありがとう」>br<

彼にこんな事を報告出来る日が来るとは思わなかった。>br<

会わなくなつて、時折彼を思い出す度にそう考えていた。 > b r <
俺はきつとどこかで彼に申し訳ないような、後ろめたいような気が
していたのだと思う。 > b r <

早くに妻を亡くしずつと独り身で、他人の幸せそうな家庭を見なが
ら服を仕立てる彼に対して、とても。 > b r <

「今度俺の妻を紹介する。その、とても可愛い人なんだ」 > b r <
「そうですか……そうですか、楽しみにしていますよ」 > b r <

目を細めて何度も頷いたジョニーに俺も頷き、使用人が運んで来
たカップが目の前に置かれると俺はそれから顔を上げて彼を見る。

> b r <

「実は、頼みがある。昔見せて貰ったあれを、また見せて貰えない
か？」 > b r <

「ですがね……」 > b r <

「頼む、貴方が売らないのはわかつている。それでも、どうしても、
たった一つを見付けたいんだ。彼女を、喜ばせたいんだ」 > b r <
ぐつと握った拳を膝に置き、俺は勢いよく頭を下げた。 > b r <

彼の所有する骨董品はどれも彼の奥方との思い出が詰まった物だと
聞いている。 > b r <

けれどそれを承知で、俺は頼むしかなかった。 > b r <

昔と同じ古びたままのこの店を見て確信したんだ、必ず何かはここ
にあると。 > b r <

そしてきつとその先に彼女の笑顔があるんじゃないかと。 > b r <

> b r < > b r <

番外編 1 - 2

渋るジョニーが徐々にその表情を変化させていくのを固唾を呑んで見守る。 > b r <

そしてどれくらい互いにそうしていたのか、ジョニーが僅かに息を吐き出した。 > b r <

「わかりました。但し、とにかく、一旦お見せするだけですよ？」 > b r <

「ありがとう！感謝するよ、ジョニー」 > b r <

「坊ちゃんの奥様がお気に召すような物であればいいんですがね」 > b r <

そう言い残して奥へ消えたジョニーに大概察せられてしまったと羞恥を禁じ得ない。 > b r <

どこかそわそわと落ち着かなくなつて、俺はカップに無意味に手を伸ばした後立ち上がつて脇にあつた本棚に手をかけた。 > b r <

一冊の本を引き出すとここの様々な布地の独特な匂いが本にも染み込んでいるのかふわりと漂う。 > b r <

ページを捲り文字を目で追うだけで、冷静さを取り戻そうとしている自分がどこか滑稽だった。 > b r <

本を棚に戻そうと顔を上げると、本棚のすぐ横にある小さな窓が目に入る。 > b r <

行き交う馬車や人々の波に思わず見入った。 > b r <

これだけこの狭い世界にさえ人が溢れているというのに、その中からティアファナを見付け出せた事が今更ながらとても低い確率のよくな気がする。 > b r <

けれどどれだけの人込みの中であろうと今や俺の唯一はあっさり見つけられる確信もあつた。 > b r <

そう、ほら、すぐに見付けられる。 > b r <

淡いグリーンのドレスを着たティアファナ、今朝とは違う装いだが

とてもよく似合っている。>br<

それに揃いの帽子の下で微笑むその花のような笑顔ときたら……、隣の男とて瞬きも出来ない可憐さだ。>br<

周囲が色褪せてしまうほど彼女自身がああも輝いて……ん？>br<

「ティアファナ!?」>br<

咄嗟に振り上げた拳が窓枠に当たりガラスがビシツという音を立てたがそんなものはもう耳には届かなかった。>br<

拳を突き放すようにしてその場から駆け出し、店の外に飛び出して周囲を見渡す。>br<

一つ馬車が通りを横切って行くと、すぐにあのグリーンのドレスの後姿が目に見え込んで来た。>br<

石畳に蹴躓きそうになり押し退けた人々から文句を浴びせられながらも真っ直ぐに走る。>br<

「ティア!——ティアファナッ!」>br<

恥も外聞もなく喉が裂けるかという勢いで叫ぶと、ティアファナはやつと足を止め帽子に手をかけてつばを上げると辺りを見回す。

>br<

そしてティアファナがこちらを向いた瞬間に俺も漸く足を止めた。

>br<

こんな風に走ったのは一体いつぶりだと一瞬思うも、俺を認めたティアファナがその大きな瞳を瞬かせ隣の男を窺うように見上げたのに、全てが吹き飛んでかつと一気に頭に血が上った。>br<

素早く視線をその男へとやれば、さっきは気付かなかったが知った顔だった。>br<

きつとこんな事態になると俺が想定していたなら、俺が一番見たくなかった顔だろう。>br<

「ロビン!!ワット!!ガイラー……!」>br<

噛み潰すようにその名を告げると、ガイラーは僅かに片眉を上げたり表情を隠し、さつと社交場で俺も見覚えのある顔に切り替え

た。 > b r <

恐らくそれも俺が読み取ると思つての事だろう、「社交界の若き花形」「誠実の貴公子」と呼ばれる俺とは正反対のこの男は案外食わせ者かもしれない。 > b r <

「お久しぶりです、バークレー殿。いつ以来でしょうか」 > b r <

「そんな事はいい。私の妻と一体ここで何をしている？」 > b r <

そして再び、今度はゆつくりと片眉を上げたガイラーは見せ付けるように微笑んだ。 > b r <

「今日は姉が体調を崩してしまったので、私が姉の代理です。ティア……ミセス・バークレーが探しの物があるとかで、私がご案内を」 > b r <

「ケニス、私がお願いをしたのです」 > b r <

宥めようと言つたつもりだろうティアファナの言葉にでさえただ火を点けられただけだった。 > b r <

ティアファナが彼の姉と交流を持っていた事は知っている、そして先日には彼女から手紙が来ていた事も。 > b r <

ただティアファナの隣にこの男が並んでいる事が気に入らないだけだともわかつている、けれど止まらない。 > b r <

道行く人々の好奇心の視線を跳ね返すように俺はガイラーを睨み付けた。 > b r <

「供も連れずティアファナを？」 > b r <

「いえ——」 > b r <

「ケニス、それも私がお願いをしたのです。アナには近くで待つていて貰つています」 > b r <

彼女は説明をしているだけだ、それなのにどうしてこの男を庇うような言葉に聞こえるんだろう？ > b r <

つい昨日まで俺には微笑みしか向けられていなかったはずの顔が、まるで結婚当初の俺のように冷たくさえ見えた。 > b r <

——ああ、俺が仕出かした悪夢を、今度は俺自身が見ているのか？ > b r <

「ケニスッ!?」>br<

絹を裂くようなティアフアナの悲鳴も、まるで悪夢の証拠だと言われている気分だった。>br<

ざわついた周囲の声が聞こえなくなっていく、射抜くような俺の目を観察するようなガイラーの目が不快だ。>br<

ガイラーの胸倉を掴み上げた俺の拳を引き剥がすようにティアフアナが俺の腕にしがみつく。>br<

けれど駄目だ、そんな生易しい力じゃ、到底この拳は収まりがつかない。>br<

「ケニス、止めて下さい!」>br<

どうして俺は始終こんな事ばかり繰り返しているんだろうと、状況にも関わらず自嘲したくなる。>br<

可愛いティアフアナにこんな泣きそうな声を出させて、……やはり俺はちつとも変わっていないのかもしれない。>br<

「俺の妻を一人で連れ出したいのなら、俺の申し出を受ける事だ」>br<

「何の申し出を?」>br<

「け——」>br<

決闘だ、——しかしそう言う前に俺の空いた片腕の隙間から滑り込んで来たティアフアナに強く胸を突き返される。>br<

咄嗟に手を離しよるめいた俺に、その宝石のように綺麗な瞳が射抜くようにして俺も見上げた。>br<

怒ったティアフアナを見たのは初めてだと、やはり回らない頭で俺は考えた。>br<

「いいですか、ケニス。これ以上ガイラー様に無礼はさせません。オーレリア様がわざわざお店に口を利いて下さったのです、それに場所がわかり辛いからとガイラー様に案内までさせてしまって。お礼を申し上げるべきなのですよ」>br<

声はそう大きくないというにも関わらず、彼女の声はいつもの柔らかさを微塵も感じさせないほど凜としていた。>br<

俺が二の句を継げずにいるとティアファナはガイラーを振り返って頭を下げる。> b r <

「大変申し訳ありません。夫がご無礼を——」> b r <

「構いませんよ。奥方がよく知りもしない男を街を歩いていて動揺なさったのでしょうか。少々驚いただけです、……私の知るバークレー殿とはすっかり別人のようでしたので」> b r <

俺を一瞥し彼女に向かって微笑んだガイラーに俺は奥歯を噛み締めた。> b r <

何が誠実の貴公子だ！> b r <

「とにかく、そういう訳ですから。これから買い物に行つて参ります。セバスチャンに言付けを頼んでおいたのですが……どうやらお聞きにならなかったようです」> b r <

ふと息をついて緩く首を振る彼女に、そういえば今朝セバスチャンが何やら言っていた気もする、だがちつとも耳に入っていなかった事を思い出した。> b r <

「それでは行つて参ります。参りましょう、ガイラー様」> b r <
「ええ。バークレー殿、貴方も知つての通り私は護身術には多少の心得がありますから、道中はお任せ下さい。……それでは」> b r <

振り返りもせずすと背筋と延ばしたティアファナとそのお隣に寄り添うガイラーがこの場から立ち去るのを、俺は何も言えないままで見送った。> b r <

一体何を言えるというのか、言えたとして同じ言葉しか出て来ない。> b r <

ティアファナがガイラーとどうにかなるとは思わない、彼女はそんな風に誰かを、自分を軽く扱ったりはしない。> b r <

それでも俺に対してはどうだろうか。> b r <
こんな場所で理不尽な理屈を述べ、怒りに身を任せた夫に対しては？> b r <

突き刺さる人々の視線をもつ鬱陶しいとも思わず、俺はまるで弛

んだ布地の上を歩いているような覺束無さのままジョニーの店に戻る。> b r <

そして再び椅子に座るとジョニーが目を丸くしているのも構わずに深く項垂れた。> b r <

こんな事を仕出かして、ティアファナを喜ばせる以前の問題じゃないか。> b r <

「一体どうなさったんです？」> b r <

「俺は、……俺は、どうしたら妻に相応しい男になれるだろう」> b r <

父にも洩らした事のない、幼い時には彼にだけたつた一度同じような弱音を吐いた。> b r <

あの頃は貴族でない自分に酷く劣等感を抱いていた、周囲にいた子供の殆どが貴族だったのから仕方もない。> b r <

そして今と同じように彼に打ち明けた。> b r <

その時ジョニーに諭された、俺は貴族でも商人の息子でもなく、「俺」でしかあり得ないのだと。> b r <

俺はジョニーが口を開く前に顔を上げ自嘲した。> b r <

「全く、俺はいつまで経っても成長がないな。結婚までしたつていうのに」> b r <

彼はすつと白い口髭を撫で、濃い新緑を思わせる瞳を優しくに細める。> b r <

ああ、いつかの彼もこうだった。> b r <

「とても、愛されておいでなのですね」> b r <

感慨深げに言われた言葉に俺もただ頷いた。> b r <

「嘗て、私の妻が申した事によりますと、人は代わり映えのない事には耐えられないもののだそうです」> b r <

それは何かの本で見た事がある、同じ物を見続けているとそれが何かを正しく認識出来なくなるらしい。> b r <

多分彼の奥方が言っていた事と似ているだろう。> b r <

「人との関係も同じ事だと、私は思うのですよ。何も変わらない心

では、いつか妻を妻とも認識しなくなる」>br<

そう言ってジョニーは目の前に置いていた小さな小箱をそちら側に向け、更に小さな真鍮製の鍵を使って開けた。>br<

そして蓋を開いたままこちら側に向け直し、俺は促されるままその中を覗き込む。>br<

中には特に変哲もなさそうなブローチや髪飾りにリボン、果ては小石までが入っていた。>br<

「これは？」>br<

「私が妻に贈った物です」>br<

「小石を？」>br<

何度見てもその辺の道端に転がっていそうな小石だった、到底磨けば宝石が出て来そうな原石ではないだろう。>br<

しかし訝しげな俺に対し、ジョニーは少し誇らしげにして頷く。>br<

「私は……そう、実は私もね、若い頃は以前の坊ちゃんのようにだったんですよ。いや比べるのもおこがましい。お恥ずかしながら、親にも見限られるような放蕩者だった」>br<

今の彼からは想像も出来ないような話に思わずぎょっとしてしまふ。>br<

確か彼は代々続いている店を父親から受け継いでいるはずだ。>br<

彼の言う通りだとすれば、幾ら息子とはいえ店を任せようなどと思うだろうか。>br<

俺の疑問を察したジョニーは苦笑しながら、昔を懐かしむようにゆつくりと言う。>br<

「まあどうにか妻を得て父にも一から仕事を叩き込まれ、何とかはなりましたがね。しかし長い間、私は妻に代わり映えのしない日常を強いてしまった」>br<

俺に言うのではなく、綴られた日記を捲り思い出を自分自身に語っているようだった。>br<

小箱に視線を落としながら皺に囲まれたその目が見詰めているのは
遠い昔の事なのだろう。>br<

「私は朝から晩まで仕事仕事で……けれども彼女は毎日手を変え品
を変え私の楽しませ癒そうとしてくれた。そして気付いたんです、
私自身がそうした妻を当たり前のものと思い、妻を妻とも認識して
いなかった事が。やっと一人前と言われ父から店を任されるようにな
った矢先……妻が倒れた事で漸く……本当に漸く気付いたんです
よ」>br<

そしてその目に深い後悔が浮かぶのに俺の胸が酷く痛んだ。>br<

もしティアファナと結婚した当初の状態が今も続いていたらと思う
と、その後悔は正しく俺のものだったかもしれない。>br<
今になって彼女がどれだけの苦痛と寂しさに耐えていたか思い知ら
された。>br<

碌に目も合わせず、触れ合いもなく、かけた言葉は突き返されて――
どれだけ心細かった事だろう。>br<

年を重ねた今希望を潰す術を知っている分、幼い頃迷子を経験した
時よりも一層恐ろしい。>br<

「それから妻が亡くなるまでの間、彼女の体調が許す限り共に様々
な場所に赴き贈り物をしました。そんな事しか私には考え付かなか
った」>br<

俺と、同じだ。>br<

「今日は何を贈ろう、明日は何を贈ろう。そうして私自身も人生を
楽しみ、心がね、変わった事を知りました」>br<

ジョニーはその小箱が奥方そのものであるかのように大事そうに
引き寄せて閉じた蓋を撫でる。>br<

「勿論完璧には行きませんが、自分の思う通りに世は運ばないもので
すから。ただ自分の心一つで、如何様にも、変われる事もあるので
すよ。いつでもね」>br<

「俺に――変わる事は出来るだろうか？」>br<

すると彼は皺を押し上げて目を開き、そしてまた顔を皺だらけにして笑った。>br<

「すでに坊ちゃんはお変わりではないですか。そのようなお姿を拝見出来て、この老いぼれも長く生きた甲斐があったというものでございますよ」>br<

「こんな、情けない姿でも？」>br<

「恋をする男の姿は今も昔も情けないものと相場が決まっております。悩み躓き立ち止まり、それでも止められないのが恋というものですよ。悩みもせずこれでいいのだと、人に対してそう思ったのなら……その方はいつか坊ちゃんにとって人ではなく、石像のようなものと化してしまわれるでしょう」>br<

暫くぼんやりと彼の言葉が頭の中を渦巻いた。>br< 彼女の思いを突き放していた間、そして彼女と意思を通じ合わせた間、俺は少なからずただ現状だけに満足してはいなかったか？>br<r<

たつぷりとティアファナの愛に浸かっているだけの俺を、彼女こそが代わり映えのしないものと認識したのでは？>br<

「坊ちゃん、悩む事はそれだけ相手を思うからです。好意を持つ相手にほど、自分がどう行動するかどう存在しているのか、悩むものですよ。ご安心なさい、貴方は確かにご立派になられた」>br<

「何故……小石を奥方に？」>br<

ジョニーは照れ臭そうに白髪を撫で付けて言った。>br<

「あれは、私が妻に……指輪以外に初めてプレゼントしたもののなんですよ」>br<

思わず瞠目してしまった俺にやはり彼はふふと笑って小箱の中から取り出した小石をこちらに向ける。>br<

そしてそれが俺に向けられた角度から見ると何となく花の形を模している事に気付いた。>br<

「何となく花の形に見えるでしょう？私もそう思いましたね、咄嗟にこれを拾って彼女に差し出したんです」>br<

そんな言葉に驚いたと言うより外はなかった。 > b r <

先程聞いた話も今の彼を見れば俄かには信じ難い、「咄嗟に」なんて言葉がこれほど不釣り合いな人もそういないだろうと思うほど彼の所作は緩やかで余裕がある。 > b r <

「結婚前に一度も何か贈らなかったのか？」 > b r <

「ええ。店を任されるようになったと言っても、それまで私は妻の分まで親に養わせているような状態だった。だから無一文だったんです、殆ど。そして妻が病とわかった当初は治療費を捻出するのが精一杯で、妻が病院から出られるようになった日には花も買えず。家に帰りながら妻が散歩をしたいと言い出して、歩きながら私は今までの自分を思い返していました」 > b r <

心情は何となく察せられた。 > b r <

仕方がなかったと自分自身が無意識に口実にしていた状況は、その時になって初めて彼を現実として苛んだ事だろう。 > b r <

——俺が嘗てそうだったように。 > b r <

「そんな考え事をしていた所為でしょうね、転んだんです、派手に」 > b r <

「ジョニーが？」 > b r <

声を上げて笑ったジョニーはそのままで頷く。 > b r <

「そうしたら、妻が手を差し伸べるんです。記憶にあるよりずっと細くなった手で、未だ血の気のないような顔を心配そうにさせて、大丈夫かと私に問うたんです。声を上げて泣きたいと思ったのは、あれが初めての事でした。居た堪れなくなつて、もうとにかく彼女に何かを与えなければいけない気持ちに囚われました。相手を気遣う——今までそんな当たり前の事も妻にしてやれていなかった自分が恥しくて、後ろめたかつたんです」 > b r <

「……わかるよ」 > b r <

「それで咄嗟に足元に転がっていたこれを差し出したんです。今思ひ出しても恥しくなるんですがね。けれど妻は喜んでくれました。生花のように枯れる事はないから、一生……大事にしておけると」

> b r <

彼が声を震わせたのに、俺も暫く黙り込んでいた。> b r <
きつと少し前のティアファナも彼の妻のように何を贈ったとして喜んでくれただろう。> b r <

しかし今は果たしてそうだろうかと思わずにはいられない。> b r <
もし彼女が俺を夫として認識しなくなっていたのなら、俺自身の贈り物も同じように見えてしまうだろう。> b r <

愛する人が贈る小石は宝石にも勝るだろうが、その逆はどうだろうか。> b r <

俺の贈り物は彼女の目に色褪せて映りはしないだろうか。> b r <

「ああ、すみません。全く、年を取ると時間が緩やかに流れ過ぎる」> b r <

ただその言葉が想像を絶した、その緩やか過ぎる時間を彼は愛する人をこの世からは失ったまま生きている。> b r <

けれど彼の胸には全て思い起こすにはそれでも足りないほどの思い出が詰まっているに違いなかった。> b r <

「まあそういう事です。多分ですがね、贈る側の気持ちも大事なんですよ。ですから坊ちゃんもきつと奥様のお喜びになられるものを見付けなさるでしょう。坊ちゃんが選びなさった方だ、大丈夫ですよ。ケニス様が悩みに悩んで贈られたものなら必ずお喜びになります」> b r <

ああそうだ、彼女は例え親の敵から贈られた花であろうと、花を憎むような人じゃない。> b r <

そしてそこにこそ俺の挽回の好機があるんじゃないか。> b r <

「ありがとう」> b r <

「私は何もしておりませんよ。そういう訳で、ですから」> b r <
「もう譲ってくれとも買い取らせてくれとも言わないよ。やはり見に来てよかった」> b r <

「さようでございますか。そうそう、お二人のお子様がお出来になられた時には、是非このジョニーに御用命を。とびきりの仕立てを

させて頂きますからね」>br<

にこにこと笑みながらのその言葉にはどう返したものが迷って頷くだけにした。>br<

来た時同様手ぶらで外に出て、振り出しに戻ってしまった事に気付く。>br<

それでも彼女に対する自分を存在にあれこれ悩み、そんな自分を疎ましく思っていた何かは消えていた。>br<

開き直りと言えそうだろう、それでも彼女に対して悩みが尽きない自分自身を肯定出来た事で身が軽くなった気分だった。>br
それもそうだ、当たり前なのだ、彼女が好きだから俺はどうしようもない事まで考えているんだ。>br<

愛の反対は無関心だと言うが、実際その通りなのだろう。>br
「自分の心一つ、か」>br<

雑多な町並みを再び歩きながら噛み締めるように呟く。>br
心を通じ合わせて以来贈り物は様々して来たが、肝心な時に何一つ思いつかないのは、やはりそれまでが何となく一般例に合わせたものだったからだろうか。>br<

徐々にティアフアナの好みは把握出来て来たものの、ここ一番という物が出て来ないのには今更ながら俺自身かなりショックだ。>br
r<

勿論彼女の何もかもを把握出来るとも思わない、けれどそれにせめて近付きたい。>br<

俺も少しずつでも変わっていきているのだと信じたい。>br
「贈り物は止めだ」>br<

自身に言い聞かせるようにして俺はその言葉と共に踵を返す。>br<

そして記憶を探りながら真っ直ぐにある店へと向かった。>br
「いらつしゃ——え、……え？ダンナ、店をお間違えじゃ……」>br<

「客に向かつてなんだその言い草は」>br<

カランとドアベルが鳴り止まない内に奥から顔を出した中年の小さい店主がまじまじと人の顔を見る。>br<

確かにこの店に自ら足を運んだ事はない、精々数年も前母に付き合っ
て一度来たくらいだ。>br<

「いやあ、ご結婚なさったとは窺ったんですがね。おめでとうござ
います。いやしかし、まさかダンナがお一人で来るとは夢にも思
いませんで」>br<

「悪かったな」>br<

「いえいえ、へえ、それで今日は何をご入用で？」>br<

「正直、わからない」>br<

「……ダンナ、冷やかしは勘弁して下せえよ」>br<

「わからないからわからないんだ、店主なら説明をしろ」>br<
ふつくらとした肉に埋もれた小さな目をこれ以上なく丸々とさせ
た店主は所在無げに首を掻く。>br<

「そりゃあ、構いませんが。……しかし、まさか一通りお揃えで？」
>br<

「必要であればそうする」>br<

「へえ、はあ……まさか、ダンナがお使いになるんで？」>br<
「俺が使う事に何か不都合でもあるのか」>br<

「いえいえ！はあ……ダンナがお使いになるんで……」>br<
呆けたような店主から視線を外して店をぐるりと見渡してもさっ
ぱり用途も価値もわからない。>br<

しかしいちいち何に使う物なのか聞いたところで、その最良に活か
せる方法を俺はまず知らなかった。>br<

それに気付いて店主を振り返ると、何故か安堵したような表情でい
る。>br<

「お止めになるんで？」>br<

「……買うと言ったら買う、そして俺が使う。それより、奥方がそ
の手の事に詳しかったな？いるなら呼んでくれ。それぞれの説明を
聞きながら検討する」>br<

「……………へえ」>br<

気の抜けた返答をした店主はそのままふらふらと奥の方へ入って行った。>br<

それを見送り俺は一番近い棚に歩み寄り目に付いた物を手にとってみる。>br<

家でも目にした事があるものだというのに、俺には経験がない分これを何に使うのが最良かもわからない。>br<

しかし俺は必ず遣り遂げてみせよう。>br<

ティアファナが俺をどう考えているかは今は考えない事だ。>br<ただ、そう、彼女を喜ばせたい、彼女の笑顔を見たい。>br<

今はそれだけだ。>br<

例えば俺がジョニーの立場であつても、きっと小石を贈る事に躊躇いはなかっただろう。>br<

「まあまあつ、旦那様、いらつしやいまし！今日は奥様のお使いで？」>br<

……………とにかく、俺はやるぞ！>br<

>br<>br<

番外編 1 - 3

「うわあああああああああつ!!!」>br<

誰も予想だにしなかった事だろう、しかし現実と言うものはしばしば珍妙な事が起こるものだ。>br<

しかし例え、厨房で雪崩が起きようとも、今の俺の行く手を阻む事は出来ない。>br<

「だだだだ旦那様!? 如何なさいましたか!?」>br<

「何でもない! 騒ぐな!」>br<

コック長が厨房の外で喚いている。>br<

今朝は早くから母と出かけていてティアフアナがいないからまだいいものを。>br<

……いや、今朝もまた一言置いたのみでさつさとティアフアナが行ってしまったのを嘆くより、今はすべき事がある。>br<

……夜などは連日背を向けて寝られてしまったのを嘆き悲しむよりもだ。>br<

……ティアフアナ……。>br<

「旦那様あああああああ! 何か焦げ臭いですつつつつつつつつ!」>br<

「しまった!」>br<

慌てて数日前に買ったばかりの鍋を火から上げるも時すでに遅し、とたん焦げた匂いが鼻を突く。>br<

表面上は大丈夫そうだがそこは確実に焦げてしまっているだろう、これでは匂いが移ってしまつて駄目だ。>br<

やれやれと肩を落としながら雪崩の原因でもある予備に予備を重ねて買った食材と鍋を取り出し、また一から調理を始める。>br<

調理器具の店主の奥方に数日間かけて散々頭に叩き込まれた調理法だが、生まれてこのかた厨房になど入った事もない俺は未だに慣れたものではなかった。>br<

こんな時に限って仕事が山のように降って来て、実際調理をするのはこれで二度目という始末だ。 > b r <

ナイフはそれなりに扱えるつもりだったが、調理用となると全くやり方が違う。 > b r <

俺はティアフアナの料理を思い出し、目の前の不恰好に切れた野菜を前に思わず溜息をつきたくなった。 > b r <

考えた末にこの方法しか思い浮かばなかった。 > b r <

ティアフアナへの贈り物と考えれば王族が所有しているような宝石として購入を厭わないが、それでは俺はただ金を出したただけだ。 > b r <

どんなものでも恐らく喜んでくれる彼女であるからこそ、俺の手で贈り物を「作って」みたくなったのだ。 > b r <

そう、出来上がりはこの通りあまり期待出来そうもない。 > b r < しかし俺が一人で作り上げた贈り物なら、きつといつも以上に彼女は喜んでくれるに違いない。 > b r <

それにしても自分でやってみて如何に調理が重労働かを知った。

> b r <

どんな風にして彼女がいつも俺に対し手料理を振舞ってくれていたか、俺はすっかり考えてもいなかった事に気付く。 > b r <

凝った料理をする時は前日からの仕込みも大掛かりなのだ店主の奥方は言っていた。 > b r <

恐らく俺の见えない所でティアフアナもそうしてくれていたんだろう。 > b r <

全ては、俺の為に。 > b r <

それなのに俺ときたら彼女がどんな大変な思いをして作ってくれていたか知ろうともしなかったのだ。 > b r <

彼女は料理が好きと言っていたし、俺はただ出されたものが全てだと思っていた。 > b r <

そこにどんな思いが込められているか、理解していなかった。 > b r <

全くジョニーの事は本当に笑えない。 > b r <

野菜の皮を剥くだとか、調理法に合わせて形を変えて切るだとか、味付け一つにだって食べる者の事を考えなければならぬ。 > b r <
ティアファナはコックではない、俺の妻だ。 > b r <

そしてやはり彼女は今まで俺にただ一言「美味しい」と言っただけで、
為に頑張ってくれていたのだと痛感する。 > b r <

どんなに大変な思いをして、どんなに相手の事を思っただけで、
ていたか、考えようとしなかった俺の為にだ。 > b r <

「旦那様……やはり私がお手伝いを……」 > b r <

「うるさい！俺は大丈夫だ、向こうに行っている。ティアファナが
帰って来たらすぐ知らせるんだぞ」 > b r <

「は、はあ……」 > b r <

気の抜けた返答とも呼べない返答と共に足音が遠ざかって行くの
を確かめながら、再び目の前の野菜と格闘する。 > b r <

こうしていると実に彼女のように凝った料理を作っている気分にな
るが、残念ながらただのシチューだ。 > b r <

自分ではそうは思わなかったところか、器用だとさえ解釈していた
というのに、先日から今現在ですっかり自信は喪失してしまってい
る。 > b r <

思考するのと実行するのでは致命的なほどに差があった。 > b r <
何だろうか、この不気味な形は。 > b r <

こんなものをティアファナの口に入れたくもないような気もするが、
今の俺にはこれが精一杯なのが悔しいところだ。 > b r <

ナイフを握る己の手を見ればあちこちが切れていて、セバスチャ
ンから届けて貰った包帯だらけになっている。 > b r <

しかしこんな事で怯む訳にも止める訳にもいかない。 > b r <
これ以上の贈り物はないと閃いたんだ、彼女の笑顔を見る為にも諦
める事は出来ない。 > b r <

「よし、後は……」 > b r <

先程も繰り返した手順通り、奥方から頂いたメモを確かめながら、

新しい鍋に水と肉と大麦に黒胡椒……それから分けて貰ったハーブを投入する。>br<

火にかけてじつとそれを見守った、煮立つまでの時間が結構長い。>br<

まだうんともすんとも言わない鍋を眺めながら、ティアフアナはこうした時に何を考えていたのだろうかと思う。>br<
今までは……きっと俺の事だった。>br<

俺が出来上がった料理を見てどんな顔をするか、俺が口にしてどんな事を思うか、そしてどんな事を言うか。>br<

俺も今、同じ事を考えている。>br<

彼女はこれを見てどんな顔をするだろう、彼女はどんな事を思うだろう、どんな言葉を口にくれるだろう。>br<

頭の中にそれだけが溢れ出す。>br<

どんな彼女でも好きだと思う、あの頃のように例えその顔が寂しさや不安に揺れていても。>br<

けれど彼女の心のからの笑顔を見て以来、強くその笑顔を望むようになった。>br<

いつも彼女の心が幸福で溢れている事を願っている。>br<
だからこそそれが表れる微笑みが、ただただ見たいと思う。>br<

それが俺の手によるものなのなら俺でさえも幸福になるだろう。>

br<

一目で全てを奪われ、妻にと願った唯一の人。>br<

俺は君を——幸せにしたい、一緒に幸せになりたい。>br<

思うだけでなく、その為に出来る事をしたい。>br<

「おっと」>br<

ぐつぐつと音が聞こえて来た鍋を火から少し遠ざけ、浮いて来たアクと言う物を掬う。>br<

奥方によればこうした手間が味に多大な影響を及ぼすらしい。>br<

目が離せない子供のようなんですよと言っていた言葉に酷く

同感した。 > b r <

しかし手間をかければ必ずそれに応えてくれる。 > b r <
いい子だ、頼むから俺の愛する妻の為に美味くなってくれ。 > b r <
しつこく浮き出て来るアクと悪戦苦闘し、漸く野菜を入れて煮込む
とまだ出て来るそれを睨み付けながら掬い続けた。 > b r <
全く自分の悪い所を見ているようで居た堪れない。 > b r <

しかし必ず、悪い所は取り除いて、ティアファナの笑顔を勝ち取
つてみせるぞ。 > b r <

ああそうだ、ガイラーなどに負けてなるものか。 > b r <
あんな外面だけのいい腹の中では何を考えているかわからないよう
な奴などに……………昔俺も似たような事を誰かに言われたような…
…。 > b r <

いや！俺は今日をもつてして更に生まれ変わるんだ！ > b r <
そうだとも、まだ手遅れではない……………はずだ。 > b r <

彼女に別れを切り出された訳でもなければ嫌悪の表情を向けられた
訳でもない。 > b r <

ただあまり目を合わせてくれないだとか触れようとすると背を向け
られてしまつだとか怒られたとか怒られたとか……………そのくらいだ！
> b r <

世の中には倦怠期なんて言葉もある、そうだ、ティアファナがそう
いう気分の時期かもしれない！ > b r <

「あああ、いかにいかに」 > b r <

頭を掻き毟っている場合じゃなかった、今は料理に集中しなけれ
ば。 > b r <

よし、最後の野菜も投入し終わった。 > b r <
後は煮ている間に肉を取り出して骨から外して食べやすいように切
つてから再び戻して塩胡椒、火から下ろす……………。 > b r <

「やつと一品、か」 > b r <

思わず肩で息をしそうになった。 > b r <

そう、幾ら俺に料理の才能がなかったとして、一品で済ませるのは

俺の沽券に関わる。>br<

「この際質より量で勝負ですよ！」と言われたからでは決してない、決してだ。>br<

置いてあるメモをきつと睨み、俺は休む暇もなく次に取り掛かった。>br<

あまり工程が多くないようにと奥方が教えてくれたのは鍋一つで出来るケーキだ。>br<

それを聞いた時の衝撃は忘れられない。>br<

調理の工程を知らない俺でもケーキは鍋で作るものではない事くらいは知ってる。>br<

いや、それもまた知らなかったのだろう、俺は全く無知になった気がした。>br<

だが俺は無知であると自覚しながらそのままにいる愚鈍ではない、他の事ならいざ知らずティアフアナを喜ばせる事が出来るのなら料理の道さえも究めてみせる。>br<

更に新しい鍋を取り出し、バターやスパイスなどといった材料を入れていく。>br<

少々不安が残りながらもそれを火にかけ軽く沸騰させると、すでに芳ばしい香りが辺りに漂った。>br<

カレンツの酸味がかつた甘い香りは俺の食欲さえそる。>br<火から下ろしてぐるぐると鍋の中を掻き回し、そしてまた冷めるまで待たなければならない。>br<

慣れている人間ならこうして待つ時間を利用して他の調理をすのだろうが、やはり俺はそこまでの域に達していないと痛感した。>br<

こうしている間にもメモを何度も見返し間違いがないかと覚束無い。>br<

完全に冷めたのを確かめ、今度は卵と残りの材料を加えてまた混ぜる。>br<

ぐるぐるぐるぐるやっていると、子供が読む本に出て来る魔法使

いにならなかつた気分だ。 > b r <

もし俺が本当にそうだったのなら事はもっと簡単だろうが。 > b r <
しかし魔法などで彼女の心を変えたり、ぱっと料理を出すのは、今
考えると実に味気ない。 > b r <

どつと疲労感を覚えてはいるが、こうしているのが楽しい事も否め
なかつた。 > b r <

彼女の事を考え、想像し、笑顔の為に自分なりに努力しているのが
どことなく誇らしいと思う。 > b r <

ティアファナが喜んでくれるのなら、例え後十品作り疲労困憊とな
つたとしても全てが吹き飛んで俺は嬉しくなるんだろう。 > b r <
だから、どこか今の疲労が心地よかった。 > b r <

「よし、と」 > b r <

コック長を呼び、厨房の散々たる光景を目の当たりにし青褪めた
顔の彼にオーブンの支度をさせ、焼き型に鍋の中身を流してから焼
く。 > b r <

オーブンから視線を外し、涙目になりながら俺が焦がした鍋や何や
らを片付けているコック長に言った。 > b r <

「本当にあれで出来上がるものなのか？何と云うか、ねっとりして
たぞ」 > b r <

シチューを作るところは奥方に実演して貰ったが、時間がなくケ
ーキを作るところまで見るのは無理だった。 > b r <

かなり不安だ、と言うより疑問だ。 > b r <

「旦那様、ケーキとはそういうものでございます。あああ……オル
ポート製の鍋が……」 > b r <

「そんな物はあと三つほどある、好きに使え」 > b r <
「ううう……」 > b r <

やはり店主の店の鍋は料理人には人気があるようだな、あの店に
して正解だった。 > b r <

母の一流好きも伊達ではなかったらしい、あの時買ひ物に渋々なが
らも付き合っただけで本当によかった。 > b r <

「そつえばお前は時折ティアフアナと料理をしているんだつたな」
> b r <

「は、はい。奥様がお一人でされますので、私は少々お手伝いをさせて頂けだけです」> b r <

コック長は鍋にこびり付いた炭を落とすのを諦め、床に散らばっている野菜屑を箒で掃きながら言う。> b r <

「私も長年コックを勤めておりますが、奥様は大変手際がよくていらつしゃいますし、何より楽しそうにしておいでです」> b r <

「そうか……」> b r <

「はい。こちらに來られた日には一番に旦那様や大奥様のお好みの物は何かとお尋ねになれまして」> b r <

感慨深げにコック長は頷き、茶色の口髭を撫でた。> b r <

「私がこちらに勤めさせて頂く以前には、奥様自らが厨房に立たれるなど考えられなかつた事ですから、大変驚きました。深く旦那様をお慕いなさっているのだと、私など感動を覚えたものです。そしてこれからは奥様の為にも私の腕を揮えるのが嬉しく思いました」
> b r <

まるで自分の娘を自慢するかのように誇らしげに言つたコック長に俺も頷く。> b r <

そしてコック長は悪戯を企む子供の如き表情で笑つた。> b r <

「調理中、奥様は沢山お喋りをなさつて下さるのですが、いつも旦那様の事ばかりなのですよ」> b r <

それは――。> b r <

「旦那様は今日体調が悪そうなので薄味の方がいいのではないか、甘い物はあまり好きではないようなので甘さを控えめにする方がいいか、……それはもう他にも沢山」> b r <

「ティアフアナが、そんな事を」> b r <

「ええ、ええ。あつ！大奥様には内密にお願い致しますね。いえ勿論大奥様の事も奥様はお考へになつておいででつ」> b r <

「わかつている」> b r <

そんな事が知れたら疎外感を覚えた母に何を言われるかわかったものじゃない、この俺が。 > b r <

ほっと胸を撫で下ろしながら袋に詰めた野菜屑などを捨てに行くコック長を見送って、暫く椅子に座ったままでいた。 > b r <

すっかり片付いた厨房を見回すと、あちらこちらにティアフアナの姿が想像出来る。 > b r <

楽しそうに、嬉しそうに、料理をしながらコック長に話している姿が。 > b r <

芳ばしい香りが強くなっていく中、想像する彼女のスカートの裾がひらひらと揺れている。 > b r <

「ただただただだっだ旦那様っ！」 > b r <

そして行ったと思ったコック長が袋を抱えたまま慌てて戻って来た。 > b r <

「奥様がお帰ります。お支度はお済ですか？」 > b r <

「済んでいるない！」 > b r <

「旦那様、言えていません……」 > b r <

拙い、まだケーキは焼き上がっていないし、テーブルの用意も出来ていない。 > b r <

どうしたものかと思案するより先に使用人達を引き連れたセバスチヤンがやって来る。 > b r <

「旦那様、テーブルのご用意は私共が致します」 > b r <

「そうですね、ケーキが焼き上がりましたら私めがお持ちしますっ」 > b r <

「旦那様は奥様のお迎えを」 > b r <

「わかった」 > b r <

打ち合わせた訳でもないのにそれぞれがさつと配置につくように分かれる。 > b r <

素早く匂いのついた上着を替え、廊下の途中から早足を止め、出来る限り冷静を装って玄関の方へ出向く。 > b r <

丁度使用人にドアを開けられて入って来たティアフアナが俺の顔を

見、そして口を開きかけてからそのまま動きを止め瞬きだけを繰り返した。>br<

な、なんだ？何かおかしいところでもあるのか？やはりまだ匂いが染み付いていたのか？>br<

ななな何なんだ、何か言ってくれティアファナ！>br<

そうだ、俺の方こそ言うのを忘れていた。>br<

「おかえり、ティア。買い物は楽しかったかい？」>br<

動揺を隠し努めてにこやかに接したつもりだったが、彼女はいつまで経ってもその場から動かずばちと目を瞬いて俺を見ている。

>br<

「何をしています？ティアファナ、早く中に入らないと冷えてしま……あら、ケニス」>br<

その「いたの？」みたいな口調はどうにかならないものか、母上。

>br<

確かにここ数日仕事が忙しい上に店で講習を受けていた所為で母と顔を合わすのは久しぶりではあるが。>br<

しかし母は俺とティアファナの様子には気にも留めず、俺の後ろからやって来たセバスチャンに向かって言う。>br<

「セバスチャン、食事の用意は？」>br<

「整っております」>br<

よし、セツティングまで俺一人でしたかったが、まあ臨機応変だ。>br<

当初の予定はこなしている、そしてここからがある意味の本番だろう。>br<

「さあ行こう、ティアファナ」>br<

歩み寄りそつと腕を差し出すと、ティアファナは僅かに俺の上で視線を彷徨わせてからおずおずと腕を取る。>br<

何故そう躊躇う必要があるのだろう。>br<

まるで後ろめたい何かがあるような――……いやいやいや！彼女に限って不貞行為などあり得る訳がない！>br<

大丈夫だ、……俺も大丈夫だ！>br<

ティアファナの小さな手を久しぶりに腕に感じながら、異常に胸が高鳴っているを感じる。>br<

未だ嘗てこんなに緊張した覚えがあっただろうか。>br<

ああそういえば彼女に初めて声をかけた時、それから彼女が他の誰かと駆け落ちしたと勘違いした時、こんな風に酷く鼓動が速くなり痛むほど苦しくなった。>br<

彼女は喜んでくれるだろうか、さっきから口も利かない様子が気になって仕方がない。>br<

母の後を歩きながら、そつと視線を下ろしてティアファナを覗き見ると、彼女は視線を落としていてその表情は窺えなかった。>br< 一歩一歩と食堂に近付く度、俺の心臓は壊れてしまうんじゃないかと馬鹿な心配をしてしまう。>br<

頼む、頼むから、と誰にともなく俺はそう繰り返し続けた。>br<

「まあ、今日は随分とシンプルね」>br<

食堂に入りそれぞれが席に着くと、皿に取り分けられたシチューを前に母が言う。>br<

しかし俺はそんな言葉も耳に入らずひたすらティアファナに視線を釘付けにしていた。>br<

彼女はじつと、いつものコックが作ったとは思えないシチューを眺めている。>br<

わかったのだろうか？彼の腕を一番に知っている彼女なら気付いただろう、けれどこれが俺の手によるものだと思っただろうか？>br<

どのタイミングで切り出すべきか、パンを運んで来る使用人を視界の端に収めながら俺は考えていた。>br<

彼女はまだじつと、何故か浮かない顔でシチューを見詰めている。

>br<

「ティア、体調でも悪いのか？」>br<

そんな様子に俺は思わずそう言っていた。>br<

ティアファナの体調が悪いのなら一刻も早く休ませなくてはならない。>br<

料理はまた作ればいい、彼女の具合が悪くなつては何もかもないんだ。>br<

「お、お義母様……」>br<

ところがティアファナは震える声で、何故か母に向かって顔を上げるなりそう切り出す。>br<

俺はどうしてか、彼女が冷たくなって以来、今日で一週間目だという事をぼんやり思った。>br<

>br<>br<

番外編 1 - LAST

一瞬唇を結んだティアファナはそれを震わせ、すっと立ち上がるなり叫んだ。 > b r <

「私、もう駄目です！」 > b r <

そう言ったかと思うと今度はくるりと俺の方を向いて、そのまま突進して来た。 > b r <

あまりに予想外の事に思わずそのまま倒れそうになったが、テーブルの端を掴んでなんとか堪える。 > b r <

ティアファナが軽くてよかった。 > b r <

いやそれより、なんだこの状況は。 > b r <

「ケニス！これはもしかしてケニスが作って下さったのではないですか！？」 > b r <

俺の胸から顔を上げた彼女は半ば涙目で俺を見上げそう言う。 >

b r <

気圧されるまま俺が頷くと、ティアファナの名を咎めるように呼んだ母の声など聞こえてもいない風で、そのまま顔をピンク色に染めたかと思うとじわじわと目のふちにある涙が丸く盛り上がった。 >

b r <

「ど、どうして泣くんだ！？……気に入らなかったか？」 > b r <
彼女の目元を指で拭いながら、魂が抜けかける思いで尋ねた。 >

b r <

泣くほどがっかりするとは思わなかった、しかもさっきの言葉だともう彼女は俺にすっかり愛想を尽かしたみたいじゃないか。 > b r <
今となっても彼女が俺の何が気に入らなくなったのかわからない、わからないような男だから見限られたのかとも思う。 > b r <

それでも、君が愛しいと言ったなら、……もう君は笑ってはくれないのだろうか。 > b r <

「ティア、泣かないでくれ。悪かった」 > b r <

「そんな……悪いのは私です」>br<

「そんな事はない。気付こうとしなかった俺が馬鹿だったんだ。今日料理をしていて、いつも君が如何に俺の事を考えて手間を掛けてくれていたか知った。出された物を当たり前のように思っ、そんな事すら考えようとしていなかった」>br<

次々溢れて来る彼女の涙を追いかけて拭う。>br<

今更気付いたところでもう遅いかもれないが、それでも伝えたい。>br<

「いつもありがとう、ティアファナ」>br<
「うっうっ」>br<

まるで子犬のような鳴き声を上げたティアファナは俺にしがみついて胸に顔を埋める。>br<

きつと彼女は今まで辛かったに違いない。>br<

どこまでも優しいから、俺に伝える事も出来ず一人でまた悩んでいたんだ。>br<

どうしてもつと彼女の一挙一動に意味があると思えなかったんだろ。>br<

失くしたくないと思っ、ていながら、どうしてそんな些細な事を怠ったんだろ。>br<

後悔は尽きない。>br<

だから悪いのは彼女ではなく、この俺なんだ。>br<

「ティア、頼むから泣かないでくれ。俺は君を喜ばせたかった、君の笑顔が見たかった」>br<

「ケニス……」>br<

「君には到底及ばないけれど、俺一人で作っ、たんだ」>br<

そう言っ、たとたん、彼女は泣き止むどころか声を上げて泣き出してしまった。>br<

彼女の顔を胸に押し付けて抱き締め、あやすように体を揺すろうとも胸が張り裂けそうな啜り泣きが聞こえる。>br<

一体どれだけ我慢させていたのか、俺には想像もつかない。>br<

呆気にとられている母に断りを入れてティアファナを抱き上げると、そのまま退室し寝室へと向かった。>br<

俺の胸にしがみ付いたままの彼女をベッドに下ろしても顔を上げようとはせず泣き声も止まない。>br<

俺は途方に暮れながらも彼女を膝の上に抱いて、頭や背を撫でながらそのままでいた。>br<

こうしていると俺の気付かなかった罪が思い知らされるようだ。>br<

まだ十代半ばの彼女に俺は一体何をやっていたんだ。>br<
大人の男としてあるべきなら、俺こそが彼女に気取られないように察するべきだと言うのに。>br<

暫くの間彼女の涙を拭い続け、お互いの額を重ねて彼女の赤くなつた目元と鼻を覗き込む。>br<

やっと彼女の涙は尽きたようだったが、すすすんと時折赤い鼻を鳴らしていた。>br<

「ご、ごめんなさい。私、泣いたりなんかして……」>br<
「いや、いいんだ、泣きたい時は泣いていい」>br<

我慢などされるより、他の男の前で泣かれるよりは余程いい。>br<

ただ胸が痛い、同時に酷く情けなくなる。>br<

ティアファナがこんな風に声を上げて泣くななんて初めての事だ、こんな風に泣くとも知らなかった。>br<

知った気になっていて、まだまだ何も俺は知らない。>br<
それはどこかでやはり驕りにも似た安堵を感じていたに違いない。

>br<

彼女は俺の妻だから、彼女は俺を愛してくれているから——そんな言葉で本質を見ようとしていなかったんだ。>br<

料理一つにしたって同じだ、どんな材料を使いどんな調理法をしどんな味付けをするかまるで知らなかった。>br<

まだ涙の跡が痛々しく残る頬を両手で挟むと、拒まれない事にほ

つとする。>br<

髪と同じ色の長い睫毛が揺れて瞳に掛かる度、空から差す光のように見えた。>br<

「へ、変な顔をしていませんか?」>br<

「ちつとも。君の泣いた顔も怒った顔も好きだ。君の全てが好きだよ」>br<

そう言つとティアファナはまたくしやりと顔を歪めて泣きそうになる。>br<

「俺が作った物だとよくわかったね?」>br<

どうにか涙を止まらせようと、額を擦るように擦つて言う。>br<

すると彼女は躊躇うように視線を俺の手へと滑らせ、それを追つた俺は思わず肩を落とした。>br<

しまった、慌てていてすっかり手袋をするのを忘れていた。>br<
ティアファナが帰つて来た時に俺を見ていたのはこの包帯だらけの手の所為だったのか。>br<

大丈夫だと言おうとする前に彼女は俺の両手に手を重ねる。>br<

そして包帯の上から優しく撫でた。>br<

「大変だったでしょう?」>br<

「まあ、多少はね。慣れていないから。大した事はないんだ、ちょっとした切り傷だから」>br<

実際今の今まですっかり忘れていた。>br<

おまけに彼女の手が触れた傍から痛みなど癒えたように消えて行く。>br<

ああ確かに、何事も気の持ちようだと思う。>br<

「お蔭で君の苦労もどんなに俺の事を考えていてくれたかも知る事が出来た。味は足元にも及ばないと思うが、作っている間ずっと君の事を考えていたよ」>br<

すんとまた一つ鼻を鳴らしたティアファナが愛しくて仕方がない。

> b r <

こうしていたって彼女の何もかもが理解出来る訳じゃない、だから知りたいと思うのなら常にどんな事にも理由があると考える事だ。

> b r <

きつとティアファナは俺を傷つけようなどと思って俺を避けていたのではないだろう。 > b r <

「ティア」> b r <

意を決して尋ねてみようとしたところで、控えめなノックが響く。
> b r <

「旦那様、こちらにお食事をお持ち致しました」> b r <

セバスチャンに返答をするとティアファナが俺の膝の上から退いてしまったのは残念だが、彼女の興味が持って来られた料理に注がれているようで高揚感が湧き上がる。 > b r <

期待とそれから不安と、まるで少年の頃に戻ったように胸が高鳴った。
> b r <

「では、失礼致します」> b r <

使用人と共に支度を終えたセバスチャンが退室すると、ベッドの上に置かれたシチューとケーキを前にティアファナはじつと視線を注いだ。
> b r <

見栄えははつきり言って良くはない、味もティアファナやコックの作る物に比べたら……否比べ物にもならないだろう。 > b r <

それでも、少しでも、彼女の笑顔が俺に向けられたならと思う。
> b r <

「ティア、食べられるかい？無理しなくてもいいよ」> b r <

「い、いいえっ、頂きます」> b r <

ちゃんと背筋を伸ばした彼女はベッドの上でも律儀に座り直し、そつと銀色のスプーンを手に取った。 > b r <

ああ本当に心臓が胸から突き出て来そうなほど緊張する。 > b r <
今までこんな事はちつともなかった、花や宝石や本や服をプレゼントしてもここまで期待と不安と緊張が高まった事などない。 > b r <

美味しいと言って貰えるだろうか、彼女は笑ってくれるだろうか。

> b r <

そんな思いでシチューを乗せたスプーンを口に運ぶ彼女を見守った。

> b r <

「あ……」> b r <

「食べられない時は本当に無理しなくてもいいんだよ」> b r <

「違いますっ。凄く美味しいです」> b r <

振り返った彼女は一週間ぶりに俺を見て笑った。> b r <

——笑って、くれた。> b r <

「ケニス？」> b r <

「い、いや、その……本当に？」> b r <

ティアファナは微笑んで頷き、俺の分のスープレッシュを差し出す。>

b r <

恐る恐ると俺もスプーンを手にとってシチューを一口分口に運んだ。

> b r <

勿論自分なりに味見はしたつもりだ、成功とも言えなかったが失敗とも言えない凡庸な味だと思った。> b r <

そのはずなのにどうしてか、この温め直されただろうシチューが違った味に感じる。> b r <

「お野菜の味がよく出ています。それに、私が好きな味……」> b r <

そう今までの経験からしてティアファナは辛い物はまだ平気だが塩気が少し苦手だ、だから塩の量を少し抑えてみた。> b r <

しかし本当にこんな味だっただろうか？まさか俺がいない間に手が加えられたんじゃないだろうな？> b r <

「美味しいです。凄く、嬉しいです。ありがとうございます、ケニス」> b r <

また泣きそうになりながらも顔中を笑顔にさせて言うティアファナ。> b r <

そうか、きつと違う味に思えるのは、彼女がこうして一緒にいて微

笑んでくれるからだ。> b r <

彼女がそう言ってくれるから、悪くないと思えてしまう。> b r <
「ティアファナ」> b r <

ケーキにも手を伸ばし同じように何度も笑顔で繰り返してくれる彼女を強く抱き締める。> b r <

手放したくない、ずっと俺の傍にいて欲しい、そうある事を彼女自身にも願って欲しい。> b r <

「ケニス？」> b r <

「ずっと、俺を避けていただろう？」> b r <

なるべく責めた口調にならないようにと思っていたが、不安で声が震えた。> b r <

今だけでも逃がさないようにと、ぬくもりを抱き締める腕に力が籠る。> b r <

するとティアファナは首を傾げるようにして俺を振り返った。> b r <

「私、ケニスの事をもっと知りたかったです」> b r <

予想外の言葉に今度はこちらが首を傾げてしまう。> b r <

俺を知りたかった？> b r <

「そうなんです、ケニスが何を思っているのか、もっと理解したかったんです」> b r <

「君は充分に理解してくれているよ」> b r <

そうであつたからこそ俺は気付く事も出来なかった、あまりに自然であまりに深い事だったから。> b r <

今思えば彼女が作る料理一つにしてもコック長の言っていた通り、確かに彼女は俺の日頃の体調まで気を配って味を変えていたのがわかる。> b r <

どんな料理であつても俺が少しでも塩気が多過ぎるとか甘過ぎるとか、そういったものを感じた事がなかったからだ。> b r <

「いいえ。もっと、もっと知りたいんです」> b r <

腕の中で体を拭った彼女は俺の目を真っ直ぐに見詰めて言う。>

br<

ああ、これは……。>br<

「俺を、愛してくれている？今も変わらず」>br<

「変わった事などありません。あ、でも、毎日思っんです。昨日より今朝より、貴方が好きだなあって」>br<

少女特有のあどけなさでそう言って微笑む彼女の額に再び擦り寄る。>br<

愛しさと安堵が一度に襲って来て、堪らない気持ちになった。>br<

「俺もそう思う。気付かない時もあるくらいに、きつと当たり前のようにそう思っていた。けれど俺がそんな風に君の事を当然のように思っていたから、君を傷っけていたんじゃないかと思っていたんだ」>br<

「そ、そんな事ありません！」>br<

ぱつと顔を上げてふるふると彼女が首を振ると、さらさらと艶やかな髪が波打つ。>br<

「違っんです。その、どうしたらもつとケニスの事を理解出来るようになるか考えていて。……あ、今日の香水は如何ですか？オーレリア様にお薦め頂いて、先日購入した物なんです」>br<

オーレリアと言うと、ガイラーの姉か。>br<

という事は……？>br<

「この前ガイラーと出掛けていたのはこれを買っ為だったのかい？」>br<

>br<

「そうなんです。特別な花を使っているとかで、この季節に数量も限定でしか購入出来ない物なんだそうですよ」>br<

「いい香りだが……」>br<

「お気に召しませんでしたか？」>br<

「そうじゃない。君によく似合っている、ガイラーの姉の目利きは確かだな」>br<

ぱつと笑顔になったティアファナが大きく頷いた。>br<

「オーレリア様はとても素敵なお淑女ですから、私、どうしてもそんなふうになれますかとご相談申し上げてしまったのです」>br<
「そう急ぐ事はないと言っただろう、君は今でも充分素敵なお淑女だよ」>br<

すると彼女は拗ねたように少し唇を尖らせ……俺はそこへ触れたくなるのを必死で堪える。>br<

「何かしていたいんです。日々の努力さえ怠らなければ、……ケニスがいずれがっかりしてしまう事もないのではないかと……」>br<

「まさか。そんな事はありません」>br<

「先の事は誰もわかりません。それに今のケニスも、今しか見ていられません。だから、今の私も一番いい私として記憶に残して頂きたいんです」>br<

眩暈がする、動悸も激しい、きつとこれは重症な病だ、恐らく一生治る事のない……。>br<

「ティアファナ」>br<

「はい、何でしょう？」>br<

「キスをしてもいいだろうか？と言っか、……するよ」>br<

え、と言葉を発する前に素早く唇を押し付けて、この一週間触れる事さえ叶わなかったぬくもりと柔らかい感触を味わう。>br<
下唇の特にふんわりとしたところを食むと、実味覚など感じないのに砂糖菓子のような甘さを覚えるから不思議だ。>br<

このまま嘗めたら融けてしまいそうだ、いつそそうしてしまいたくなる。>br<

何度も触れては離し、けれどすぐにまた引き寄せられるようにして唇を重ねる。>br<

本当にいつ感じても奇妙な感覚だった。>br<

歯を立てて乱暴に噛み付いてしまい衝動もありながら、それを蕩けるほどの愛しさが包む。>br<

呼吸するタイミングを少し見失ったのか、口を開けて息をしようと

したそれさえも奪つて覆い尽くした。>br<

「ケニ、ス」>br<

「ゆっくり呼吸して」>br<

もつと深くまで探りたいのを必死で堪えやつの思いで唇を離し、喘ぐように息をつくティアフアナを胸に抱き寄せて背を撫でる。>br<

細い背中が上下して漸く落ち着いた様子を見せると、俺はもう一度だけ彼女の唇に音を立てて吸い付いた。>br<

「ガイラーの姉に何か言われて俺を避けていた？しかし先週からだつたはずだね？」>br<

「そうじゃ、ないんで、す。私、先週、お義母様にご相談を申し上げたのです」>br<

——…何？>br<

「お義母様は一番よくケニスの事をご存知ですから」>br<

それはそうかもしれない、が。>br<

「そうしたらお義母様は、ケニスの立場になつて考えてみなさいと仰られて」>br<

はい？>br<

「それでお義母様が仰るには、結婚始めのケニスの言動をよく思い出し、それに倣つて自分も実行に移してみると良いと」>br<

「……わかつた」>br<

ある意味よくわかつた、むしろわかりたくはなかつた事まで存分に理解した。>br<

つまり母は夫が仕事で帰れないのを逆恨みし、暇潰しよろしく息子夫婦で遊んでいたに違いない。>br<

まさに敵は己の懐にあつたという訳だな。>br<

こうなつたら一刻も早く父が帰つて来れるよう手筈を整えなければならぬ。>br<

「でも一週間が限界でした。やっぱり私はケニスのように大人の振る舞いは出来ないみたいです」>br<

「大人の振る舞い？」>br<

「はい。ケニスはあの時も私の事を考えて耐えて下さっていたのに、私は数日しか駄目でした」>br<

大いなる勘違い………なんだが、まあそれならそれでそう思わせておくに限る。>br<

ティアファナ、残念ながら大人のやり口はこうも汚いんだ。>br<
きつと君には一生かかって出来ない事に違いないよ。>br<
でも君はそれでいいんだ。>br<

「無理してまで大人になろうとしないでくれ。いずれ時は必ず来てしまうから。俺も今しか見られない君を見ていたい」>br<

はにかんで微笑むティアファナにもう一度口付ける事は躊躇いがなかった。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<>br<

「このケーキのレシピを教えて下さいませんか？」>br<

「ああ、いいとも。調理器具の店主の奥方から頂いたものだよ。俺でも作れそうな、一番簡単なものを教えて貰った」>br<

「でも初めて作ったとは思えないくらい美味しかったです」>br<

多分きつと、彼女も俺と同じだから感じたに違いない。>br<

じわじわと嬉しいような照れ臭いような、落ち着かない気分になる。

>br<

幼い頃父に褒められた時でさえこんな風には感じなかったというのに。>br<

「私なんてケーキ一つ満足に焼けませんでしたから」>br<

「君が？」>br<

それには少し驚いた、彼女は昔から何でも最初から上手くこなせるようなイメージがある。>br<

ティアファナは恥しそうに笑って言った。>br<

「母様がよく作って下さっていたと兄様が仰っていたので、それを真似してみたんです」>br<

「因みに何歳くらいの時だい？」>br<

「六歳くらいだったでしょう……。焼き過ぎて真っ黒になってしまったら、手に火傷をしてしまった。後で皆に怒られたんです」
> b r <

その場に俺もいたら確かにそうしただろう、彼女のこの白い手に痕が残ったと思うとぞつとする。 > b r <

「それからは父様や兄様が留守の時にやりました」 > b r <
「……なるほど」 > b r <

彼女の料理上手はひとえにその賜物だったという訳だな。 > b r <
お義父さん達がそれを知ったら猛烈な勢いで止めに入っていただろうから。 > b r <

「父様達には必要ないと仰ったのですが、やっぱり覚えていてよかったです。私はそういう事くらいしかケニスにしてあげられる事はありませんし」 > b r <

「とんでもない。君はいつも俺にとって重要で重大な事をしてくれている」 > b r <

「私何かしていましたか？」 > b r <

そうだ、彼女自身がいつも無意識だから、わからなかった。 > b r <

しかしそれが当たり前のもでなくなつて、俺も気付く事が出来たんだ。 > b r <

「君が俺に向かって微笑んでくれる事、俺が生きる上で実に重要で重大だ」 > b r <

ぱつと笑顔になったティアファナは少し頬を染めてくすくすと笑う。 > b r <

「私も、ケニスが微笑んでくれる事が、私の生きる上で重要で重大なんですよ」 > b r <

よかった……。ただ、よかったと、そう思う。 > b r <
その言葉が俺にどれだけ生きる力を与えてくれる事が、きっと彼女は知らない。 > b r <

けれど湧き出るこの思いが、彼女もそうなのだと知らせてくれる。

> b r <

日々愛し合う上で重大な事は些細なところに隠れているから、時に見えない事も多い。 > b r <

それでも俺達は一つずつ、見つけ出して行こう。 > b r <

「そうそう、近い内に父を呼ぼうと思うんだが」 > b r <

「お義父様をですか？お帰りになられるんでしょうか」 > b r <

「正確には母が、だがね」 > b r <

俺はティアフアナを抱き締めて、最後の呟きを彼女の髪の中に隠す。 > b r <

> b r < > b r <

ただその隠し事も後日あっさりと見付かり、母にねちねちと嫌味を言われた挙句、ティアフアナから別居となると寂しいと涙目で言われてしまうのは……理不尽で不本意な後日談である。 > b r <

> b r < > b r <

番外編 2 - 1 これから

> b r < > b r <

数日前からどうもおかしい、とティアフアナは疑惑に確信を持った。> b r <

様々な理由を考え当たりもつけてみはしたのだが、「様子が変わだ」という事以外は全くわからなかった。> b r <

まずいつもどこかそわそわと落ち着かない。> b r <

じつとしてられないのか、ケニスは先日には時間が出来たと言つて家に帰つて来た挙句ティアフアナを街へと連れ出してあれやこれやと何でも買い与えたがつた。> b r <

以前はそうした時期もあったのだが、今ではすっかりそんな事もなくなっていたというのに。> b r <

それからティアフアナへの構いたがりがここ数日凄まじくなっている。> b r <

馬車への乗り降りには抱き上げようとし、歩く時も離さぬようしっかりと腰を抱き寄せ、隙あらば頬や唇に口付けて来る始末だ。> b r <

嬉しくないとは言わないが、「変」だった。> b r <

結婚して以来新しく出来た既婚の友人達にそれとなく相談してみたものの、あまり色好い返答は貰えない。> b r <

誰も彼も異口同音に「夫が構いたがるのは何か後ろ暗いところがあるからだ」と言うのだ。> b r <

ならばとティアフアナはもつと彼の動向を詳しく観察してみた。> b r <

しかしそもそもケニスには隠し事にかまけている暇などないのだ。

> b r <

お互いの父親同士が事業提携し、この頃はケニスもブレントと仕事を同じくしている事が多いと言う。> b r <

それに家には毎日そう遅くもならずには帰って来ている上、時間が出来たら今度ブレントに会いがてら仕事場にもおいでとさえ言った。

> b r <

後ろめたい事をしているような人間がそんな事を言い出すだろうか

? > b r <

それともそうだからこそなのか、判断をするにはまだまだ経験が足りない」とティアファナは小さく溜息をつく。 > b r <

「どうしたんだい、ティア。体調でも悪いんじゃない——」 > b r <

「いいえ、違いますっ」 > b r <

ティアファナは今置かれている自分の状況を思い出し、むしろこうだからこそ余計に訳がわからないのだと思つた。 > b r <

横抱きにされるような格好で彼の膝の上に上げられている状況でもなければ、まだわかるというものだ。 > b r <

「少し、目が疲れてしまつたかな、と」 > b r <

「根を詰めすぎるのはよくないよ。本なら俺が読んであげようか」 > b r <

「い、いいえ、大丈夫です」 > b r <

そうかと残念そうに呟いたケニスはティアファナの頭をひと撫でして再び手にしていた書類に目を通し始める。 > b r <

それを横目で窺つてティアファナは再び溜息をつきそうになるのを慌てて押し殺した。 > b r <

先日思い切つて本人に理由を確かめてみたのだが、無自覚なのか無意識なのか、ケニスはティアファナの疑問にただ首を捻るばかりだった。 > b r <

そして本人曰く「仕事が予定通り運びそうだから少し浮かれているのかもしれない」らしいが、かなり無理があるように思える。 > b r <

かといって隠れて何かをしているような素振りもなく、全くティアファナは混乱するばかりだ。 > b r <

思い当たる事は全て考えた。 > b r <

ティアファナの誕生日は先日終えたばかりで、その時にもこれでもかと贈り物をされ始終甘やかされている。>br<

こつそりとブレントに仕事の様子を聞けば、確かに予定外の事はないが今のところ落ち着いていて大きな予定はないそうだ。>br
全く以って訳がわからない。>br<

これだけ甘やかされ構われて首を捻っている妻は恐らく世界を探しても自分だけではないだろうかとさえ思う。>br<

「ティア？やっぱり疲れてでもいるんじゃない？」>br<

「本当に平気ですっ」>br<

首を振ると両頬が大きな手に挟まれてそつと持ち上げられる。>

br<

暫くじつとティアファナの目を覗き込んでいたかと思うと、ケニスは突如微笑んでキスを落として来た。>br<

「浮かれている」のは間違いがなさそうだった。>br<

しかしやはりその理由が思い当たらない。>br<

何でも知りたいと思う欲求を持て余し、ティアファナは少しばかり情けない気持ちでケニスの胸に凭れた。>br<

「何か気に掛かる事でも？」>br<

そう言ったケニスを見上げ、頷く。>br<

「貴方の事です」>br<

「俺？……ああ、何も心配要らないと言ってるだろう？万事順調だ」>br<

「本当に？」>br<

「勿論」>br<

大きく頷き額に唇で触れて来たケニスの言葉を信じ、ティアファナは考え過ぎまいと自分に言い聞かせた。>br<

確かにここ数日彼の態度が落ち着かないと言っても、浮かれているのだと思えば納得出来ない事もない……ような気がしなくもない。

>br<

ただ少しそれに加えて時折上の空だったり指や足を小刻みに打ち鳴

らしたり夜はあまり眠れていないらしいくらいだ。> b r <
それが気に掛かって仕方がないと言えはそうなのだが。> b r <
「でもあまり眠れていないようですけど」> b r <

ティアファナが気付いたのはここ数日の内の三度ほどだが、もしかしたらもつと以前からなのかもしれない。> b r <

「ああ、抜け出したのに気付いていたのか。でもそれなら俺が部屋にいたのも知っているね？」> b r <

「はい。お仕事の事、気に掛かっていらっしゃるんですか？」> b r <

ケニスがベッドを出る気配でうつすらと目を覚ました時には、その言葉通り彼が机に向かって何かの書類を前にぼんやりとしていたのを思い出す。> b r <

どう声をかけていいものか迷っている内に眠りについてしまうのが常だったが。> b r <

「仕事ではないけど、早く書状が届かないものかなと思ってね」> b r <

仕事ではない書状とは一体何の事なのかと尋ねようとして、ケニスが宙を見ながら微笑んでいるのに気が付いた。> b r <

そしてそれを追っていたティアファナに彼も気付き、その微笑みを浮かべたまま愛しげに髪を撫でる。> b r <

「待ち遠しくて仕方がないんだ。なんだか子供の頃に戻ったみたいだな」> b r <

「子供の頃に？」> b r <

「そう、誕生日なんかにプレゼントは何が貰えるだろうって」> b r <

その言葉にティアファナは漸く思い至った。> b r <

ケニスにとってその書状とは、何か嬉しい知らせなのだろう。> b r <

それを待ち侘びていたのなら今までの行動にも言葉にも説明がつく。> b r <

「ケニスは子供の頃何が欲しかったですか？」>br<

「そうだな、一番覚えがあるのは枕かな」>br<

「枕？」>br<

思わずティアフアナは足の下に敷いていたクッションを見下ろす。

>br<

子供が欲しがるような物だろうかと思うも、ケニスはそれに笑って頷いた。>br<

「あれは……十二歳になったくらいの事だったか。あの頃母上が特に口喧しくてね」>br<

苦笑しながら言った彼にティアフアナは首を捻る。>br<

言葉は悪いように見えるが、実際今子供の頃を振り返るとそれが懐かしいとさえ感じてしまう。>br<

それに自分自身としてはあまりあれこれと怒られたなどという記憶はないので、あの楽しい義母が出来て本当に嬉しく思ったものだ。

>br<

「母上が娘を欲しがっていたのは知っているだろう？あの頃はもうそのの最高潮だったんだ」>br<

不運な事にケニス以降義理の両親に子供は出来なかったとの事だった。>br<

本当に娘がいたならさぞかし義母は可愛がったに違いないと、今の自分を顧みて頷く。>br<

「で、俺はと言うと十二歳という思春期を迎えていた。もう母上の可愛いケニ坊やじゃなくなったんだ」>br<

「ああ……男の子は却ってそういうものかもしれないね」>br<

父や兄に会々と、専らそんな話で締め括られる。>br<

それはもう何度も何度も「お前が娘で本当によかった」と。>br<

「毎日毎日言われるんだ、どうしてお前はそうなのどうして女の子じゃなかったのああ女の子を産みたかった！」>br<

天を仰いで見せたケニスに目を丸くしてからティアフアナはくすくすと笑う。>br<

勿論彼も本気でそんな事を信じた訳でもないし、義母とてそうだろう。 > b r <

昔から仲がよかったのだと思うと微笑ましくなる。 > b r <

本当にそんな事を思つて不仲だったのなら、尚更口になどしないものだ。 > b r <

「お蔭で俺はあの頃かなりの不眠症に悩まされたという訳だ。何せ夢の中まで母上の妄想話の中に出て来るピンクのドレスやアクセサリが追つて来るんだから」 > b r <

「それで枕なんですネ」 > b r <

ケニスは袈裟に溜息をつきながら頷いた。 > b r <

「父上に枕を強請つた時には医者と呼ばれかける始末で、全く大変だったんだよ」 > b r <

それはそうかもしれないとティアファナは笑い声を上げる。 > b r <

例えばどれだけ大人びていようと十二歳は子供そのものだ、そんな小さな我が子が一番欲しい物を枕と答えたら心配にもなるだろう。

> b r <

「そういえばお義父様、もう少しでお帰りになられるんですよね？」 > b r <

「うん、母上が何を言つてやろうかと身構えている様を見ると少し気の毒な気もするけどね。でも大体あの人に何を言つたって聞きやしないんだ」 > b r <

数度会つたきりの義父を思い出し、ティアファナは少し苦笑するに留める。 > b r <

悪い意味ではなくとても朗らかな人だが、それ故か実にマイペースで人の話を聞かないところがあるように思えるのだ。 > b r <

「まあ母上のような人を相手にするにはあのくらいでないとないないだろうけど」 > b r <

「とてもいいご両親だと思います。それにお義母様だつてご無沙汰していらっしゃるんですから、積もる話もあると思いますよ」 > b

r<

「積み過ぎてきつとがちがちに固まっているんだ」>br<
ティアファナがまた笑い出すと、ケニスはそれに目を細めてそつと額同士を合わせた。>br<

「あまり仰々しいのは好きじゃない人だし、積みりに積もつた話もあるだろうから、早々に二人きりにしてあげよう」>br<
「そうですね」>br<

尋ねるようにケニスの顔がまた少し近付き、ティアファナはそれに応えて目を閉じる。>br<

すぐに重ねられた唇は撫でるように触れて何度も啄ばむ。>br<
角度を変えて深く覆われると、自然と自分の唇も開き潜り込んで来た舌を受け入れた。>br<

何度も何度も経験した事だというのにいつも同じように鼓動は跳ね体温が上がるのがわかった。>br<

キスの合間に髪を優しく梳かれ力が抜けてしまう。>br<
唇を離れたケニスはティアファナの呼吸が整うよう深く胸に抱き寄せた後言った。>br<

「君は何か欲しい物があつた？」>br<
その言葉に蘇る記憶がある。>br<

「一度だけ……本当に小さな頃にどうしても言ってしまった事があつて、父や兄をとて困らせたんです」>br<

「デーン殿が君を困らせる姿なら大いに想像出来るけどね」>br<

実際ある意味兄にはよく困らせられていたとティアファナは笑う。
>br<

「母様に会いたいとお願いをしてしまったんです」>br<
「それは……」>br<

言葉を詰まらせたケニスに対し苦笑して頷いた。>br<
今思い返せば小さな子供の頃だったとはいえなんと無茶を言ったものだろう。>br<

ケニスとはまた違った意味かもしれないが、あの時の事はよく憶えている。>br<

何かの絵本がきっかけだった、その中に一番最初に輝く星に願い事をする何でも叶うと書いてあったのだ。>br<

その物語の中でさえそれが本当の事として書かれていたのかは忘れてしまったが、ティアファナはそれを見て一目散に外へと駆け出した。>br<

当時遊び友達の領域を出ていなかったアナは、突然姿を消したティアファナに驚き泣きながら探し回ったらしい。>br<

そしてあつという間に家中の大騒動となり大搜索となった。>br<結局庭の隅でティアファナを見つけたのはブレントとデーンだった。>br<

流石に一人歩きをした娘を叱ろうとやって来たブレントに幼いティアファナは言ったのだ。>br<

「父様、私、母様に会えるようにお願いをしていたの。父様も兄様も一緒にお星様をお願いして。私、母様にどうしてもお会いしたいの」と、ただ無邪気に。>br<

「今思い出しても顔から火が出そうです」>br<

「可愛らしい願いじゃないか。まあ、大人にとってはそうもいえないが」>br<

腰に回されたケニスの手に自分のそれを重ねて溜息をつく。>br<

「なんとなくはわかっていたんです、当時も。母様は亡くなつていて、もう会える事はないんだと。でもそんな無茶な願いだからこそ叶えてくれると思ったんでしょね」>br<

「お二人はどうされたんだい？」>br<

「ああだこうだと私を誤魔化す為に説明をしてくれたんです。でも二人共心底困った顔をして泣きそうになっているんですよ。それで諦めて終わりです」>br<

そして幼いながらも、死というものがこれほど周囲に影響を与え

るものだと言った。>br<

あの時諦めた娘の顔を見て何か言いたげにしながらも口を閉ざした父の顔をティアファナは一生忘れないだろうと思う。>br<
そんな顔をさせるのなら会えなくても我慢しなければならぬ、皆がきつとそうして過ごしているのだろうと考える事が出来た。>br<

ティアファナはそう話し、ふと肩を落とす。>br<

「でも暫くは怖くなってしまつて。小鳥を買つてくれるという兄の言葉に、死を想像して大泣きした事もありました」>br<

ケニスの片方の腕が上がつてティアファナの肩を撫で頬に手が触れる。>br<

「そういえば、前に俺が動物を飼いたいかと聞いたら妙な顔をしていた」>br<

「そうでしょう？時々恥ずかしい事と一緒に思い出すんです。それにやっぱり自分で育てるよりは、傍で見ている方が安心します。今は小鳥でさえも色々な病気になるのですって」>br<

友人の一人が飼っている小鳥が人間の年寄りのように神経を痛め動きが鈍くなつたのだと話す。>br<

それを聞いてティアファナはどんな動物も同じ生き物だと改めて感じると共に、落ち込んでいた友人を見て自分まで一緒になつて落ち込んでしまつた。>br<

「でもきつと君は一度手をかけてしまつたらこれ以上なく愛情を注ぐだろうな」>br<

「そうかもしれませんが。いつ失うかと恐れているだけでは、沢山の思い出だって作れませんから」>br<

そう言つたティアファナはケニスを見上げ、そつと背筋を伸ばして唇を重ねる。>br<

目を丸くした彼が少し可笑しくて微笑んだ。>br<

「貴方を好きになつて、私は色んな事を知りました」>br<

「それは俺もだよ」>br<

お互いが満足げに頷いたのにくすくすと笑いが零れ、そのままもう一度口付ける。>br<

緩く唇を開き舌が絡むと、隙間から濡れた息が溢れた。>br< かと思うとその息を奪うように強く唇を吸われ、思わずティアフアナがケニスの肩にしがみ付けば、触れたままの彼が微かに笑ったのを感じる。>br<

うつすらと目を開いたティアフアナはそのままケニスを少し睨み首に腕を巻き付けた。>br<

そして強く自分から唇を押し付けて未だ口内で蠢く彼の舌を軽く噛む。>br<

再び少しだけ唇を離してケニスは微笑んだ。>br<

「色んな君を知る度に俺はいつも驚かされる」>br<

「私だつて、いつまでも子供じゃないんですよ？」>br<

それに教えてくれたのは貴方です、と囁いたティアフアナにまた何度もキスが降って来た。>br<

「そうだね……でも君を子供だなんて思った事はないよ」>br<

「そうですか？」>br<

「君は俺の奥さんだからね」>br<

ほらと言つて抱き上げられたかと思うと、そのままソファに倒され覆い被さられる。>br<

額に流れた一筋の髪を手で脇に避け、ケニスはティアフアナを見て微笑んだ。>br<

「子供にこんな事はしないだろう？」>br<

言うなりくすぐるように音を立てて首筋に吸い付かれ、その感触にティアフアナは少し掠れた声で笑った。>br<

「そうだな、子供に対してするなら、こうだ」>br<

「きゃ、ふふっ……あははっ」>br<

「俺は子供もなかなかあやすのが上手いんだよ」>br<

脇をくすぐるケニスにティアフアナは身を振って大きく笑い声を上げる。>br<

それを追いかけて腕を伸ばして来たケニスに深く抱き締められた。

> b r <

「もう、お腹が痛いです」> b r <

「じゃあそれも治してあげようか」> b r <

言うなりティアファナの腹の中央に手を当て円を描くように撫でるケニスにまた笑いが零れてしまう。> b r <

「それもくすぐったいですよ」> b r <

「でおこれは慣れてもらわないとな。いずれ俺が毎日こうする日が来るんだから」> b r <

目を瞬かせたティアファナはその言葉の意味に思い至り、上気させた頬を益々赤くした。> b r <

「毎日するんですか？」> b r <

「勿論。リトルレディにも早く父親と認めて貰いたいからね」> b r <

それに思わず嘖き出す。> b r <

「女の子だって決まっていますか？」> b r <

「どうしてかな、そういう気がしてならないんだ。この間ブレント殿の話聞いた所為かもしれない」> b r <

「父様の？」> b r <

どうやら先日のティアファナの誕生日パーティーの折りに二人でそんな話になったらしい。> b r <

未だ妻の自慢を憚らずしているブレントに勿論ケニスも負けていなかった事をティアファナは知る由もなかったが。> b r <

「ああ、待ち遠しい」> b r <

ケニスはそう囁いてティアファナの腹に顔を埋める。> b r <

それを見下ろしながら彼の髪をゆつくりと撫でた。> b r <

「今からこうなんじゃ、実際子供が出来たらと思うと地に足が着きそうにないな」> b r <

「私も、待ち遠しいです」> b r <

ケニスはティアファナの手を取りそこへ口付けた唇を、体を起こ

してそつと上に近付けた。 > b r <

「ティアファナ、俺は生涯、君を大切にする」 > b r <

「私もです」 > b r <

「勿論、リトルレディも、それから他の子達も」 > b r <

「……一体何人の子供が出来るんですか？」 > b r <

くすくすと笑ったティアファナにキスを落としたケニス
は神妙な顔で言つた。 > b r <

「俺達の愛が育めるだけ」 > b r <

> b r < > b r <

番外編 2 - LAST

> b r < > b r <

「ケニスッ！」> b r <

「……え？……ああ、しまった」> b r <

「しまった、ではないですよ」> b r <

深く溜息をついたティアファナが顔を上げると、控えていた使用人達がケニスの零したスープを片付けていく。> b r <

新しい皿に換えては貰ったが、当のケニスはまたぼんやりとしてスプーンを宙に舞わせている。> b r <

その様子を見てティアファナは密かにまた溜息をついた。> b r <
納得はしていないものの理由を問うのは止めた訳だが、今度は別の意味で心配になってくる。> b r <

ティアファナに言われて以来ベッドからは出る事なく眠ってはいるようだ。> b r <

しかしその代わりと言わんばかりにぼんやり加減がこの頃では益々酷い。> b r <

今朝方も柱に足をぶつけたのにも気付かず、仕事から帰って来る頃になって漸く痛がつている始末だ。> b r <

「あの、まだ書状とやらは届かないのですか？」> b r <

「え？ああ、少し前に上で問題が起きてね、その関係であちこちに申請やら何やらが必要なんだ。前の時はすんなり進んだから、甘く見てたな」> b r <

そう言っって無意識に肩を落としている姿は全く少年だった。> b r <

ケニスが言っていた通り、プレゼントを待ち侘びて玄関に駆け出しではがっかりしている子供に見える。> b r <

「早く届くといいですね」> b r <

「うん、本当に」> b r <

どこか上の空で、ケニスは頷いた。 > b r <

その様子を見てティアフアナがセバスチャンに視線を向けると、彼にもどうしようもないのか申し訳なさに頭を下げてくる。 > b r <
また少し溜息をついて、ティアフアナも待つしかないのだと悟った。

> b r <

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r <

だがケニスの奇行は家の中だけには収まらなかった。 > b r <

「ティアフアナ！」 > b r <

「え？お、おかえりなさいっ、今日は随分と早い——」 > b r <

仕事に出たはずのケニスが昼に帰ってきたかと思うと、早足でティアフアナに寄ってきてその手を掴む。 > b r <

「さあ行こう、ティア」 > b r <

「はい？ちょ、ちよつと引つ張らないで下さいっ。一体どこに……
きやあ！」 > b r <

もどかしげな表情になったケニスはティアフアナを抱き上げて玄関ホールを突き進んで行く。 > b r <

使用人達も主人の奇行に怪訝そうな顔をしているが、こんな時の彼は止められるものではないと心得ているようだ。 > b r <

「もう、一体どこへ行くんですか？」 > b r <

押し込められるように馬車に乗せられ、御者に急げと告げているケニスに問えば、彼は回答を用意していなかったとばかりに考え込んでから顔を上げた。 > b r <

「デートだ、折角だから」 > b r <

「折角に繋がる事柄がわかりませんけど。それに外出をするなら着替えが必要だったのでは」 > b r <

「君はどんな格好でも綺麗だよ」 > b r <

大きく頷いたケニスが、それなら服をどこかで買おうかという提案をしたのには断りを入れる。 > b r <

ティアフアナは全く訳のわからない夫を見つめて小さく息をついた。
> b r <

そしてふと頭に浮かんだ思い出に笑いが零れる。 > b r <

「どうしたんだい？」 > b r <

「いえ、そういえば初めてのデートをした時も、貴方がそんな様子でいらっしやっただから」 > b r <

そう言われてケニスはやっと自分が忙しない態度でいた事を思い出したようだ。 > b r <

後でティアフアナも聞いた事だが、彼は完璧にデートを計画しようとするあまり、予定外の事に対処出来る余裕もなかったらしい。 > b r <

浮かれていたんだと白状されて、ティアフアナはとても嬉しかったのを憶えている。 > b r <

「ああ、そういえばあの時も浮かれていたな」 > b r <

「私も嬉しくて、それから凄く緊張してました」 > b r <

指を絡め手を握ってくる彼の手を握り返すと、やはりあの頃と同じように胸が高鳴って夢でも見ているような気持ちになった。 > b r <

変わった事といえば、その鼓動を聞かれやしないかと心配しなくなった事くらいだろうか。 > b r <

「進歩のない夫ですまない」 > b r <

「すまない事なんてありませんよ。ただどこへ行くかくらいは教えて頂けませんか？」 > b r <

「役場だよ。結婚の時にも行っただろう？」 > b r <

街中にある建物を頭に浮かべてティアフアナは頷いたが、次いでケニスを見上げて首を傾げた。 > b r <

役場に行かなくてはならないような事は何もなかったはずだ。 > b r <

「引越してもするんですか？」 > b r <

「君が望むならしてもいいよ。西にある大きな湖の近くはどうだい？」 > b r <

「い、いいえ、したいという意味ではなくて」 > b r <

やはりケニスは何事が相当に浮かれているらしいと、ティアフアナは密かに微笑む。 > b r <

あまりにぼうつとして怪我をするような事態は歓迎出来ないが、楽しそうな彼を見ているのは自分の心も弾んでくる。 > b r <
あの頃もお互いそうして浮かれ過ぎていて、あまり会話が噛み合わなかった事もあったなと思いついた。 > b r <

ふと窓の外を見やれば太陽の光に反射して石畳だけでなく行きかう人々の顔さえも輝いて見える。 > b r <

自分が楽しい時はそうして何でも素晴らしく見えるものだとも、少し苦笑した。 > b r <

「でもいずれは新しい家を建てようと思っているんだ」 > b r <
「そうなんですか？」 > b r <

ティアフアナはケニスの言葉にただ首を傾げる。 > b r <

今の屋敷も十分に素晴らしい、ケニスの母のセンスがいい所為もあるだろうが隅々にまで配慮がなされている。 > b r <

大ききこそ王城には敵わないだろうが、初めて屋敷に入った時はそれにも負けていないとさえ思ったものだ。 > b r <

今ではケニスのお蔭で厨房さえも様変わりして、ティアフアナには僅かな不満を抱く要素もない。 > b r <

「もう少し中を使いやすくして、それから庭を大きくして」 > b r <
「今でも充分素敵ですよ」 > b r <

「いや、これからを考えればそうはいかない」 > b r <
神妙な顔でケニスは頷く。 > b r <

確かに長い目で見ればあの屋敷を使い続ける事で老朽化などの問題も出ては来るだろう。 > b r <

しかしティアフアナにとってそれはまだまだ遠い事のように思えた。 > b r <

ケニスにはすでに見通している事があるらしく、次々と新居の案を語り始める。 > b r <

ティアフアナはそれに聞き入りながら目を閉じ、彼の言う新しい家

の事を思い浮かべた。>br<

豪華な今の屋敷とは違い、ティアファナの実家よりもっと庶民化しているような、可愛らしい家だ。>br<

広い庭には色取り取りの花が咲き乱れて、暖かい日差しの中で彼と寄り添う――。>br<

「そうだ、ついでに家具も見に行こう。ああそれから――」>br<

「ケニス、役場へ行かなくてはならないのでしょうか?」>br<

「ああ、うん、そうだった」>br<

ケニスが頭を掻くとお互いから零れた笑いが馬車の中を包む。>

br<

「それじゃあ終わったらあちこち見て回ろう」>br<

彼が何を考えているかはわからなかったが、ティアファナもそれに異存なく頷いた。>br<

まだ遠い先の事をあれこれ考えるのもまた楽しいものだ、二人一緒なら尚更。>br<

着いた役場ではティアファナが首を傾げなくなるほど目まぐるしく事は終わった。>br<

役人から一体何かと思うような質問を投げられ、それにケニスと答えている内に、結局何かの証明のサインをただけだった。>br<

「一体何だったんでしょうか?」>br<

「書類の内容を見ていなかったのか?」>br<

「あの、だって、ケニスが早くサインをと急かすものですから」>br<

ケニスはそれに笑いながら口ばかりで「すまない」と言う。>br<

役場を後にしてからの彼は、すっかり前にも増してご機嫌なようだった。>br<

しかし内容をきちんと確認していなかったとはいえ、ケニスの仕事でも何かの契約書でもなさそうだ。>br<

役人の質問もティアファナ個人の出生や結婚についてで、その証

明書を提出して出された書類にサインをしティアファナのやる事の全てが終わった。> b r <

役場に行くと言うのだから、むしろ何かしらの説明を長々と聞かされると思っただけに拍子抜けだ。> b r <

「うん、じゃあそれは家に帰ったらにして、服と家具を見に行こう」> b r <

「今からどこに出かけるんですか？」> b r <

「いや、夜の為にだよ。俺も何か新調しよう」> b r <

頭に疑問符をぎゅうぎゅうにさせながらも、ティアファナはあちこち目移りしているケニスを眺めながら、自分の足取りも軽くなっているのに気付く。> b r <

「あのお店の靴は如何ですか？オールビー公爵夫人が靴はあのお店が一番だと仰ってましたよ」> b r <

「ああ、あの店の物は俺も持っているな。ただ少しばかり畏まった靴だったんでなかなか履く機会もなくてね」> b r <

「でもケニスは私よりずっと夜会にも多く出ていらつしゃったでしょうに」> b r <

「どうも不真面目だったからね。ティアファナ、あの靴が君に似合いそうだ」> b r <

ショーウィンドウに出ている赤い靴を見たたん、ケニスはティアファナの手を引いて足早に歩き出す。> b r <

また抱き上げられやしないかと慌てて小走りについて行き、入った店ではあれこれと靴を取り替えられるだけでなく、ティアファナも存分にケニスの為の靴を吟味した。> b r <

> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <> b r <

山のような荷物を積み、再び馬車で走り出す頃にはすっかり日も落ちている。> b r <

ほっとティアファナが息をつくとき、ケニスは微笑んでその肩を抱き寄せてきた。> b r <

「家に着くまで少し眠るといい。今夜はまだ眠らせる訳にもいかな

いから」>br<

「何かあるんですか？」>br<

そう尋ねれば曖昧な笑みを返すケニスの意図を、やがて見えてきた屋敷の前に停まっていた馬車で察した。>br<

「お義父様が帰っていらしたんですねっ」>br<

「そうなんだ。少し予定を早めたようだね」>br<

「お義母様もお喜びになりますね。……どうかされました？」>br<

少しずつ家に近づいて行く中、ティアファナを自分の正面に向き直させたケニスが神妙な表情を作る。>br<

「前に俺の両親の時間を作ってあげようと話した事があっただろう？」>br<

「ええ、そうですね」>br<

きつと義母が義父に向かってあれやこれやと話し掛けている様子が浮かび、微笑んだまま頷いた。>br<

義父は飄々としているように見えるが、義母の話を聞き漏らしていないのだとティアファナも知っている。>br<

恐らくケニスもそうで、だから彼も今日の事は喜ばしく感じているのだろうと思われた。>br<

「君は、その、母が父について行きたいと言ったら、やはり寂しいだろうか？」>br<

一瞬言われた意味がわからず首を傾げそうになったが、その意味を察しティアファナは少し俯く。>br<

確かにこれまでは義母と過ごす時間が一番多かった。>br<

母がすでに他界している分、義母の事は本当に母とも慕っていたし、彼女が旅行に出ている間はぽっかりと穴が開いたようだと思った事もある。>br<

しかしティアファナは笑って首を振った。>br<

「寂しくないと言えば嘘になりますけど、そうならとてもいい事だと思います。私なら、お義母様のようにこんなに長い間貴方と

離れて過ごすなんて、きつと耐えられません」>br<

知ってしまった分、何もかも耐え難くなる。>br<

想像もつかない思いがただ寂しさだけを胸に降らせて、ティアフアナは少し唇を噛んだ。>br<

ケニスの指が伸びてきて、強張った唇をゆつくりと解していく。>br<

「俺一人で、君は我慢してくれるか？」>br<

「貴方が傍にいて下さる事が大事なんじゃないですか」>br<

流石にむっとして唇を尖らせると、ケニスが微笑みながら自分のそれで触れてくる。>br<

まるで詫びるように何度も啄ばまれ、ティアフアナは甘い溜息をついた。>br<

「もしかして、そういうお話が出ているんですか？でしたら、私は賛成です」>br<

「うん、君が家に一人で寂しいとか、退屈だとか思わなければいいんだ」>br<

「一人って……貴方が一緒ですよ。それに他の方々も」>br<

うんと頷いたケニスは停まった馬車の壁を叩き合図を送ると、ティアフアナの頬を撫でる。>br<

「アナの結婚が決まりそうだと言っていたが、彼女はずっと君の傍で仕事をするつもりがあるのか？」>br<

「ええ。その、行く行くはいずれ私達の子供に合わせて出産と育児を考えているみたいです」>br<

「そうか、それならうちの子を一人で遊ばせておく心配もないな」

>br<

いい案だと満足げに頷いたケニスは再び合図を送り、開けられたドアからティアフアナを抱き上げて外に出る。>br<

少し暖かくなってきたものの、肌寒い風が吹いて思わずティアフアナはケニスに擦り寄った。>br<

ぎゅっと抱え直されながら玄関先で下ろされると、それと同時に扉

が開きティアフアナは声を上げた。>br<

「まあ、お義父様！お久しぶりです。お帰りなさいませ」>br<
「久しぶりだね、ティアフアナ。皆お前達の帰りを首を長くして待
つてたよ」>br<

ケニスより少し目が垂れている彼は、そのまま実に柔らかく微笑
む。>br<

義父と抱擁を交わした後、広間に出たティアフアナは出て来た義母
の顔に嬉しさを募らせた。>br<

いつも元気な義母だが、やはり夫が帰ってきた事でいつも以上に何
もかも輝いているのが伝わってくる。>br<

ティアフアナは容姿が母に似て繊細そうだとよく言われ、だが本当
は快活な雰囲気義母のようになれたらと憧れていた分、益々彼女
が素晴らしく見えた。>br<

「もう、一体貴方達つたらどこで道草していたのかしら。ケニス、

お父様に挨拶は済んだの？」>br<

「はいはい、済ませましたよ」>br<

「ティアフアナ、今日はあちこちから取り寄せた物で食事を作らせ
たのよ。折角ですから、ケニスと一緒に着替えていらっしやい」>
br<

生き生きとしている彼女に二人は微笑みを交わして、部屋に戻る
間に一度嘖き出してしまった。>br<

「思った以上だったな。父上が自ら出迎えに出てきたという事は、
相当あれこれ聞かされたんだろう」>br<

「でもお義母様がお喜びで何よりですね」>br<

荷物を持ち遅れてやって来たアナに引っ張られ、ティアフアナは
先程店で買ったあれこれを箱の中から取り出して見る。>br<

「はああ、凄いですね。あつ、これ今貴族方で流行ってるドレスで
すね。……旦那様も旦那様のご帰宅に浮かれてらっしゃるんです
か？」>br<

「あら、どうして？」>br<

アナは怪訝そうな顔で美しいディープブルーのドレスを仰々しく掲げて見せた。 > b r <

裾は大き過ぎずふんわりと自然な広がりで、袖も丸い肩の部分から細い花を逆さにしたような優雅な流れだ。 > b r <

胸元や袖に付けられている花模様のレースも今までの物よりずっと大人びている。 > b r <

「だって旦那様、流行物はティアファナ様にお似合いにならないとか何とか文句をつけてばかりじゃないですか。それがほら、襟割りも流行の形！よっぽど何か浮かれているんだと考える方が自然つてもですよ。ああ、それにこの靴も！普段はあまりヒールの高い物は履かせるなんて人に散々言っておきながら！」 > b r <

アクセサリーやら香水まで買ってしまったのを見て、ティアファナも確かにと苦笑を禁じ得ない。 > b r <

ケニスのテンションに釣られてティアファナも彼の服や靴を見に散々巡って回った。 > b r <

「そうだ、アナにもお土産を買ったの。お式の時に使って貰おうと思つて」 > b r <

「そんな……そのお気持ちだけで充分ですのに」 > b r <

「だってこれからもずっとお世話になるつもりだもの。これくらい受け取って貰わなくちゃ」 > b r <

「ええ、勿論これからお子様の事はお任せ下さい！私自身の子育ては初めてですけど、これでも弟や妹や近所の子達で子供の世話はなれてますからね」 > b r <

「そうね、いずれ」 > b r <

するとアナが目を見開いて凝視してきたのに、ティアファナは慌てて首を振った。 > b r <

「まさか私の子供が出来たなんて思っていないでしょう？」 > b r <

「いえ、勿論それは存じておりますが。……そう遠い話の事でもないと思うんですけどねえ」 > b r <

気が早いのかとティアファナは笑ったが、アナは口元を歪めなが

ら奇妙な空笑いを零す。>br<

それでもさくさくと身支度の手伝いを終えると、鏡の前に立つティ
アフアナの後ろでアナが満足げに頷いた。>br<

「よくお似合いです。今まではどちらかと言えば可愛らしいドレス
ばかりでしたけど、誰が見ても立派な貴婦人でいらっしやいますよ」
>br<

「本当に？こういう形の物は着慣れない所為か、なんだか自分が浮
いて見えるわ」>br<

「そういうものでございますよ。嫁がれるまでお化粧一つなさった
事がなかったんですからね」>br<

「そういえばそうよね。いつの間にか、お化粧をする顔にも慣れた
わ」>br<

「ええ、ええ、大変お美しくなられて。旦那様もきつと腰を抜かし
ますよ」>br<

ティアフアナはまさかと笑ったが、アナは至極真面目な顔でただ
両腕を組む。>br<

やがて部屋に迎えに来たケニスは腰こそ抜かさなかったものの、テ
ィアフアナとアナが声をかけるまでドアの前で柱のように突っ立っ
ていた。>br<

言った通りでしようとはばかりにアナがティアフアナを一瞥し、さあ
と急かして漸くケニスが動き出す。>br<

「とてもよく似合っている。今宵の君にこうべを垂れない男はい
ないだろうな」>br<

そして宣言通り跪き、取った手に口付けた彼を見てティアフアナ
からくすくすと笑みが零れる。>br<

「貴方もとても素敵です」>br<

裾を摘み上げ礼を返すと、差し出された腕に手を絡めて歩き出す。
>br<

まるで舞踏会にでも赴くような出で立ちだなと思い、それを告げる
とケニスは笑った。>br<

「今日は特別な日には違いない」>br<

「ご両親の結婚記念日でしたか？」>br<

「そうじゃない。でも楽しみは後に取っておく。不思議なものだ、あれほど今日を待ち侘びていたのに。今はね、もっとゆっくり過ごしたいと思う」>br<

そう言った彼は確かに、歩く足の速度を落とす。>br<

>br<>br<>br<>br<>br<>br<

着替えもせずそのままケニスと呼ばれたティアファナは、不満そうなアナを宥めて後を追った。>br<

薦められるまま椅子に腰を下ろせば、じんわりと先程までの温かさがまた蘇ってくる。>br<

結婚式もかくやという料理は食べ切れないほどだったが、義母がご機嫌なまま使用人達にも振舞ったので捨てるなどという心配もなかった。>br<

食べて、少々酒を飲み、そしてケニスだけでなく義父ともダンスを踊った。>br<

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまったが、ティアファナは生涯この日の事も忘れないだろうと思う。>br<

式の際は緊張していた上、あれこれと挨拶をする人が多く、正直言えは何をしていたかはあまり思い出せない。>br<

先日の誕生日の時も幸せだと思った、今日も、そして毎日そう感じる。>br<

「疲れてないかい？」>br<

「ええ、大丈夫です。何と言ったらいいのか、……とても満たされた気持ちです」>br<

義理の両親の表情を思い浮かべ、ティアファナはまた知らず微笑んだ。>br<

「それならいいが。少し心配したんだ、疲れてすぐ眠ってしまうんじゃないかと」>br<

「少し前までは。けど今は眠ってしまうのが惜しいくらいですよ」

> b r <

今日という日を終わらせるのが勿体無くて、出来ればもう少し夜更かしをしたい。 > b r <

それを察したからケニスは着替えもせず寝室へ来たのだろうかと見上げると、いつの間にか目の前に来ていた彼が膝を折った。 > b r <
そしてティアファナの手を取り、それを自分の胸へと触れさせる。

> b r <

「わかるだろうか、俺の鼓動が」 > b r <

言われた言葉に指先に神経を集中させると、少し早い鼓動が鳴っているのが感じられた。 > b r <

領けば、ケニスが真摯にティアファナを見上げる。 > b r <

「俺の全てが君のものだ。もしこの先俺が君の意志に反する事をしたのなら、どうしても構わない」 > b r <

「貴方が私の意志に反する事なんて……」 > b r <

「うん、まあ、するつもりはない。そういう意思が俺にあるという事を伝えたいんだ」 > b r <

ティアファナはそれに頷き、今度はケニスの手を取って同じように自分の胸に触れさせる。 > b r <

「私も、私の全て、貴方のものです」 > b r <

目を細め、まるで少年のようにケニスが微笑む。 > b r <

「誕生日おめでとう、ティアファナ」 > b r <

「先日も祝って頂きましたよ？」 > b r <

「本当に気付いてないのか？……これをご覧」 > b r <

彼が胸ポケットから取り出したのは、今日ティアファナがサインをした書類の一つだ。 > b r <

それを手に取り改めて眺め、はっと顔を上げて目前に迫っていた彼を見上げる。 > b r <

「今日のこの日、君は成人と認められた」 > b r <

「はい」 > b r <

「だから、今日からは君を、俺の妻としてだけでなく、大人として

扱う」>br<

「はい」>br<

答えたとたん、ティアファナの頭にぱつと全てが閃いた。>br<
最近のケニスのおかしな行動、何かを待ち侘びている様子、義母と離れたらと聞かれた事、新しい家の事――。>br<

「私、まだきつと他の方に比べたら大人とは呼べないかもしれないかもしれません」>br<

そつとケニスの両手を取って握れば、しっかりと強く握り返される。>br<

その確かな力強さが、自分を支えてくれる気がした。>br<
これからずつと、何があつても。>br<

「貴方に相応しくなりたいとこれまで自分なりに頑張ってきましたけど、それでもきつとまだまだだとわかつてます」>br<

「ティアファナ」>br<

「でもそんな私を、貴方がこれからも愛してくれると、信じてます」>br<

手を解き、お互いを強く抱き締めた。>br<

自分自身にも確信は持てないままだけれど、伝わるぬくもりがまた新しい道を歩く力になる。>br<

「ティアファナ、俺は君を愛して本当によかつた」>br<

「ケニス、貴方を愛せる事に感謝します」>br<

ぬくもりを確かめるように、分け合うように、触れるだけの口付けが続く。>br<

抱き上げられ、ベッドに運ばれたティアファナは背中にシーツの感触を感じ、少し微笑んだ。>br<

「貴方がどうしてこのドレスがいいって仰つたのか、わかりました」>br<

「やつぱり君は大人になつたね」>br<

ふふと笑い合つた唇を重ね、やがて深く求め合う。>br<

>br<>br<

> これからずっと、何があっても。
> br
<

番外編 2 - LAST (後書き)

また何かネタが出来たら追加したいと思いますが、一度これにて更
新終了とさせて頂きます。

お付き合い頂き本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5086/>

いとしのあなた（シリーズ版）

2011年5月25日20時43分発行